

桑原地区の遺跡Ⅳ

桑原本郷遺跡・桑原遺跡・桑原小石原遺跡

東野お茶屋台遺跡1次・2次・3次

2002

松山市教育委員会

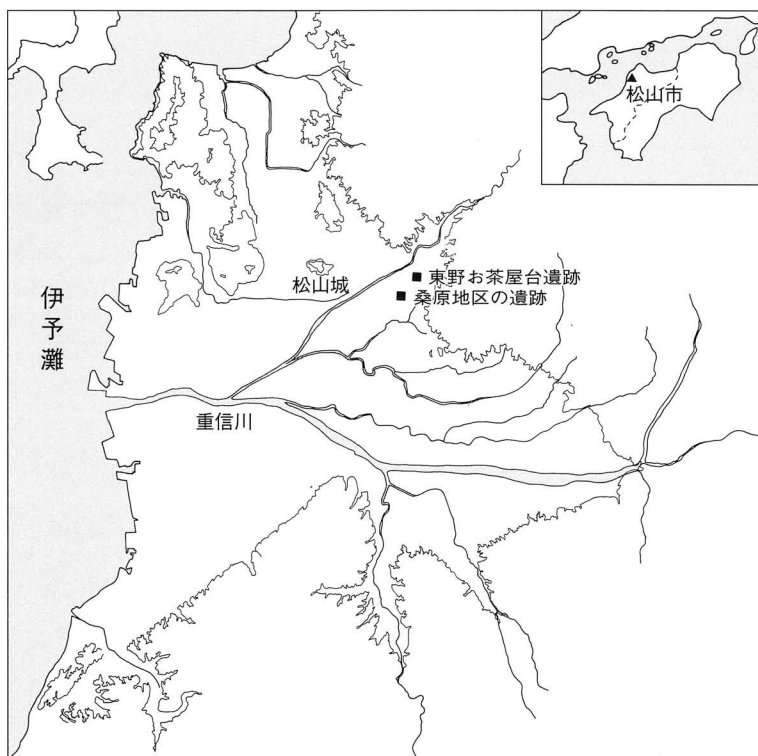
財団法人松山市生涯学習振興財団

埋蔵文化財センター

くわぼら 桑原地区の遺跡Ⅳ

桑原本郷遺跡・桑原遺跡・桑原小石原遺跡

東野お茶屋台遺跡1次・2次・3次



2002

松山市教育委員会

財団法人松山市生涯学習振興財団

埋蔵文化財センター

序

本書は、昭和50年度から昭和60年度までに、松山平野北東部の桑原地区で実施した6遺跡の埋蔵文化財の発掘調査報告書です。

桑原地区は石手川南岸に位置し、近年の急増する宅地開発に伴う事前調査によって、平地部には弥生時代～古墳時代集落が数多く存在し、丘陵部には群集墳が多数確認されてきました。

今回報告します桑原本郷遺跡、桑原小石原遺跡、桑原遺跡は平地部の古墳時代集落跡で、特に桑原本郷遺跡では古墳時代中期の祭祀遺構が確認され、重要な資料になっています。

また、東野お茶屋台遺跡は、江戸時代の松山藩庭園として著名ですが、調査によって、一帯は古墳が群集し、古墳を庭園に取り込んで造形されていた様子が復元できてきました。

こうした成果をあげられましたのは、関係各位の埋蔵文化財に対する深いご理解とご協力の賜であり、厚く感謝申し上げます。

本書が、埋蔵文化財の調査研究の一助となり、ひいては文化財保護、生涯教育の向上に寄与できることを願っております。

平成14年3月29日

財団法人松山市生涯学習振興財団
理事長 中村時広

例 言

1. 本書は、松山市教育委員会が昭和50年6月～60年9月に実施した松山市東野に所在する東野お茶屋台遺跡、同市桑原に所在する桑原本郷遺跡、桑原遺跡、桑原小石原遺跡の発掘調査報告書である。

2. 刊行組織〔平成14年3月29日現在〕

松山市教育委員会	教 育 長	中矢 陽三
事 務 局	局 長	大西 正氣
	次 長	川口 岸雄
	企 画 官	一色 巧
文 化 財 課	課 長	馬場 洋
(財)松山市生涯学習振興財団	理 事 長	中村 時広
	事 務 局 長	二宮 正昌
	事 務 局 次 長	江戸 孝
	事 務 局 次 長	森 和朋
埋 蔵 文 化 財 セ ン タ ー	所 長	中川 隆
	専 門 監	野本 力
	調 査 係 長	西尾 幸則
	調 査 主 任	栗田 正芳（文化財課職員）
	調 査 員	栗田 茂敏・梅木 謙一 宮内 慎一・大西 朋子

3. 遺構は呼称名を略号化して記述し、竪穴式住居址：S B、溝：S D、土坑：S K、柱穴・小穴：S P、その他：S Xとした。

4. 遺物の実測・製図、遺構の製図は栗田茂敏、梅木謙一、宮内慎一の指示のもと、水口あをい、山下満佐子、平岡直美、大西陽子、日之西美春、西本三枝、丹生谷道代、築山知子、矢野久子、多知川富美子、平岡華美、山之内聖子、吉岡智美が行った。

5. 遺構図の縮尺は、縮分値をスケール下に記した。

6. 本書に使用した方位は磁北である。

7. 遺構の撮影は担当者が行い、遺物の撮影は大西朋子が担当した。

8. 報告書の作成に際しては、森 光晴氏と山内英樹氏（財団法人愛媛県埋蔵文化財調査センター）に指導と協力を賜った。

9. 本書にかかわる遺物・記録類は、松山市立埋蔵文化財センターで収蔵・保管している。

10. 本書の執筆は、栗田茂敏と梅木謙一が事実報告をし、第8章は山内英樹氏に考察をお願いした。
なお、第6・7章の遺物の版組と観察表は、須恵器は宮内慎一、埴輪は山内英樹氏が作成している。

11. 本書の編集は、梅木謙一が行い、水口あをいの協力を得た。

12. 製版：写真図版－135線、印刷：オフセット印刷、用紙：マットコート、製本：アジロ綴じ

本文目次

第1章	はじめに	〔梅 木〕	1	
	1. 調査・刊行の経緯	2. 遺跡名について	3. 遺跡の立地	4. 歴史的環境
第2章	桑原本郷遺跡	〔栗 田〕	9	
	1. 調査の経過	2. 層 位	3. 遺構と遺物	4. 小 結
第3章	桑原遺跡	〔梅 木〕	43	
	1. 調査の経過	2. 調査概要		
第4章	桑原小石原遺跡	〔梅 木〕	47	
	1. 調査の経過	2. 遺構と遺物		
第5章	東野お茶屋台遺跡 1次調査地	〔梅 木〕	55	
	1. 調査の経過	2. 遺構と遺物		
第6章	東野お茶屋台遺跡 2次調査地	〔梅木・宮内〕	61	
	1. 調査の経過	2. 遺構と遺物	3. 小 結	
第7章	東野お茶屋台遺跡 3次調査地	〔梅木・宮内・山内〕	83	
	1. 調査の経過	2. 遺構と遺物	3. 小 結	
第8章	考 察	〔山 内〕	111	
	東野お茶屋台遺跡（3次）出土埴輪の諸問題～18号墳出土資料より～			
第9章	調査の成果と課題	〔梅 木〕	118	

挿図・表・写真図版目次

第1章 はじめに

表1	調査地一覧	
表2	東野お茶屋台遺跡の古墳名	
表3	各文献掲載の遺跡名正誤表	
表4	愛媛県内古墳一分布調査報告書一平成3年3月(1991)愛媛県教育委員会発行の正誤表	
第1図	調査地周辺の遺跡分布図(縮尺1/25,000)	7

第2章 桑原本郷遺跡

第2図	調査地位置図(縮尺1/2,500)	11	
第3図	調査地と発掘区(縮尺1/400)	12	
第4図	調査区東壁土層図(縮尺1/50)	13	
第5図	遺構配置図(縮尺1/100)	15	
第6図	S B 1 測量図(縮尺1/40)	17	
第7図	S B 1 遺物出土状況(縮尺1/20)	18	
第8図	S B 1 出土遺物(縮尺1/3・1/4)		
第9図	掘立柱建物1測量図(縮尺1/40)	19	
第10図	S X 1 遺物出土状況(縮尺1/20)	20	
第11図	S X 1 出土遺物(1)(縮尺1/3)	21	
第12図	S X 1 出土遺物(2)(縮尺1/3・1/4)	22	
第13図	S X 1 出土遺物(3)(縮尺1/1)	23	
第14図	S X 1 出土遺物(4)(縮尺1/1)	24	
第15図	S K 1・S D 1 測量図(縮尺1/40)	25	
第16図	包含層出土遺物(縮尺1/2・1/3・1/4)	26	
表5	S B 1 出土遺物観察表(土製品)	表6	S X 1 出土遺物観察表(土製品)
表7	S X 1 出土遺物観察表(滑石製白玉)	表8	包含層出土遺物観察表(土製品)
表9	包含層出土遺物観察表(石製品)		
写真1	調査地全景(北より)	写真2	完掘状況全景(南より)
写真3	S B 1 遺物出土状況(北西より)	写真4	S B 1・S D 1 近景(南西より)
写真5	掘立1完掘状況(北東より)	写真6	S K 1・S D 1 近景(西より)
写真7	S X 1 遺物出土状況(1)(東より)	写真8	S X 1 遺物出土状況(2)
写真9	S B 1・S X 1 出土遺物	写真10	S X 1・包含層出土遺物

第3章 桑原遺跡

第17図	位置図(縮尺1/2,500)	44	
第18図	調査区測量図(縮尺1/1,000)	45	
写真11	調査地全景(南西より)	写真12	性格不明遺構(南東より)

第4章 桑原小石原遺跡

第19図	遺構配置図 (縮尺 1/400)	48
第20図	包含層・グリッド出土遺物実測図 (縮尺 1/3・1/4)	50
第21図	出土地点不明遺物実測図 (縮尺 1/3・1/4)	51
表10	出土遺物観察表 (土製品)	表11 出土遺物観察表 (石製品)
写真13	調査地全景 (西より)	写真14 遺構完掘状況 (南より)
写真15	出土遺物	

第5章 東野お茶屋台遺跡1次調査地

第22図	調査地位置図 (縮尺 1/2,500)	56
第23図	調査地測量図 (縮尺 1/400)	57
第24図	溝断面図・溝出土遺物実測図 (縮尺 1/20・1/4)	58
表12	溝出土遺物観察表 (土製品)	
写真16	調査地全景 (南より)	写真17 S D 1 完掘状況 (北より)
写真18	S D 1 出土遺物	

第6章 東野お茶屋台遺跡2次調査地

第25図	遺構配置図 (縮尺 1/400)	62
第26図	12号墳出土遺物実測図 (縮尺 1/3・1/4)	63
第27図	13号墳出土遺物実測図 (1) (縮尺 1/3)	64
第28図	13号墳出土遺物実測図 (2) (縮尺 1/3)	65
第29図	14号墳出土遺物実測図 (1) (縮尺 1/3)	67
第30図	14号墳出土遺物実測図 (2) (縮尺 1/3)	68
第31図	14号墳出土遺物実測図 (3) (縮尺 1/3)	69
第32図	14号墳出土遺物実測図 (4) (縮尺 1/3・1/4)	70
第33図	14号墳出土遺物実測図 (5) (縮尺 1/3・1/4)	71
第34図	S D 1・地点不明遺物実測図 (縮尺 1/3・1/4)	72
表13	出土遺物観察表 (土製品)	表14 出土遺物観察表 (石製品)
表15	出土遺物観察表 (鉄製品)	
写真19	調査地全景 (西より)	写真20 12号墳完掘状況 (南より)
写真21	13号墳遺物出土状況 (南西より)	写真22 14号墳・S D 1 完掘状況 (南西より)
写真23	15号墳完掘状況 (北より)	写真24 15号墳主体部 (北西より)
写真25	12号墳出土遺物	写真26 13号墳出土遺物 (1)
写真27	13号墳出土遺物 (2)	写真28 14号墳出土遺物 (1)
写真29	14号墳出土遺物 (2)	写真30 14号墳出土遺物 (3)
写真31	14号墳出土遺物 (4)	写真32 S D 1 出土遺物

第7章 東野お茶屋台遺跡3次調査地

第35図	遺構配置図（縮尺1／400）	84
第36図	16・17・18号墳（1）出土遺物実測図（縮尺1／3・1／4）	86
第37図	18号墳出土遺物実測図（2）（縮尺1／3）	88
第38図	18号墳出土遺物実測図（3）（縮尺1／3）	89
第39図	18号墳出土遺物実測図（4）（縮尺1／3）	90
第40図	19号墳出土遺物実測図（1）（縮尺1／3）	91
第41図	19号墳出土遺物実測図（2）（縮尺1／3・1／4）	92
第42図	S K 8 出土遺物実測図（縮尺1／3）	93
第43図	出土地点不明遺物実測図（1）（縮尺1／3）	94
第44図	グリッド・出土地点不明遺物実測図（2）（縮尺1／3・1／4）	95
表16	出土遺物観察表（土製品）	表17 出土遺物観察表（鉄製品）
表18	出土遺物観察表（石製品）	
写真33	調査地全景（南西より）	写真34 16・17・19号墳検出状況（西より）
写真35	17・18号墳検出状況（西より）	写真36 16・17・19号墳完掘状況（西より）
写真37	16号墳完掘状況（北西より）	写真38 17号墳完掘状況（西より）
写真39	18号墳完掘状況（北西より）	写真40 18号墳遺物出土状況（北より）
写真41	16・19号墳完掘状況（西より）	写真42 S K 8 完掘状況（南より）
写真43	S K 8 遺物出土状況（1）（北より）	写真44 S K 8 遺物出土状況（2）（南より）
写真45	17号墳出土遺物・18号墳出土遺物（1）	写真46 18号墳出土遺物（2）
写真47	18号墳出土遺物（3）	写真48 19号墳出土遺物（1）
写真49	19号墳出土遺物（2）	写真50 出土遺物（S K 8・グリッド他）

第8章 考 察

第45図	18号墳出土埴輪・観察図	112
第46図	断面「三角形」タガ・関係実測図（縮尺1／4・1／6）	114
第47図	基底部調整・関係実測図（縮尺1／4・1／6）	115

第1章 はじめに

1. 調査・刊行の経緯

調査：今回報告する桑原本郷遺跡・桑原遺跡・桑原小石原遺跡・東野お茶屋台遺跡（1～3次）の発掘調査は、宅地造成に伴う事前調査であり、昭和50年度～昭和60年度に調査を実施したものである。

各地は、松山市が指定する埋蔵文化財包含蔵地内にあり、申請後に書類審査、試掘、立会等を経て、本格調査の必要を認めた上で、調査が行われた。

なお、桑原本郷遺跡は「82 東本遺物包含地」、桑原遺跡は「84 経石山古墳、85 三島神社古墳跡」、桑原小石原遺跡は「83 枝松遺物包含地」内、東野お茶屋台遺跡は「79 お茶屋台古墳群」内にある。

整理：各調査では、野外調査終了後に測量図と写真の整理、遺物の洗浄・注記・接合をしている。本格的な整理作業は、平成12・13年度に行い、遺物の復元・実測、記録類の整理を進め、この間には当時の調査担当者に助言や指導を得て、作業の円滑化と内容充実につとめた。

報告：各調査については、すでに概要が『松山市史料集 考古編Ⅱ』、『愛媛県史 資料編 考古』、『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅰ』等で公表されている。

今回の本報告では、調査が20数年前のものもあり、記録類が充分でないものが多い。よって、報告は公表された概要と詳細な日誌、記録写真、当時の担当者からの助言を基に作成することにした。

その結果、東野お茶屋台古墳に関しては公表内容の訂正、古墳番号の修正が必要になり、特に測量値は多くの修正を必要としたが、先の事情から概数値を提示するにとどまった。

2. 遺跡名について

東野お茶屋台古墳群に関する訂正・修正が生じている。まず、遺跡名は、同古墳群を含む地域は埋蔵文化財包含蔵地「79 お茶屋台古墳群」に指定されており、この範囲内を東野お茶屋台遺跡とする。次に、東野お茶屋台古墳の古墳番号に重複があり、本報告書が刊行された『東野遺跡埋蔵文化財調査報告書』愛媛県教育委員会1979年を基に古墳番号を決定した。今回報告の古墳は、同報告書等のつづき番号になる。修正・訂正については、表2～4と正誤文章を付したので、要参照いただきたい。

表1 調査地一覧

遺 跡 名	現所在（松山市）	申請面積(m ²)	調 査 期 間
桑 原 本 郷	桑原四丁目7-40・7-1	1,756うち365	1985年9月27日～同年10月17日
桑 原	桑原七丁目3-27・28・37	2,379うち100	1975年5月24日～同年5月29日
桑 原 小 石 原	桑原六丁目4-42	1,392	1977年3月2日～同年3月25日
東野お茶屋台1次	東野五丁目甲898-48	495	1976年4月16日～同年4月30日
東野お茶屋台2次	東野五丁目甲898-14	532	1976年5月13日～同年6月14日
東野お茶屋台3次	東野五丁目甲898内	1,470	1977年7月5日～同年7月27日

表2 東野お茶屋台遺跡の古墳名

	古墳名	形状	外表施設	内部主体	遺物	備考
東野お茶屋台遺跡 4次調査地	1号墳					不明・未調査
	2号墳	(円)				未調査
	3号墳	(円)				未調査
	4号墳	(円)				未調査
	5号墳	(円)				未調査
	6号墳	(円)				未調査
	7号墳					不明・未調査
	8号墳					不明・未調査
	9号墳	(方)	周溝(方形)	不明	須恵器・土師器・埴輪・鉄剣・鉄鏃・石鏃・銭貨・弥生	
	10号墳	(円)	周溝状	不明	須恵器・埴輪・石器・弥生	
東野お茶屋台遺跡 5次調査地	11号墳	円		横穴式石室(第1)	須恵器・耳環・鉄斧・鉄鏃	
				横穴式石室(第2)	土師器	
				竪穴式石室(第3)		
東野お茶屋台遺跡 2次調査地	12号墳	円	周溝	不明	須恵器・弥生	
	13号墳	円	周溝	不明	須恵器・埴輪・石器	
	14号墳	円	周溝	不明	須恵器・埴輪・鉄製品・石鏃・弥生	
	15号墳	円	周溝	石室?		
東野お茶屋台遺跡 3次調査地	16号墳	円	周溝	不明	弥生	
	17号墳	円	周溝	不明	須恵器・弥生	
	18号墳	円	周溝	不明	須恵器・埴輪・鉄製品・土師器	
	19号墳	円	周溝	不明	須恵器・弥生・石器	

表3 各文献掲載の遺跡名正誤表

本報告書	東野お茶屋台遺跡 1次調査地	東野お茶屋台遺跡 2次調査地	東野お茶屋台遺跡 3次調査地	東野お茶屋台遺跡 4次調査地	東野お茶屋台遺跡 5次調査地
		東野5丁目甲898-48 古墳なし	東野5丁目甲898-14 12号墳 13号墳 14号墳 15号墳	東野5丁目甲898内 16号墳 17号墳 18号墳 19号墳	東野4丁目乙219-1 2号墳 3号墳 4号墳 5号墳 6号墳 9号墳 10号墳
東野遺跡埋蔵文化財 調査報告書 1979				東野遺跡 東野町4丁目乙219-1 2号墳 3号墳 4号墳 5号墳 6号墳 9号墳 10号墳	
愛媛県史 資料編・考古 P480~482		1次調査 東野町4丁目乙219-1	3次 東野町4丁目乙219-1	第4次調査 東野町4丁目乙219-1	
愛媛県史 原史・古代I P570・571		東野御茶屋台遺跡			
松山市史料集 考古編II 第2巻抜刷 P200・201	2次調査区 東野5丁目甲898	第1次調査区 東野5丁目甲898-48	第3次調査区	第4次調査区	
		3号墳	1号墳 3号墳 4号墳 2号墳		9号墳 10号墳

表4 愛媛県内古墳 一分布調査報告書一 平成3年3月(1991)愛媛県教育委員会発行の正誤表 (一 部分誤)

番号	名称	所在地	所有	立地	現況	墳丘		内部主体		出土遺物	旧番号		備考
						墳形	規模等	種類	規模等		愛媛県	全国	
267	東野お茶屋台1号墳	東野5丁目甲898	県	丘陵裾	公園	円	径15、周溝、埴輪(円筒)			鉄器、須恵器(蓋・高坏・甕・甌)、土師器	79-1	11-86	文献3・114・117・118・119・199
268	東野お茶屋台2号墳	東野5丁目甲898	県	丘陵裾	公園	円	径10、周溝				79-1	11-86	文献3・114・117・118・119
269	東野お茶屋台3号墳	東野5丁目甲898	県	丘陵裾	公園	円	径10、周溝			須恵器	79-1	11-86	文献3・114・117・118・119
270	東野お茶屋台4号墳	東野5丁目甲898	県	丘陵裾	公園	円	径15、周溝、埴輪				79-1	11-86	文献3・114・117・118・119
271	東野お茶屋台5号墳	東野5丁目甲898	県	丘陵裾	公園	円	径8				79-1	11-86	文献3・114・117・118・119
272	東野お茶屋台6号墳	東野5丁目甲898	県	丘陵裾	公園	円	径8				79-1	11-86	文献3・114・117・118・119
273	東野お茶屋台7号墳	東野5丁目甲898	県	丘陵裾	公園	円	不明				79-1	11-86	文献3・114・117・118・119
274	東野お茶屋台8号墳	東野5丁目甲898	県	丘陵裾	公園	不明	不明				79-1	11-86	文献3
275	東野お茶屋台9号墳	東野4丁目	県	丘陵裾	研修所	方	周溝、埴輪(円筒・形象)			鉄製武器(鉄鏃)、須恵器(甕・甌・坏身・高坏・器台)	79-1	11-86	文献3
276	東野お茶屋台10号墳	東野4丁目	県	丘陵裾	研修所	円	周溝、埴輪(円筒)			須恵器(長頸壺・器台)	79-1	11-86	文献3

(正)

番号	名称	所在地	所有	立地	現況	墳丘		内部主体		出土遺物	旧番号		備考
						墳形	規模等	種類	規模等		愛媛県	全国	
267	東野お茶屋台1号墳	不明	不明	不明	不明	不明	不明				79-1	11-86	不明
268	東野お茶屋台2号墳	東野4丁目	県	丘陵頂	公園	円	不明				79-1	11-86	文献3・117・119
269	東野お茶屋台3号墳	東野4丁目	県	丘陵頂	公園	円	不明				79-1	11-86	文献3・117・119
270	東野お茶屋台4号墳	東野4丁目	県	丘陵頂	公園	円	不明				79-1	11-86	文献3・117・119
271	東野お茶屋台5号墳	東野4丁目	県	丘陵頂	公園	円	不明				79-1	11-86	文献3・117・119
272	東野お茶屋台6号墳	東野4丁目	県	丘陵頂	公園	円	不明				79-1	11-86	文献3・117・119
273	東野お茶屋台7号墳	不明	不明	不明	不明	不明	不明				79-1	11-86	不明
274	東野お茶屋台8号墳	不明	不明	不明	不明	不明	不明				79-1	11-86	不明
275	東野お茶屋台9号墳	東野4丁目乙219-1	県	丘陵裾	研修所	方	周溝、埴輪(円筒・形象)			鉄製武器(鉄鏃)、須恵器(甕・甌・坏身・高坏・器台)	79-1	11-86	文献3・117
276	東野お茶屋台10号墳	東野4丁目乙219-1	県	丘陵裾	研修所	円	周溝、埴輪(円筒)			須恵器(長頸壺・器台)	79-1	11-86	文献3・117

<上記表では表せない正誤>

『愛媛県史 原史・古代Ⅰ』

・ P 570 12～13行目

誤) 中でも1号墳は明らかに…

→ 正) この1号墳は何次調査地の何号墳を示すか不明

『松山市史料集 第1巻 考古編』

・ P 363 写真キャプション

誤) 2次の全景

→ 正) 3次の19号墳

誤) 3次の全景

→ 正) 2次の全景

・ P 365

誤) 東野遺跡出土遺物Ⅰ

→ 正) 東野お茶屋台遺跡出土遺物Ⅰ 1・2 : 2次調査13号墳、3・4 : 3次調査19号墳

・ P 366

誤) 東野遺跡出土の須恵器

→ 正) 東野お茶屋台遺跡出土遺物Ⅱ 5・6(蓋)・9 : 3次調査19号墳、6(高坏)・7 : 2次調査14号墳、8 : 2次調査13号墳

・ P367

誤) 東野遺跡出土遺物 → 正) 東野お茶屋台遺跡出土遺物Ⅲ 10・11・12・13(蓋)・
14: 3次調査19号墳、13(身): 3次調査X 7 Y10、
15: 2次調査13号墳

・ P368

誤) 東野遺物実測図 → 正) 東野お茶屋台遺跡出土遺物実測図

『松山市史料集 考古編Ⅱ・第2巻抜刷』

・ P202 写真キャプション

誤) 第16図 東野お茶屋台古墳群第三次調査区出土須恵器
→ 正) 第16図 東野お茶屋台遺跡二・三次調査地出土遺物

・ P421

誤) 18、19、東野御茶屋跡一次 → 正) 18: 東野お茶屋台遺跡2次調査13号墳、19: 東野お
茶屋台遺跡3次調査19号墳

・ P422

誤) 15、20、東野御茶屋一次 → 正) 15・20: 東野お茶屋台遺跡3次調査19号墳

・ P424

誤) 15～16、東野御茶屋跡 → 正) 15・16: 東野お茶屋台遺跡(2次か3次)

・ P425

誤) 7、東野御茶屋跡1次 → 正) 7: 東野お茶屋台遺跡2次調査14号墳

・ P426

誤) 12・19 東野御茶屋跡 → 正) 12・19: 出土遺跡名不明

・ P427

誤) 8、東野御茶屋跡 → 正) 8: 出土遺跡名不明

・ P428

誤) 10、東野御茶屋跡 → 正) 10: 出土遺跡名不明

・ P449 表

誤) 98 御茶屋台1号古墳、99 御茶屋台3号古墳
→ 正) いづれも何次調査の何号墳か不明

『東野中畦遺跡』2001(松山市文化財調査報告書82)

・ P58 本文中

誤) 3次調査地4号墳 → 正) 3次調査地の19号墳

・ P59

誤) 1～9: 4号墳 → 正) 1～9: 東野お茶屋台遺跡3次調査地19号墳

・ P60

誤) 10・11: 4号墳 → 正) 10・11: 東野お茶屋台遺跡3次調査地19号墳

『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅰ 昭和60～61年度』

・ P33 表

誤) 29 東野遺跡 古墳前 円墳 → 正) 29 東野お茶屋台遺跡(1次) 弥生後 溝

誤) 33 東野遺跡 東野5丁目898 → 正) 33 東野お茶屋台遺跡(2次) 東野五丁目甲898-14

誤) 49 東野遺跡(第3次) 東野町 → 正) 49 東野お茶屋台遺跡(3次) 東野五丁目甲898内

3. 遺跡の立地

松山平野は、愛媛県のほぼ中央部で、高縄半島の南西側に位置する。伊予灘と斎灘に面し、南には石鎚山系、北には高縄山系が聳える。松山平野中央部から北東部には、一級河川の重信川とその支流である石手川が流れている。二つの河川は、高縄山地と石鎚山に水源を発し、開析谷を形成しながら平野を流れ、平野西部で石手川が重信川に合流した後、西方の伊予灘に流出する。その結果、平野西部は扇状地堆積物や氾濫源堆積物、三角州堆積物等から形成されることになる。

松山市桑原地区は、石手川がつくる扇状地の扇央にあり、樽味遺跡（愛媛大学農学部）をはじめとし、弥生時代から中世までの遺跡が数多く存在している。また、その背後には高縄半島につづく丘陵地があり、この丘陵上には多くの古墳が存在する。

4. 歴史的環境

桑原地区は、扇状地上や中位段丘上に集落が、丘陵上に古墳群が形成されている。以下、主な遺跡についてその概要を時代別に記述する。

旧石器時代

松山平野では、旧石器時代の明確な遺構は確認されていない。ただし、樽味遺跡〔宮本 1989〕、樽味四反地遺跡〔梅木 1992〕ではポケット状に堆積したA T火山灰が検出され、東本遺跡（4次）〔高尾 1996〕ではA T火山灰の一次堆積層が確認され、遺構や遺物の検出が期待される。

縄文時代

東本遺跡（4次）からは、アカホヤ火山灰（約6,300年前）が確認され、堆積層直上からは槍先形石器、石鏃、スクレイパーなどの石器類が出土している〔高尾 1996〕。なお、遺構の検出はない。

弥生時代

前期：樽味遺跡では前半の溝S D 4と、貯蔵穴土坑S K 5が確認されている〔宮本 1989〕。

中期：後葉の遺構と遺物が樽味高木遺跡（2次）〔河野 1997〕、樽味四反地遺跡（5次）〔高尾 1998〕で検出され、現在の愛媛大学農学部の東側に集落が展開されている。

後期～古墳初頭：後半になると遺跡数が急増し、桑原高井遺跡、東本遺跡、桑原田中遺跡、桑原西稲葉遺跡、樽味四反地遺跡、樽味立添遺跡、樽味高木遺跡〔梅木 1992〕などがあり、当時の集落構造や住居形態などが解明されつつある。このうち注目される桑原高井遺跡、東本遺跡、樽味四反地遺跡を取り上げる。

桑原高井遺跡では竪穴式住居址5棟が検出され、住居址には円形と方形の2種類があり、このうち2号住居址は、ベット状施設の平面形態が六角形を呈し、柱穴が中心部に1本と壁体に沿って6本の計7本からなる〔森 1980〕。

東本遺跡2次調査地では竪穴式住居址2棟、掘立柱建物址等が検出され〔森 1980〕、同遺跡4次調査地では一辺が6mをこえる方形大型住居や、直径が9mをこえる周堤帯を伴う円形の大型住居址が検出され、このうち、円形大型住居址S B 302からは青銅鏡（破鏡）が1点出土している〔高尾 1996〕。また、同遺跡5次調査でも、同時期の竪穴式住居址が6棟検出されている〔河野 2001〕。

樽味四反地遺跡6次調査地では、掘立柱建物と溝・柵列を検出している。掘立柱建物は総柱で、規模は6間(12.5m)×6間(10.5m)で、120m²を超える大型建物となる。この建物に平行するように溝SD001と柵SA001がある。三者は、古墳時代初頭までに構築もしくは埋没したものとみられており、同時代の遺構としては西日本でも注目されるものであろう〔小玉1999〕。

このほか、遺構には枝松遺跡5次調査地から円形周溝状遺構を検出し〔河野1997〕、遺物には樽味立添遺跡の『貨泉』(古代までの包含層)〔梅木1992〕、樽味高木遺跡3次調査地の船を描いた線刻画土器が出土している〔梅木1994〕。

古墳時代

古墳：桑原地区には、2基の前方後円墳がある。

経石山古墳は、全長48.5mの前方後円墳で、5世紀末に比定されている〔森1986〕。1994年の2次調査地では、後円部の東側で、幅5.1～6.7mの周溝を確認し、墳丘規模が最大で現状より約5m延長されることを確認した〔河野1997〕。三島神社古墳は、経石山古墳の東約300mに存在していたが、昭和46年の宅地造成により消滅した。報告によると、初期畿内型の横穴式石室を内部主体に持つ全長約45mの前方後円墳であり、出土遺物から6世紀前半に比定されている〔森1972〕。

一方、桑原地区の東側丘陵部には、畑寺古墳群・東野お茶屋台古墳群〔橋本1996〕・畑寺竹ヶ谷古墳群があり、須恵器や直刀が出土している。近年の調査では畑寺6号墳で墳丘と円筒埴輪列を〔河野1997〕、東野中畦遺跡では耳環を〔水本2001〕確認している。

集落：桑原地区内では、北側の樽味一帯に集落址の検出が多くみられる。樽味立添遺跡、樽味四反地遺跡、樽味高木遺跡では、5世紀後半～6世紀の竪穴式住居址が計60棟以上確認されている。

樽味四反地遺跡6次調査地では、方形の竪穴式住居址が幾つも切り合って検出され、総数は35棟を超える。この住居址群からは、多くの住居址で滑石製白玉やガラス小玉が出土し、メノウ製勾玉1点も出土がある。また、完形の須恵器の杯身と坏蓋が合わさって、なかからは直径1.5cm大の河原石が11個出土した例もみれる。集落内祭祀の状況がよみとれる良資料といえる〔小玉1999〕。

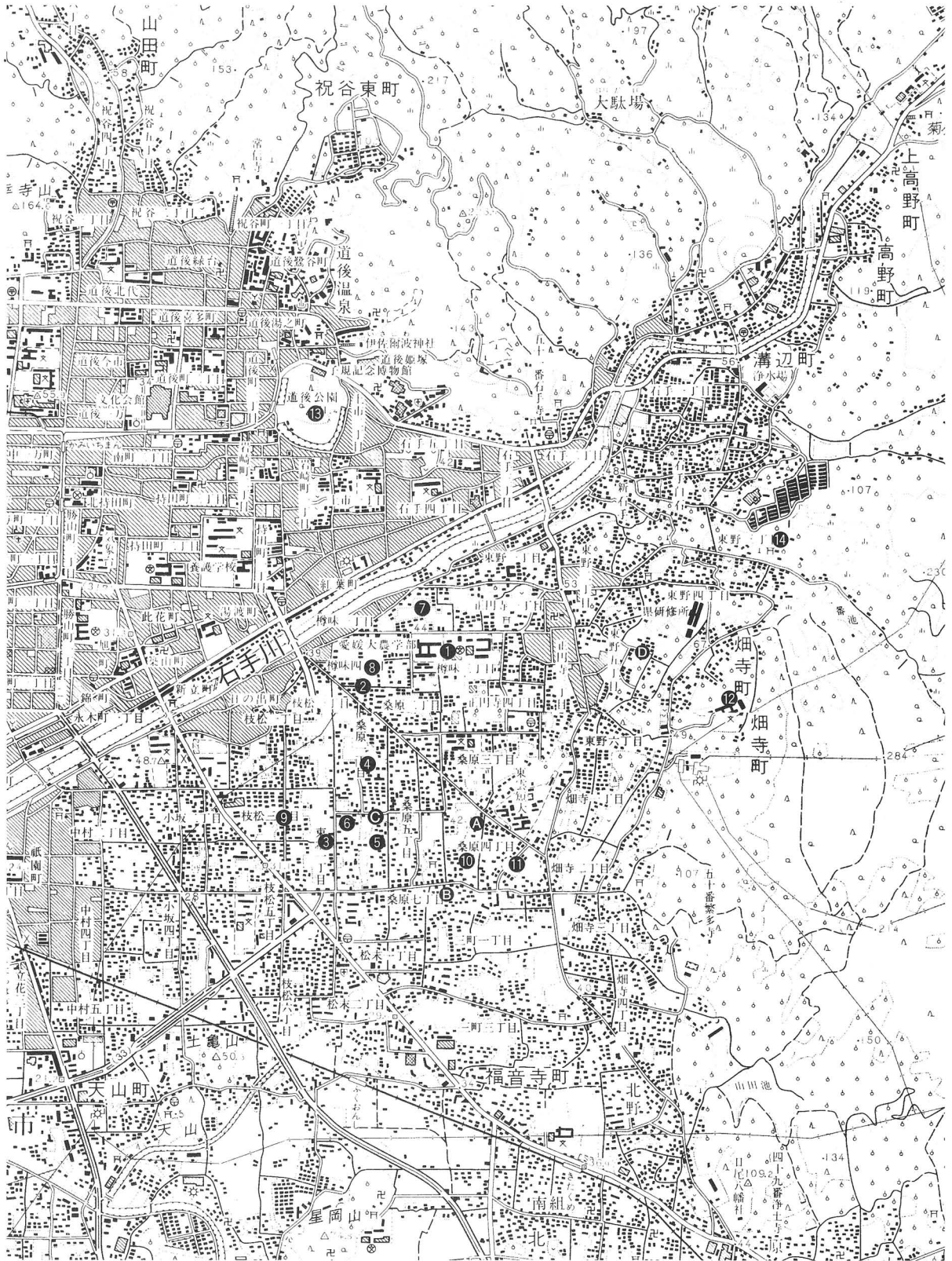
古 代

樽味四反地遺跡5次調査地では10世紀代の溝が検出され〔高尾1998〕、溝からは多量の須恵器や土師器が出土し、なかには硯3点がある。硯については、高尾和長が本例を含む伊予出土の硯について詳細に検討しているので参照していただきたい〔高尾2001〕。樽味高木遺跡4次調査地では8世紀代まで機能していた河川を検出している。調査区内では、河川に先行する土坑や遺物を確認しており、周辺に集落が営まれていたことを推定している〔河野1997〕。

中 世

桑原中遺跡3次調査地では、土坑墓もしくは祭祀遺構と考えるものがあり、土坑からは14～15世紀代の土師器の坏や皿が出土している。また、掘立柱建物址からは、柱穴の基底部より銭貨が出土し、「地鎮め」の様子うかがえる〔河野1997〕。

中世後期の松山平野は河野氏の統治下にあり、湯築城を本拠地としている。この湯築城の近くに位置する桑原地区は河野氏の勢力が強く及んでいたと考えられている〔田崎1993〕。



- | | | | | |
|------------|-----------|-----------|------------|----------|
| ① 桑原本郷遺跡 | ① 榑味遺跡 | ⑤ 桑原田中遺跡 | ⑨ 枝松遺跡 3 次 | ⑬ 湯築城跡 |
| ② 桑原遺跡 | ② 榑味四反地遺跡 | ⑥ 桑原西稲葉遺跡 | ⑩ 經石山古墳 | ⑭ 東野中畦遺跡 |
| ③ 桑原小石原遺跡 | ③ 東本遺跡 | ⑦ 榑味立添遺跡 | ⑪ 三島神社古墳 | |
| ④ 東野お茶屋台遺跡 | ④ 桑原高井遺跡 | ⑧ 榑味高木遺跡 | ⑫ 畑寺竹ヶ谷古墳群 | |

第 1 図 調査地周辺の遺跡分布図 (S=1:25,000)

〔文 献〕

- 梅木謙一 1992 『桑原地区の遺跡』松山市教育委員会、財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
1994 『桑原地区の遺跡Ⅱ』松山市教育委員会、財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
- 河野史知 1997 『桑原地区の遺跡Ⅲ』松山市教育委員会、財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
2001 「東本遺跡5次調査地」『松山市埋蔵文化財調査年報12』松山市教育委員会、財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
- 小玉亜紀子 1999 「樽味四反地遺跡6次調査地」『松山市埋蔵文化財調査年報11』松山市教育委員会、財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
- 高尾和長 1996 『東本遺跡4次調査・枝松遺跡4次調査』松山市教育委員会、財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
1998 「樽味四反地遺跡5次調査地」『松山市埋蔵文化財調査年報X』松山市教育委員会、財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
2001 「伊予の硯」『福音寺地区の遺跡Ⅲ』松山市教育委員会、財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
- 田崎博之 1993 『樽味遺跡Ⅱ』愛媛大学埋蔵文化財研究室
- 橋本雄一 1996 「東野お茶屋台遺跡5次調査地」『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅷ』松山市教育委員会、財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
- 水本完児 2001 『東野中畦遺跡』松山市教育委員会、財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
- 宮本一夫 1989 『鷹子・樽味遺跡』愛媛大学埋蔵文化財研究室
- 森 光晴 1972 『三島神社古墳』松山市教育委員会
1980 『浮穴・西石井荒神堂・東本Ⅱ・Ⅲ・桑原高井遺跡』松山市教育委員会
1986 「経石山古墳」『愛媛県史 資料編 考古』愛媛県

第2章

桑^{くわ}原^{ばら}本^{ほん}郷^{ごう}遺跡

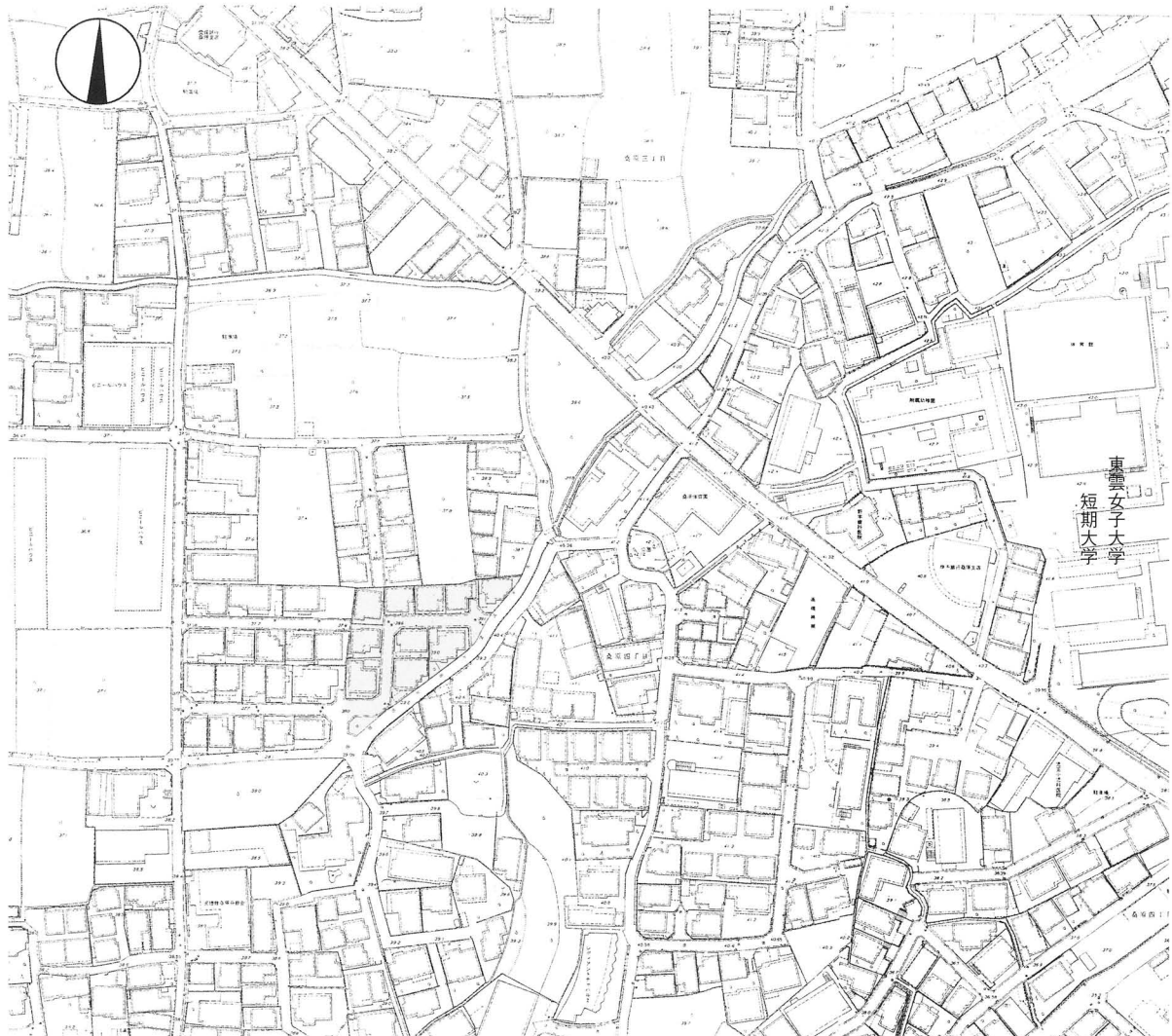


第2章 桑原本郷遺跡

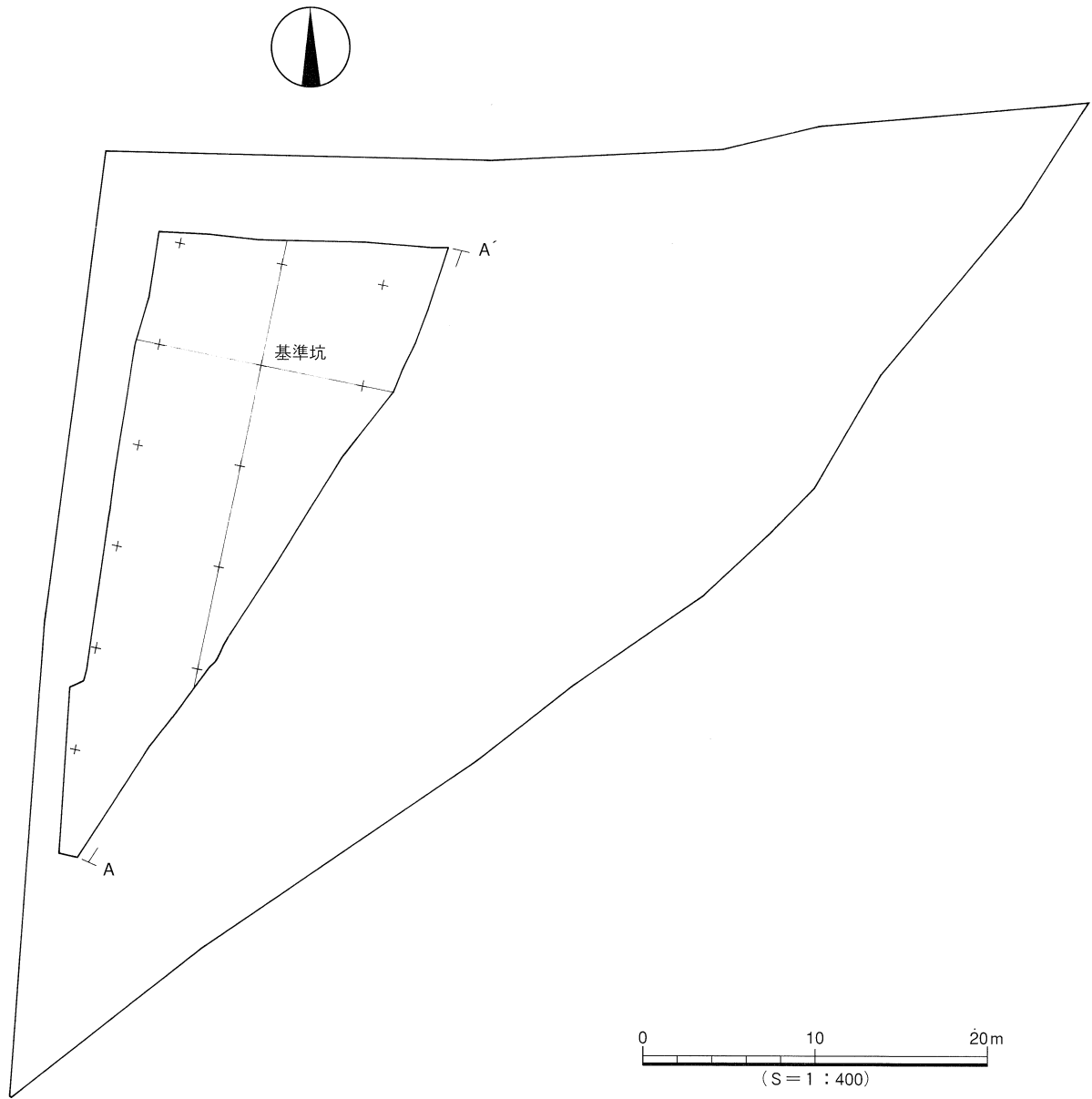
1. 調査の経過

(1) 調査に至る経緯

1985（昭和60）年9月、富屋興産株式会社より、松山市桑原四丁目における宅地造成に伴う埋蔵文化財確認願が、松山市教育委員会文化教育課（以下、市教委）に提出された。この確認願にもとづき、市教委が行った試掘調査の結果、用地の主に西半において須恵器、土師器を包含する土層や遺構の存在が確認された。この結果をうけた、富屋興産、市教委両者による遺跡の取り扱いについての協議の結果、この開発予定地内における本格調査を実施することとなり、同年9月27日から10月17日の調査期間を設けて市教委による発掘調査が実施された。



第2図 調査地位置図 (S=1:2,500)



第3図 調査地と発掘区

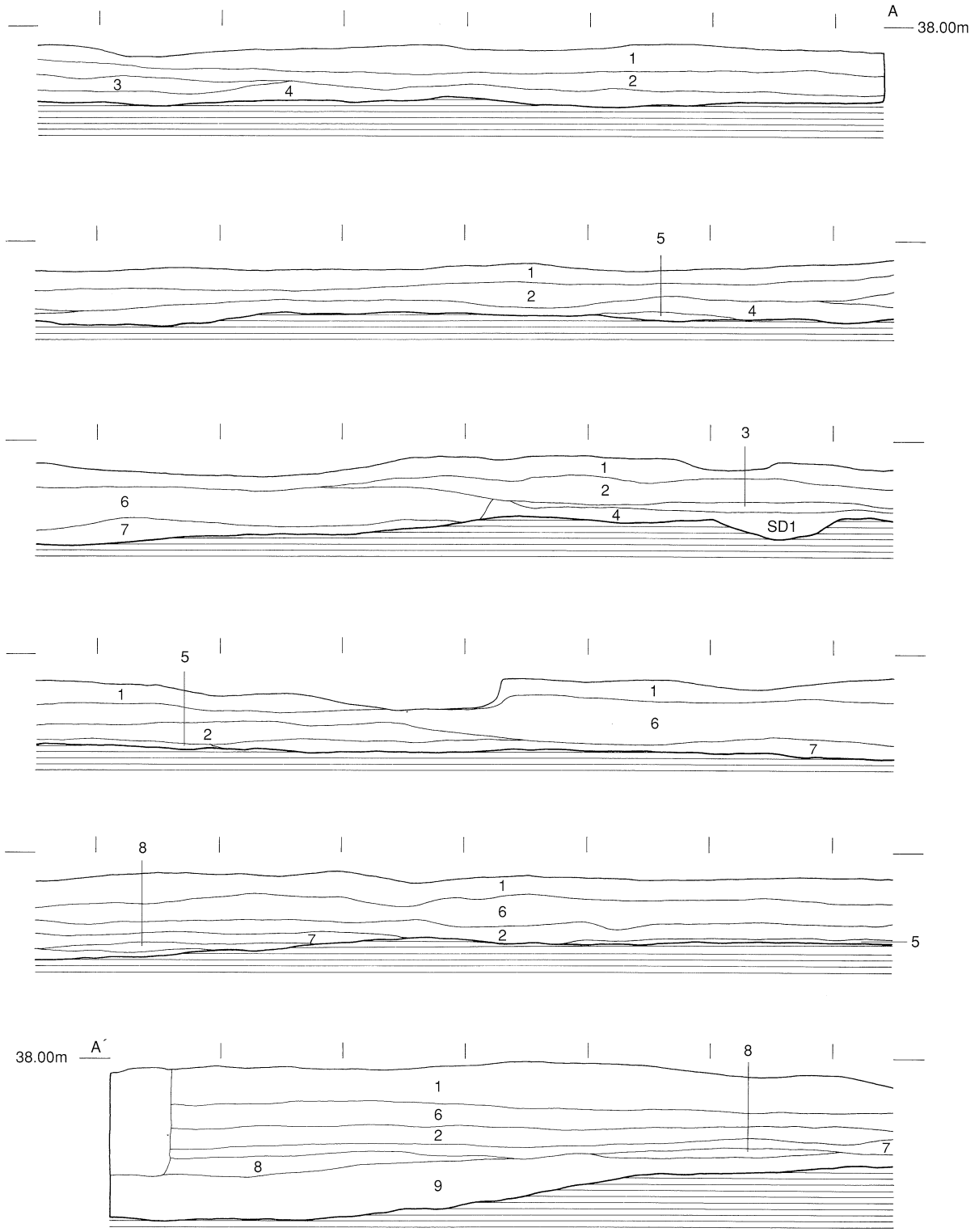
(2) 調査組織

調査主体	松山市教育委員会	教育長	西原多喜男
	文化教育課	課長	木下正史
	〃	課長補佐	坪内晃幸
	〃	第二係長	大西輝昭
	〃	主任	西尾幸則
	〃	調査員	栗田茂敏

調査地 松山市桑原四丁目647-1・2・3（現、桑原四丁目7-40・7-1）

調査面積 1756.27m²のうち365m²

2. 層 位 (第4図)



- | | | |
|----------|----------------------|----------------|
| 1. 表土 | 4. 含橙色粘土小塊黑色シルト(包含層) | 7. グレー耕土 |
| 2. 黄灰色耕土 | 5. 暗赤褐色粘土 | 8. 暗褐色シルト(包含層) |
| 3. 淡褐色粘土 | 6. 含黄色粘土塊マサ土(客土) | 9. 黑色シルト |

第4図 調査区東壁土層図

調査地周辺の地形をみてみると、調査地は北東から南西に舌状に延びる丘陵の北西麓に位置しており、本来、地山は南東から北西にかけての緩傾斜をなしていたものと考えられるが、現況では調査地北部を除いた大部分が削平されている。調査地の現況は畑であるが、削平された地山直上の旧水田に客土を施して、畑として利用しており、旧水田耕土直下の地山面を切りこんで遺構が遺存している。北部では旧地形の名残を残し、北下がりの地山上に漆黒のシルトが堆積し、その上層に遺物を包含した暗褐色シルトがある。遺構内の埋土もこの暗褐色シルトである。

3. 遺構と遺物

検出された遺構には、古墳時代の竪穴住居址1棟、掘立柱建物1棟、柵列1条と祭祀場と考えられるスペースがあり、その他これらよりも降る時期の溝、土坑がある。

(1) 古墳時代の遺構と遺物

竪穴住居址SB1（第6・7図、写真3・4）

調査地南西端付近で検出されたもので、溝SD1に切られている。一辺3.4~3.5mの隅丸方形をなす比較的小型のもので、深さ20~10cm程度の遺存である。床面より、深さ10cmほどの小規模な柱穴を3基検出することができたが、北西隅付近のものは検出することができなかった。また、周壁溝は設けられていない。北辺に小さな張り出しがあるが、カマドは設置されておらず、焼土の検出もない。出土遺物はこの部分の南側床面からの出土がほとんどである。

SB1出土遺物（第8図、写真9）

須恵器

高坏（1・2） 脚部片1と、脚部、坏部の接合部の片2があり、いずれの脚部も三方向に透孔を持つ、短脚のものである。1で脚高4.5cm、裾部径8.2cmを測る。

坏蓋（3） 口縁部の小片で、天井部との境に稜を持つ。端部は中窪みの傾いた面をなす。

土師器

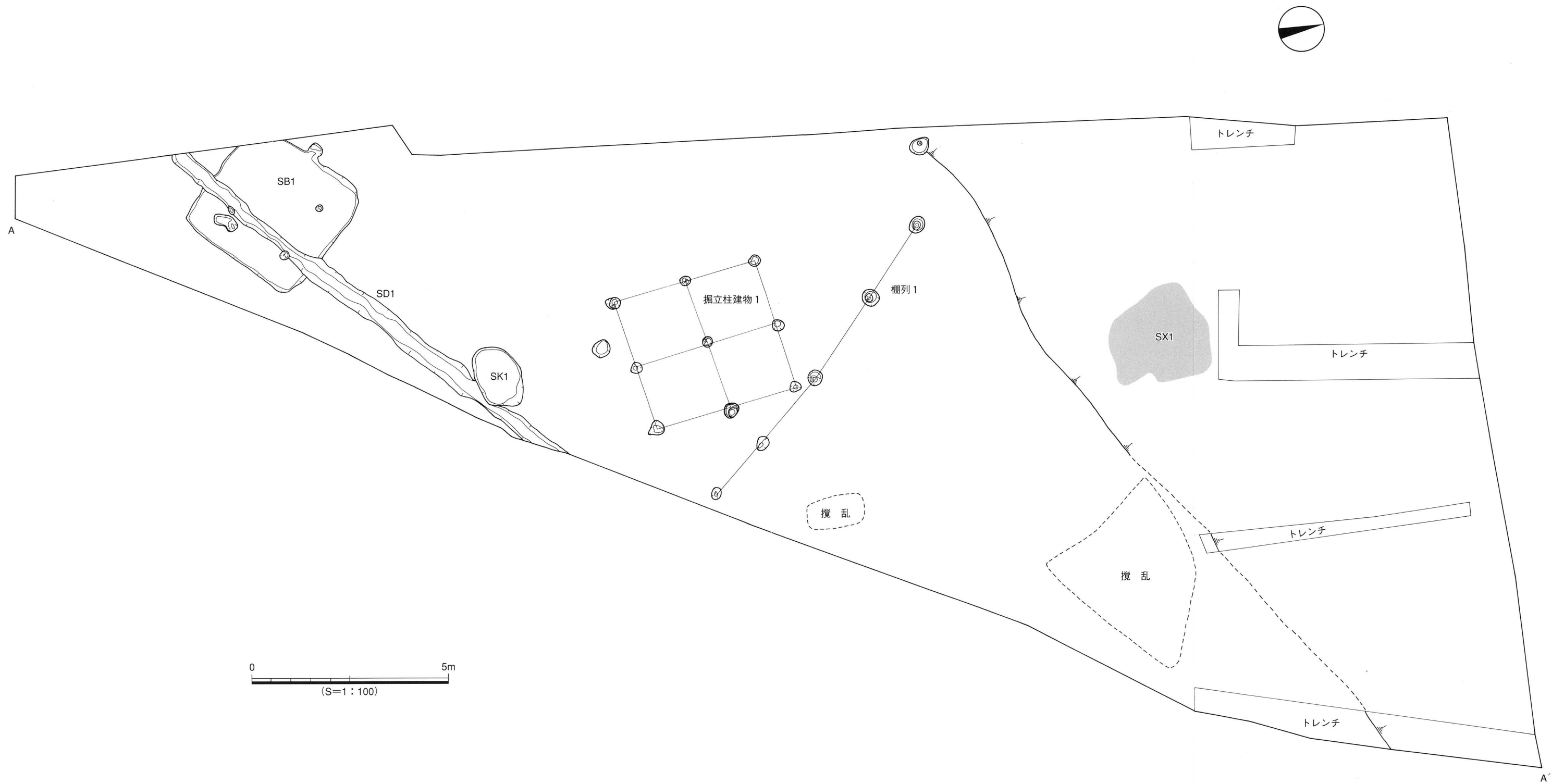
甕（4~6） 球形に近い胴部から、短く「く」の字状に外に開く口縁部を持つもので、4で口径15.8cm、6で17.2cmを測る。4の口縁部が若干内湾気味に立ち上がり、端部を丸く収めるのに対して、6では直線的に開き、端部に面を持っている。4や6は摩滅のため、外面調整が不詳であるが、5の外面には粗い横撫でが看取できる。

掘立柱建物1（第9図、写真5）

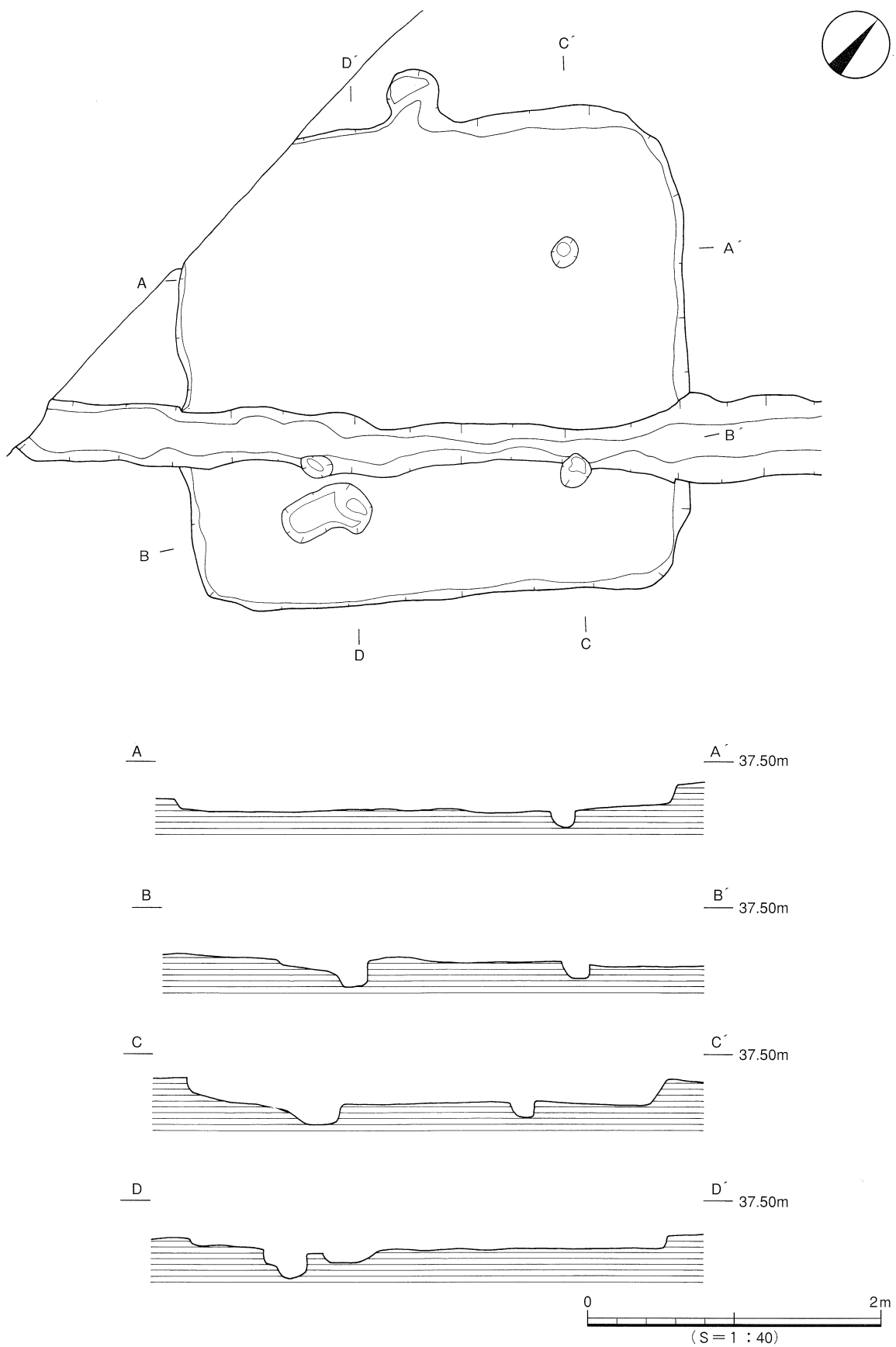
調査地中央、竪穴住居の北7mで検出された2×2間の総柱建物である。柱間1.7~1.8mを測る。遺物の出土はないが、柱穴埋土が、SB1同様の暗褐色シルトであるところから、同様の時期の施設と考えられる。

柵列1（第5図）

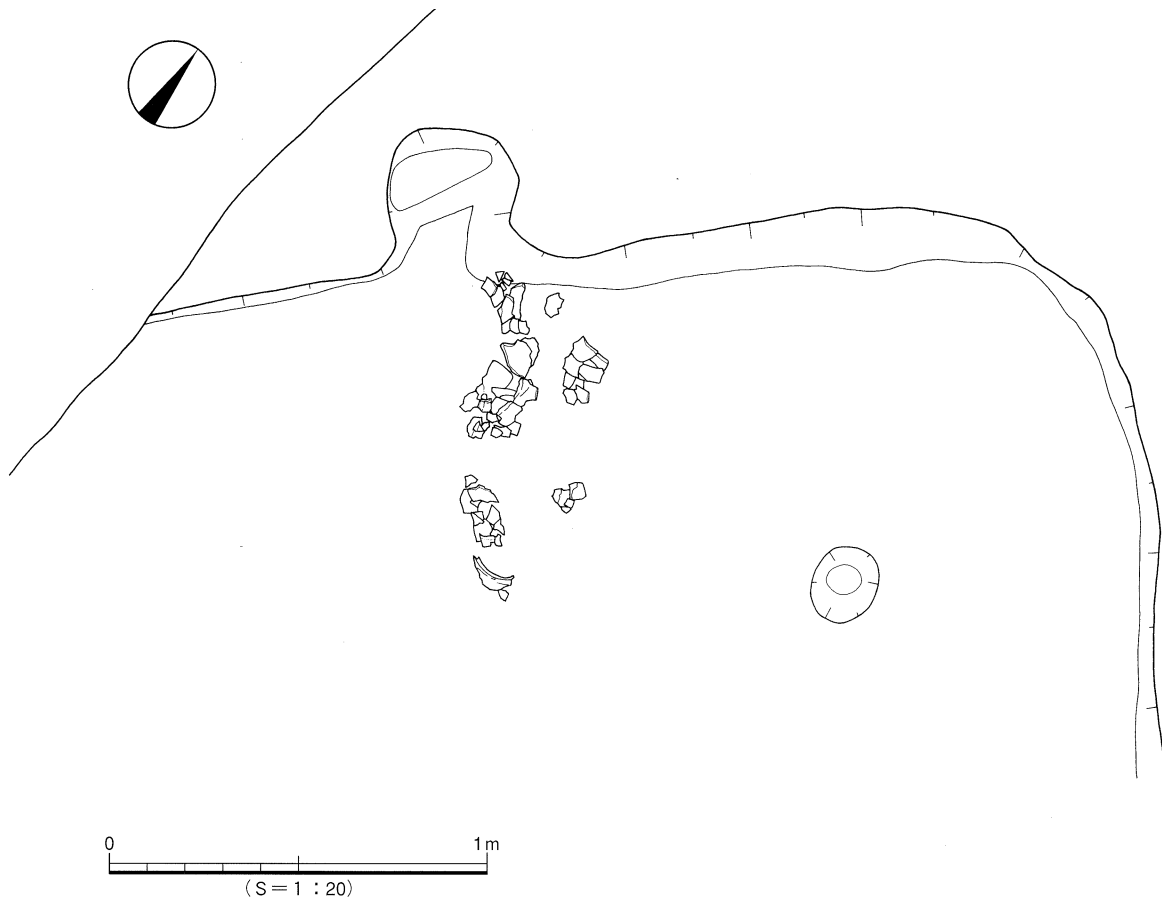
掘立柱建物1の北で、柵列と考えられる柱穴が5基並んで検出されている。柱間には、1.7m~2.0mと若干ばらつきがあり、整然とした一直線の配置にはならないが、埋土が共通しているところから柵列と判断している。掘立柱建物と極めて近接しているので、同時に存在したとは考え難いが、埋土



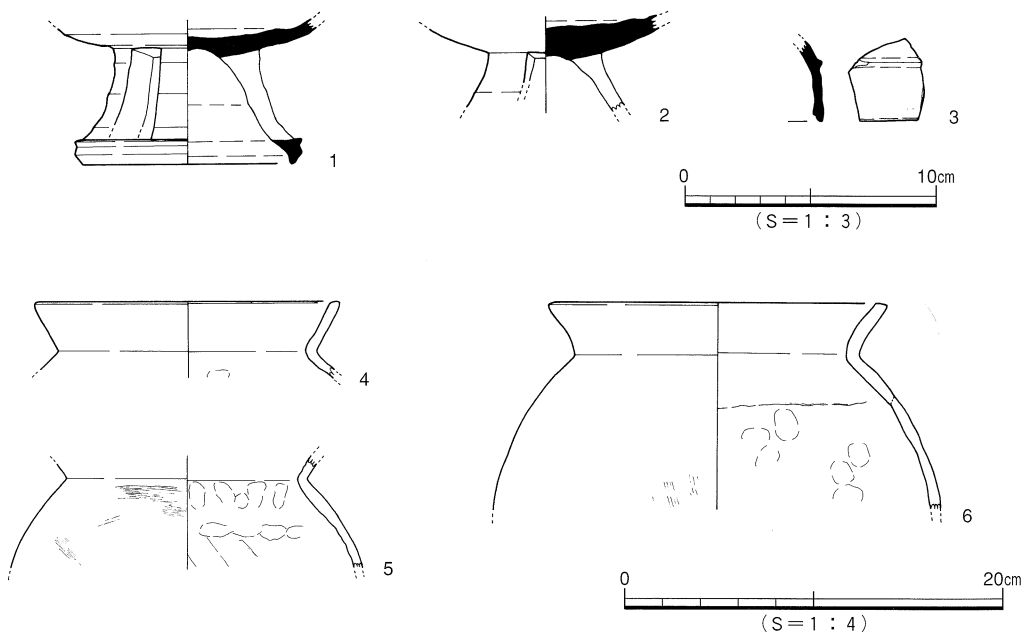
第5図 遺構配置図



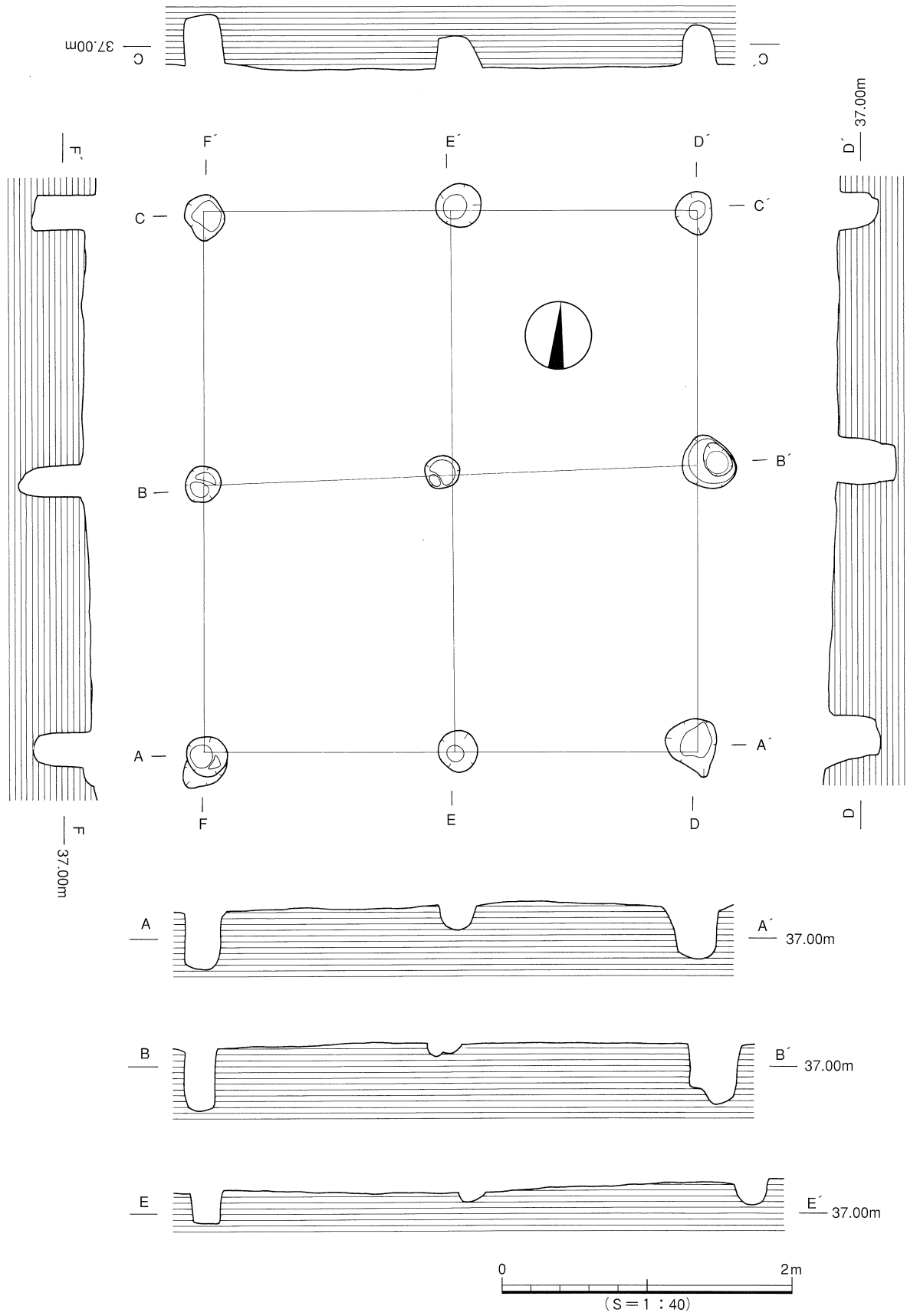
第6図 SB1測量図



第7図 SB1遺物出土状況



第8図 SB1出土遺物



第9図 掘立柱建物1 測量図

はSB 1や掘立柱建物1と共通しているので、時期としては近接した時期の遺構であろう。

祭祀場SX1（第10図、写真7・8）

調査地北部の黒色シルト面の一個所に、破碎された須恵器や土師器片と滑石製白玉が集中して出土する地点がある。遺物は、約2.5×2.5mの範囲に分布し、掘り込み、その他の地業、或いは火処などの痕跡はみられないが、祭祀を執り行った場所と考えられる。出土した土器には、多量の坏や高坏などの小型須恵器に若干の須恵器甕片、土師器甕・鉢がある。

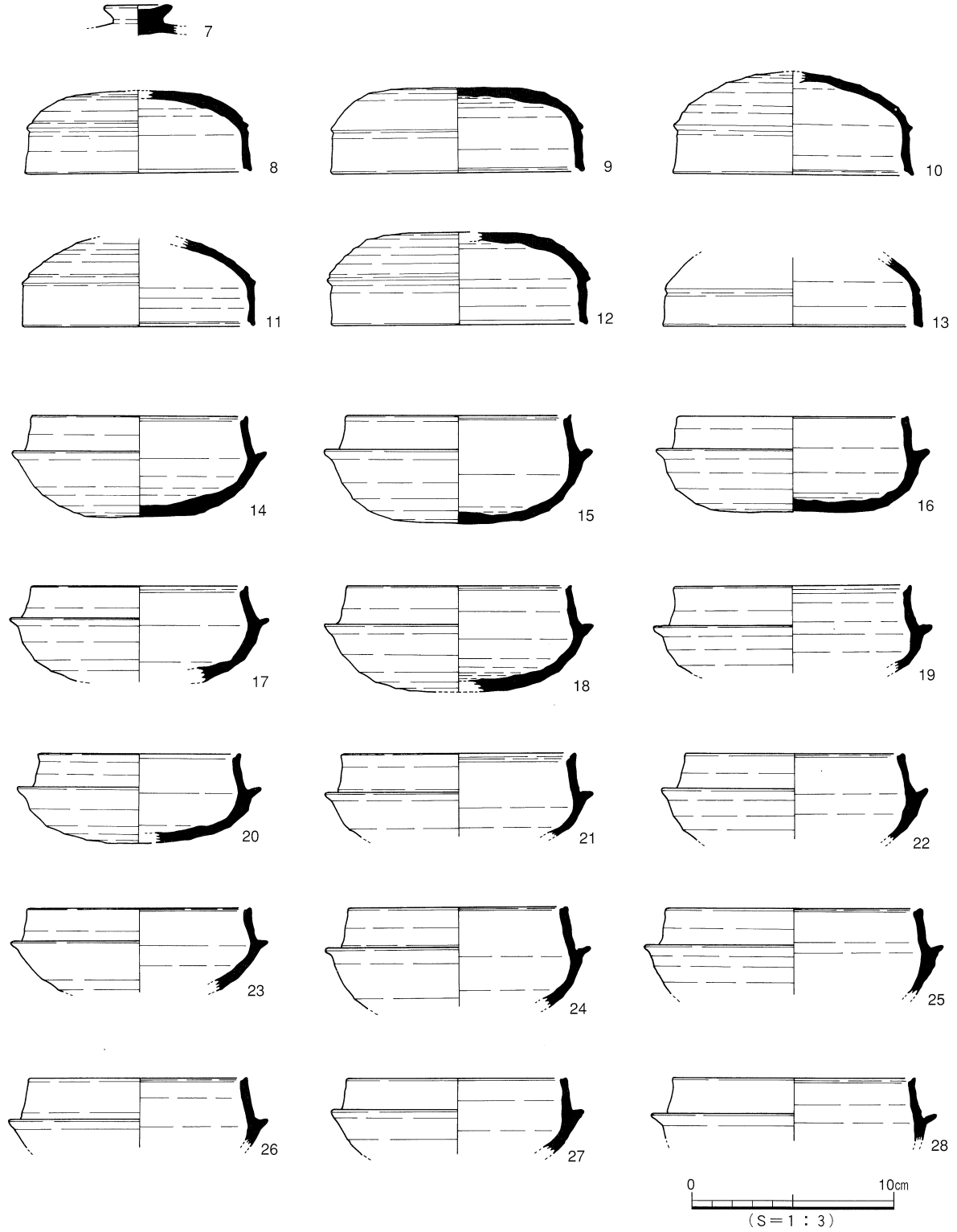


第10図 SX1遺物出土状況

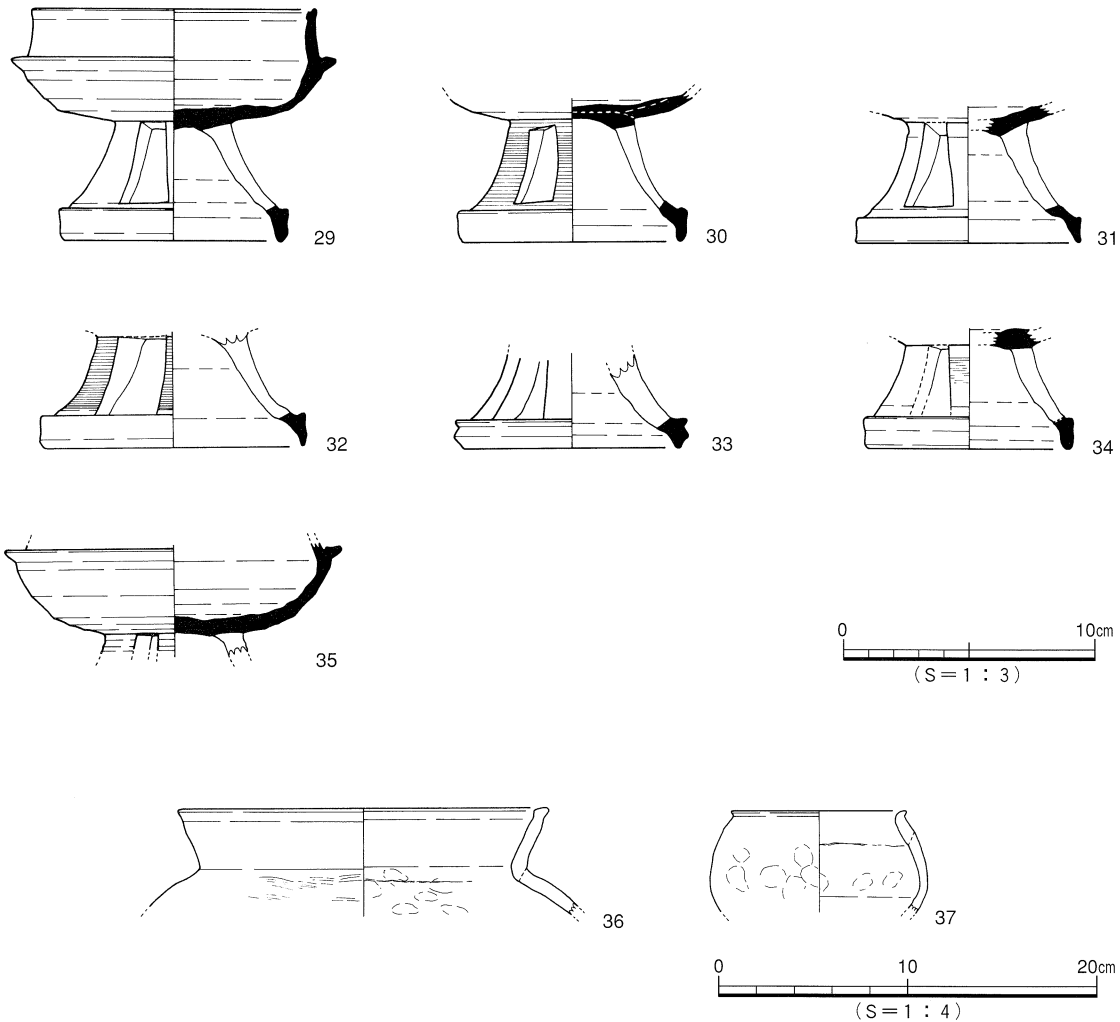
SX1 出土遺物 (第11~14図、写真9・10)

須恵器

坏・高坏 (7~35) 破片資料が多く、必ずしも坏・高坏の区別がつかないものがあるので、こ



第11図 SX1出土遺物 (1)



第12図 SX1出土遺物 (2)

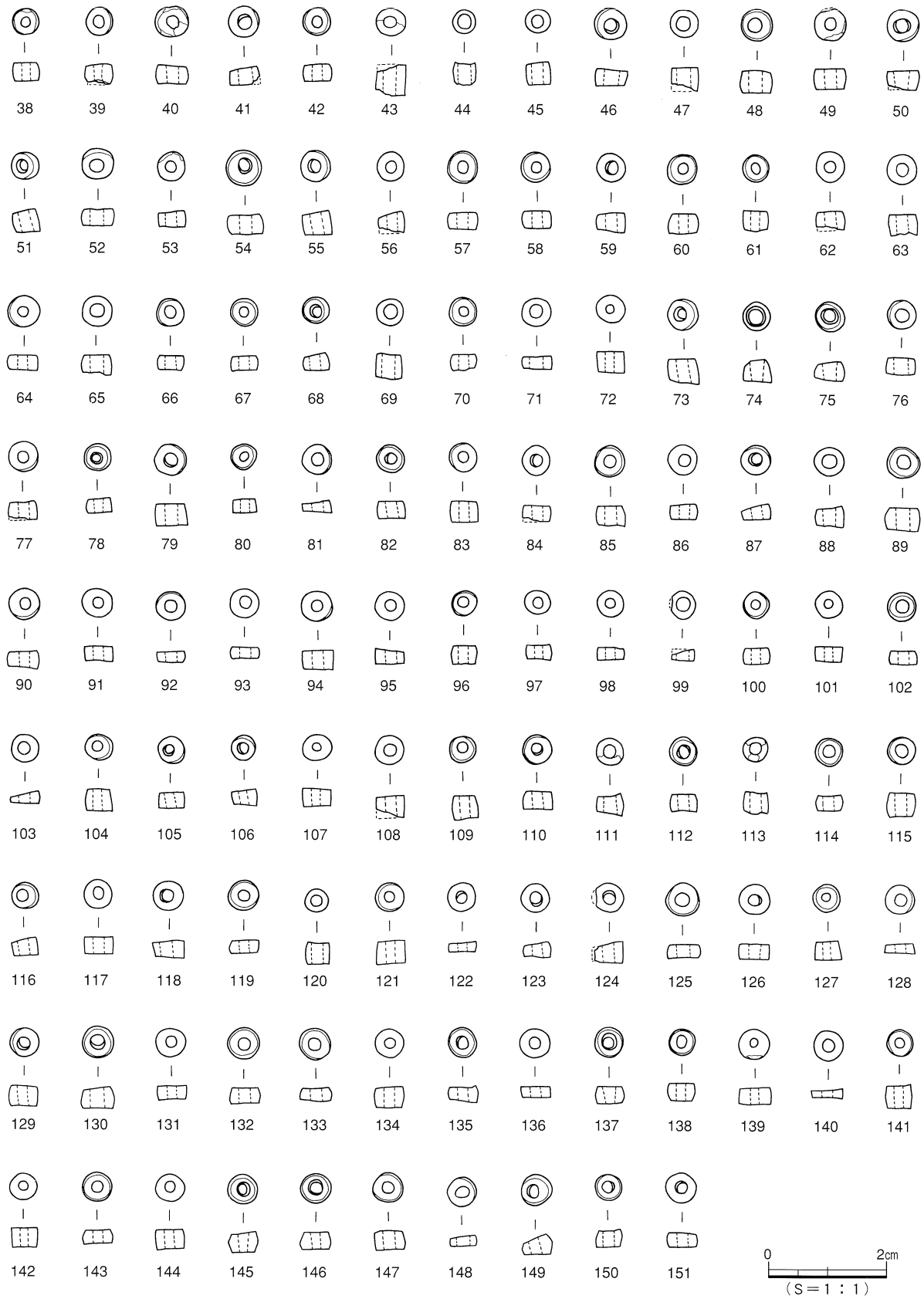
こで一括して取り扱う。蓋は、天井部と口縁部との境に稜を持つ形態のもので、復元口径11.0cm～12.6cmを測る。8～12に比べると13の稜は鈍く、凹線のようにになっており、また、口縁部は他の個体に比べて短い。口端部の形状は、中窪みの傾いた面をなすものが多いが、10では中窪みの面というよりは、むしろ段状になっている。7は、窪みを持った扁平なつまみである。天井部のヘラ削りの範囲は広く、13を除いて稜の直近まで削られている。

身は、やや内傾する比較的長い立ち上がりを持つもので、口径は9.9cm～12.4cmの間であって、11cmを前後するものが多い。口端部は蓋と同様、内傾した中窪みの面をなすものや、段が巡るものがある。これらの身のうち、坏身と特定できるものには14～16、18・20がある。

高坏と特定できるもののうち図化可能なものは、29～35の7点である。唯一完形に復元できる29は、器高9.2cm、口径11.0cm、脚裾径8.6cmを測る、三方透孔、短脚の有蓋高坏である。

土師器

甕 (36) 復元口径19.4cmを測る口頸部片、口縁部外面の端部付近と、頸部を強く横撫でされるため、外膨らみの形状となっている。口端部は平坦な面をなしている。

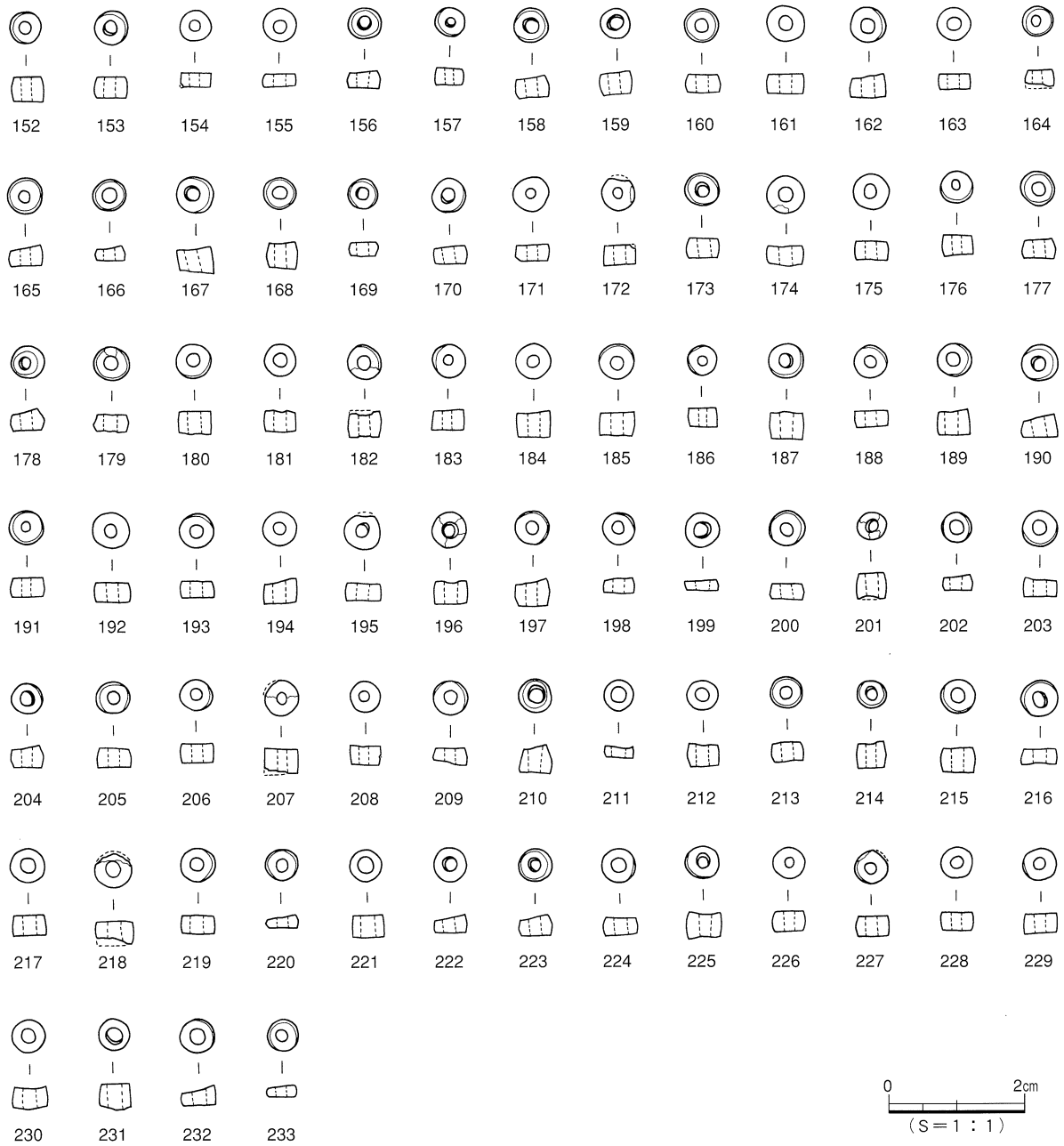


第13図 SX1出土遺物 (3)

鉢 (37) 復元口径9cmで、最大径11.6cmを測る扁平な胴部を持つ。短く外反する口縁部は端部を尖り気味におさめる。

石製品

白玉 (38~233) 196個の滑石製白玉が出土している。出土の平面的な位置、レベルともに綴られていたようは出土状態ではない。小さなもので、直径0.42cm、厚さ0.18cm、大きなもので直径0.59cm、厚さ0.52cmと、特に厚さにおいて法量にばらつきがある。小口の片面を平滑に仕上げているにもかかわらず、一方の面が仕上げられていないものが多い。管玉状に製作したものを半截しているのかもしれない。



第14図 SX1出土遺物 (4)

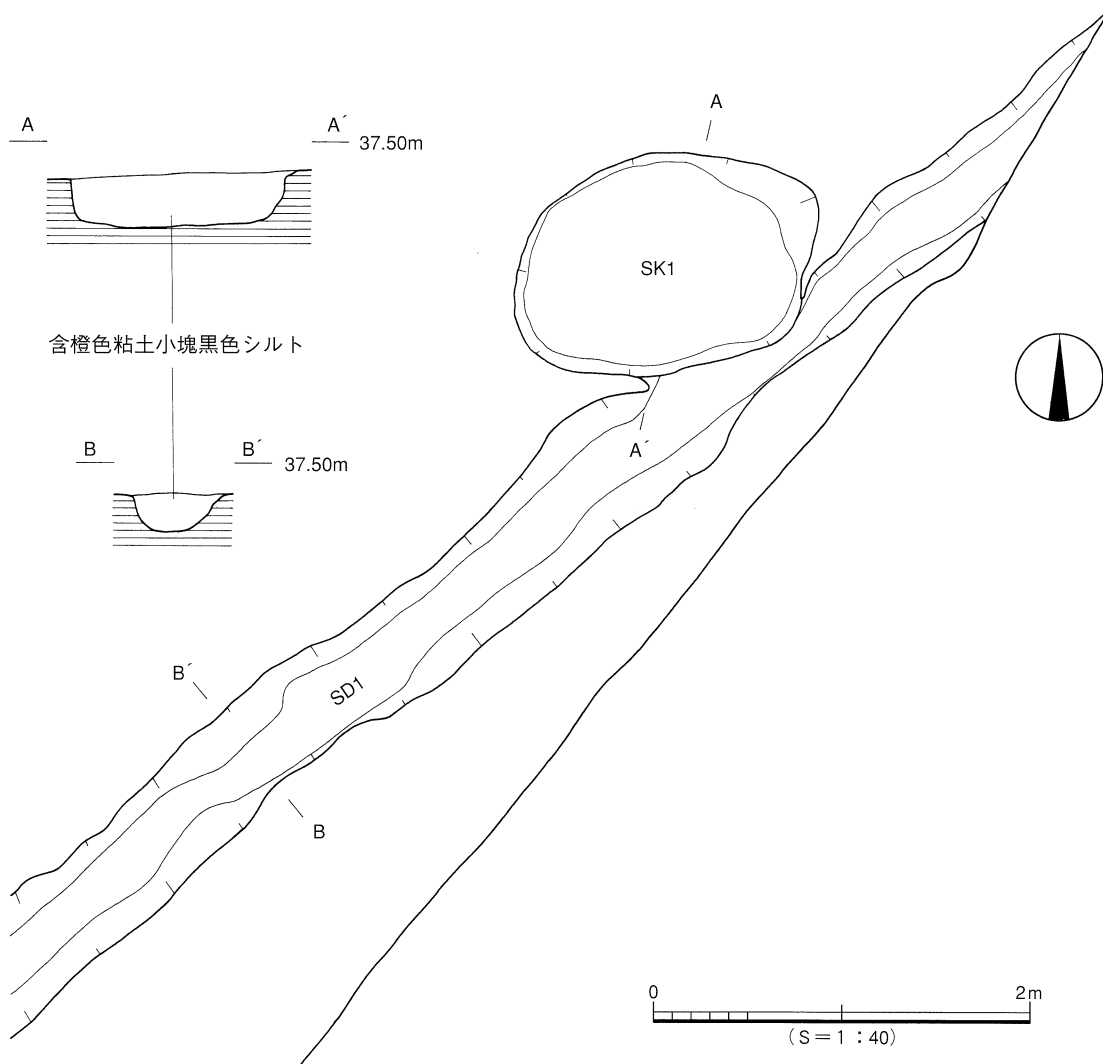
(2) その他の遺構と遺物

溝SD1 (第5・15図、写真6)

竪穴住居SB1を切り、土坑SK1に切られる溝で、調査区南部で北東から南西方向に直線的に検出された。幅50cm、深さ20cmのU字形断面を呈するもので、検出総長は12mである。遺物の出土は、このSD1、土坑SK1ともないが、調査区東壁面の土層をみると、溝の埋土はこれを覆う薄い包含層と同一であるので、この包含層に含まれる最も新しい遺物の時期、13世紀代を下限とし、5世紀末を上限とする遺構ということになる。

土坑SK1 (第15図、写真6)

長径1.7m、短径1.1m、深さ25cmの楕円形プランを呈し、底は比較的平坦である。遺物の出土はないが、SD1を切っているので、SD1よりも新しい遺構である。



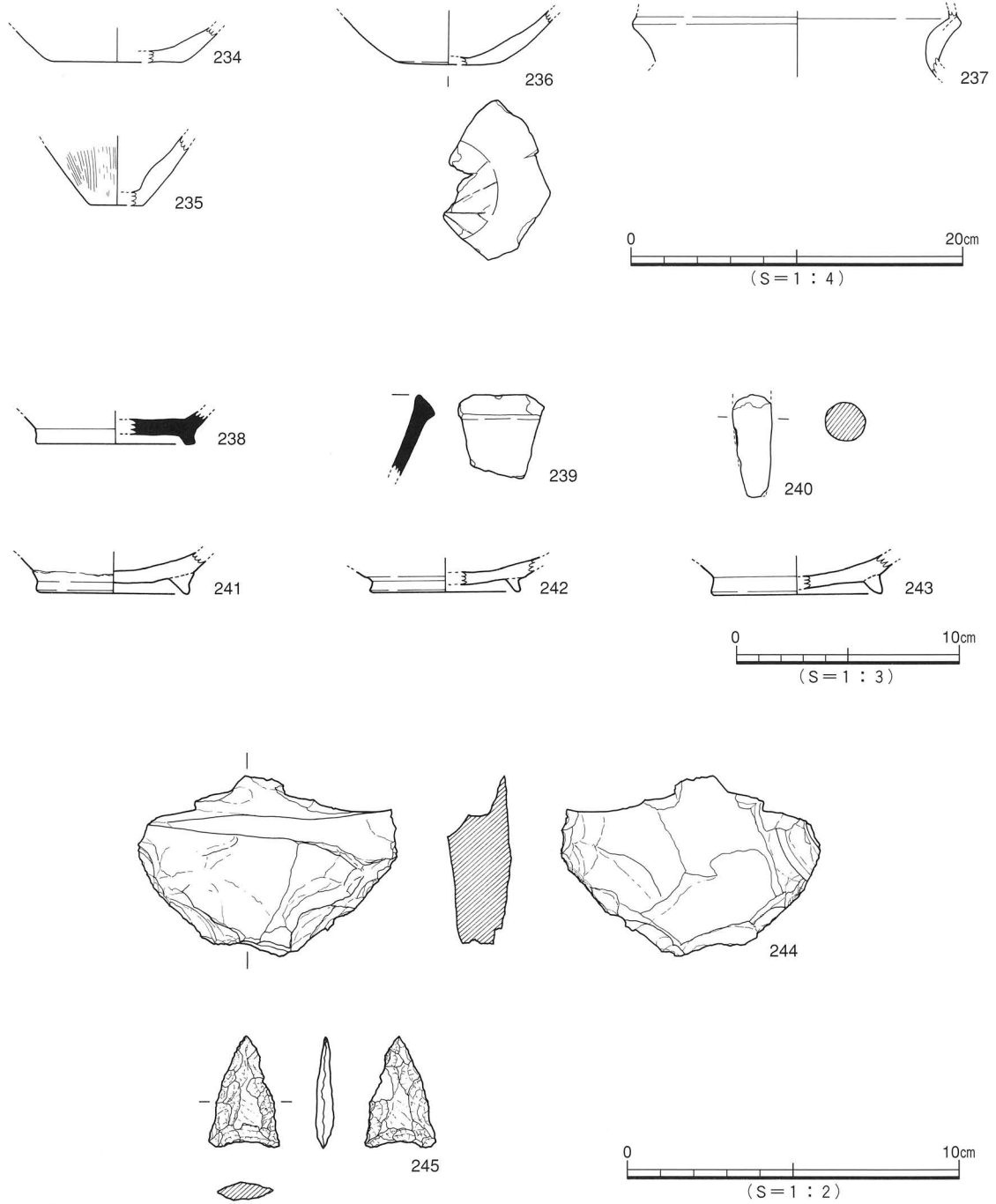
第15図 SK1・SD1 測量図

包含層出土遺物 (第16図、写真10)

弥生土器

壺 (234) 平底の底部片、復元径7.8cmを測る。

甕 (235) 底径3.2cmを測る甕底部。外面に粗い刷毛目が施されている。



第16図 包含層出土遺物

土師器

壺 (236・237) 古式土師器壺片 2 点の出土がある。236は、平坦気味の丸底の底部で、外底面に広葉樹の葉脈圧痕がある。237は、二重口縁壺の頸部片、鈍い稜を経て、薄く短い口縁部がほぼ直上に立ち上がるものと思われる。

須恵器

坏 (238) 断面方形の輪高台を貼り付けた坏底部片、復元底径7.0cmを測る。

鉢 (239) 東播系片口鉢の口縁部小片。13世紀代のものか。

土師器

土釜 (240) 土釜の脚端部片。

椀 (241～243) 断面三角形の薄い高台を貼り付けた椀底部、11世紀後半から12世紀前半のものであろう。

石製品

石核 (244) サヌカイトの石核。

石鏃 (245) サヌカイトを素材とする、凹基鏃。長さ3.4cm、最大幅2.2cmで、一部欠けているがほぼ完形で、現況重量3.05 gを量る。

4. 小 結

本調査で検出された遺構は主に古墳時代のもので、出土須恵器や土師器から、5世紀末頃の集落の一部であると考えられる。南東から北西への傾斜をなす丘陵の落ち際付近に遺構が立地することから、南東あるいは東方向に展開する集落の北端、北西端のあたりが検出されたものであろう。調査地北部で検出された地山の落ち以北に堆積した黒色のシルト上では、滑石製の白玉や、高坏を主とする須恵器を用いた祭祀行為が行われている。近年の周辺地域での発掘調査や、試掘調査では本調査地北西一帯の緩傾斜地、あるいは低地部にこの黒色シルトが広く堆積し、基本的にはこのシルト面上には古い時期の遺構が薄いことがわかっており、このことから、検出された古墳時代の施設は集落の居住区外縁部分であることがわかる。祭祀行為は、その外側の直近で行われている。用いられた須恵器や土師器は破碎され、白玉とともに投棄されたような状況を呈している。当平野では、古墳時代の集落内祭祀にはさまざまな形態や性格があることがわかっている。主な遺跡をあげておくと、伊予郡松前町出作遺跡の鍛冶祭祀、農耕祭祀とみられる複合祭祀、松山市竹ノ下遺跡の水辺の祭祀と考えられているもの、北久米浄蓮寺遺跡や松山大学構内遺跡などにみられる竪穴住居内でのカマドの廃絶に際して行われるカマド祭祀などである。これらは、いずれも5世紀後半に中心をおいた時期の集落であること、多くの場合、石製模造品あるいは滑石製白玉と須恵器・土師器を伴っていることなどが本調査の祭祀と共通している。さて、本調査の祭祀遺物は先述のように集落の外縁の近辺と考えられる位置で検出されている。このことには、いくつかの考え方ができよう。そのひとつは、居住域の内外を区画する部分での区画に対する祭祀という考え方。また、居住域内でなんらかの祭祀を執り行った後、これに用いた道具を居住域外に投棄したという解釈もあり得る。あるいは、居住施設等の遺構の薄い黒色シルトのひろがりや、水田などの農業生産域であった可能性もあるとするならば、農耕祭祀という考え方もできよう。性格を特定することはできないが、以上の3つの可能性をあげておく。

白玉の製作技法のひとつとして、管玉を半截した可能性を指摘した。白玉の製作技法については、松前町出作遺跡の石製品を分析した、谷若倫郎氏の精緻な論考がある。氏は、出作遺跡の白玉の製作技法として板状の扁平石を原材として、穿孔後に一個分ずつ割り出していく方法とともに、管玉を切断する技法が存在する可能性に言及している。その根拠として、端面が打撃により断ち切られたような状況を呈するものが出土白玉の中に含まれていることをあげている。この端面の状況は、本調査出土の白玉の一部と同様で、筆者もそのように考えた。今回の報告では行い得なかったが、個々の個体同士の接合関係を確認する必要がある。

〔文献〕

- | | | |
|--------|------|---|
| 谷若倫郎 他 | 1993 | 『出作遺跡 I』松前町教育委員会 |
| | 1994 | 『特別展図録 出作遺跡とそのマツリ』松前町教育委員会 |
| 森 光晴 | 1983 | 『国道11号バイパス 埋蔵文化財発掘調査報告書』松山市教育委員会 |
| 橋本雄一 | 1994 | 『北久米浄蓮寺遺跡～3次調査地～』松山市教育委員会、(財)松山市埋蔵文化財センター |
| 梅木謙一 | 1991 | 『松山大学構内遺跡－第2次調査－』松山市教育委員会、(財)松山市埋蔵文化財センター |

遺物観察表

- (1) 番号は本文中の通し番号である。
 (2) 法量欄 ()は復元推定値である。

調整欄 遺物の各部位を略記した。

口縁部－口、口縁端部－口端、体部－体、底部－底、天井部－天井、高坏坏部－坏、高坏坏部口縁－坏口、高坏坏底部－坏底、脚部－脚、脚端部－脚端

胎土・焼成欄 胎土には、その粗密とともに含まれる鉱物を略記した。石英－石、長石－長、雲母－雲、砂粒－砂、なおカッコ内は鉱物粒子の大きさをミリメートル単位で表している。焼成については次のとおりである。良好－◎、普通－○、不良－△。

遺物観察表

表5 SB1出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	写真
				外面	内面				
1	高坏	底径 (8.2) 残高 (5.7)	脚部三方向に透孔あり。脚裾部は内湾し、稜は鋭い。	㊸回転ヘラ削り ㊹回転ナデ	回転ナデ	青灰・赤青灰 黒灰・淡灰	長(2) ◎		9
2	高坏	脚基部径(4.5) 残高 (3.8)	脚部三方向に透孔あり。	回転ナデ	回転ナデ	明灰・黒灰 淡青灰	砂粒 ◎		
3	坏蓋	残高 (3.2)	口縁部片。口縁部内端凹状の明瞭な段。外面の稜は低い。	回転ナデ	回転ナデ	淡青灰 暗灰	密 ◎		
4	甕	口径 (15.8) 残高 (4.1)	内湾気味に立ち上がる口縁。口縁端部は内傾する面をもつ。	マメツ	指頭痕→ナデ	茶褐	○		9
5	甕	頸部径(12.8) 残高 (6.0)	頸部部片。	ハケ	㊺ヨコナデ ㊻指頭痕→ナデ	暗褐	石・長(1) 雲 ○		
6	甕	口径 (17.2) 残高 (11.0)	外反する口縁。口縁端部は面をなす。	ハケ(マメツ)	指頭痕(マメツ)	淡橙・暗灰 淡茶褐	△		

表6 SX1出土遺物観察表 土製品

(1)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	写真
				外面	内面				
7	高坏蓋	残高 (1.5)	ボタン状のつまみが付く蓋。つまみ上面は窪む。	回転ナデ	ナデ	淡青灰	密 ○		
8	坏蓋	口径(11.0) 残高 (4.0)	扁平な天井部。口縁部内端に鈍い段をもつ。外面の稜は鋭く尖る。	㊼回転ヘラ削り ㊽回転ナデ	回転ナデ	黄灰 青灰	長(1~3) ◎		
9	坏蓋	口径(12.4) 器高 4.2	扁平な天井部。口縁部内端に段をもつ。外面に丸味をおびた稜をもつ。	㊼回転ヘラ削り ㊽回転ナデ	回転ナデ	灰	砂粒 ◎		
10	坏蓋	口径(11.8) 残高 (5.0)	やや尖る天井部。口縁部内端に鈍い段をもつ。外面の稜は尖る。	㊼回転ヘラ削り ㊽回転ナデ	回転ナデ	青灰	長(1~3) ◎		9
11	坏蓋	口径(11.2) 残高 (4.0)	口縁部内端に段をもつ。外面にやや尖り気味の稜。天井部は欠損。	回転ナデ	回転ナデ	黒灰 青灰	長(1~3) ◎		
12	坏蓋	口径(12.5) 残高 (3.7)	扁平な天井部。口縁部内端に鈍い段をもつ。外面に稜。	㊼回転ヘラ削り ㊽回転ナデ	回転ナデ	青灰	長(1) ◎		9
13	坏蓋	口径(12.6) 残高 (3.4)	口縁部内端は平坦な面をもつ。外面に凹線状の鈍い稜をもつ。	回転ナデ	回転ナデ	灰 白灰	長(1) ◎		
14	坏身	口径(10.5) 器高 4.9	たちあがりは内傾し、内端に鈍い段をもつ。受部は上外方にのびる。扁平な底部。	㊾回転ヘラ削り ㊿回転ナデ	回転ナデ	青灰	砂粒 ◎		9
15	坏身	口径(11.0) 器高 5.3	たちあがりは内傾し、内端に鈍い段をもつ。受部は上外方にのび、やや厚みがある。やや扁平な底部。	㊾回転ヘラ削り ㊿回転ナデ	回転ナデ	青灰	長(1~3) ◎		9
16	坏身	口径(11.2) 器高 4.7	たちあがりはやや外反し、口縁端部は内傾する。口縁部内端に鈍い段をもつ。扁平な底部。	㊾回転ヘラ削り ㊿回転ナデ	回転ナデ	淡灰・淡黄灰 淡灰	石(1) ○		9
17	坏身	口径(10.6) 器高 4.7	たちあがりは内傾し、内端に鈍い段をもつ。受部はやや上外方にのびる。	㊾回転ヘラ削り ㊿回転ナデ	回転ナデ	青灰	長(2) ◎		
18	坏身	口径(11.0) 残高 (5.2)	たちあがりはやや内傾し、口縁部内端に段をもつ。断面三角状の稜は水平方向にのびる。丸味をもった底部。	㊾回転ヘラ削り ㊿回転ナデ	回転ナデ	青灰	密 ◎		

SX1 出土遺物観察表 土製品

(2)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調(外面) (内面)	胎土 焼成	備考	写真
				外面	内面				
19	坏身	口径(11.6) 残高(4.3)	たちあがりは内傾したのち直線的にのびる。受部は水平方向にのびる。	㊸回転ヘラ削り ㊹回転ナデ	回転ナデ	明灰	長(2) ◎		
20	坏身	口径(9.9) 残高(4.4)	たちあがりは内傾気味で、口縁部内端に段をもつ。受部はやや上外方にのびる。丸味のある底部。	㊸回転ヘラ削り ㊹回転ナデ	回転ナデ	青灰	長(1~2) ◎		
21	坏身	口径(10.6) 残高(4.9)	たちあがりはやや直立気味に内傾し、口縁部内端に凹線状の段をもつ。受部は水平方向にのびる。	㊸回転ヘラ削り ㊹回転ナデ	回転ナデ	暗灰	長(1) ◎		
22	坏身	口径(10.6) 残高(4.2)	たちあがりは内傾気味で、口縁部内端に段をもつ。受部は上外方にのびる。	㊸回転ヘラ削り ㊹回転ナデ	回転ナデ	灰	長(1) ◎		
23	坏身	口径(10.8) 残高(4.1)	たちあがりは内傾し、口縁部内端に鈍い段をもつ。受部は水平方向にのびる。	㊸回転ヘラ削り ㊹回転ナデ	回転ナデ	淡灰	密 ◎		
24	坏身	口径(11.4) 残高(4.1)	たちあがりは内傾し、口縁部内端に段をもつ。受部は水平気味にのび、受部端はわずかに窪む。	回転ナデ	回転ナデ	青灰	密・長(2) ◎		
25	坏身	口径(12.4) 残高(4.2)	たちあがりはやや内傾し、口縁部内端に段をもつ。受部は上外方にのびる。	回転ナデ	回転ナデ	灰 青灰	石(1) ◎		
26	坏身	口径(10.8) 残高(3.4)	たちあがりは内傾し、口縁部内端に鈍い段をもつ。受部は水平方向にのびる。	回転ナデ	回転ナデ	灰	石(1) ◎		
27	坏身	口径(10.6) 残高(3.7)	たちあがりはやや短く、直立気味にのびる。口縁部内端に鈍い段をもつ。受部は水平方向にのびる。	㊸回転ヘラ削り ㊹回転ナデ	回転ナデ	暗灰	石・長(1) ◎		
28	坏身	口径(11.8) 残高(3.1)	たちあがりは内傾気味で、口縁部内端に段をもつ。受部の器壁はうすく、上外方にのびる。	回転ナデ	回転ナデ	赤灰	石(2) ◎		
29	高坏	口径(11.0) 底径(8.6) 器高 9.2	たちあがりは直線的で、口縁部内端に段をもつ。受部はやや下方向にのびる。脚部三方向に透孔。脚端部はやや外反する。	㊸回転ナデ ㊹回転ヘラ削り ㊺回転ナデ	回転ナデ	灰	長(2) ◎	9	
30	高坏	底径(8.5) 残高(5.6)	脚部透孔三方向。脚端部は内湾する。	㊻回転カキ目 ㊼(脚端)回転ナデ	回転ナデ	青灰	長(1~4) ◎	10	
31	高坏	底径(8.8) 残高(5.4)	脚部透孔三方向。脚端部は外反し、尖る。	回転ナデ	回転ナデ	白灰	長(1) ◎		
32	高坏	底径(10.2) 残高(4.5)	脚部透孔三方向。脚端部は内湾する。	㊻回転カキ目 ㊼(脚端)回転ナデ	回転ナデ	淡青灰 暗灰	長(1) ◎		
33	高坏	底径(8.6) 残高(3.8)	脚部透孔三方向。脚端部に明瞭な段をもつ。	回転ナデ	回転ナデ	淡赤灰	密 ◎		
34	高坏	底径(8.0) 残高(4.8)	脚部透孔三方向。脚端部は丸くおさまられている。	㊻回転カキ目 →回転ナデ ㊼(脚端)回転ナデ	回転ナデ	暗灰 淡灰	石・長(1) ◎		
35	高坏	受部径(13.2) 残高(4.5)	受部は水平方向にのびる。脚部透孔三方向。	㊽(坏体)回転ナデ ㊾(坏底)回転ヘラ削り	回転ナデ	暗青灰	砂粒 ◎		
36	壺	口径(19.4) 残高(5.7)	口縁は外反し、口縁端部は内傾する面をもつ。	㊿回転ナデ ㊽ハケ→ナデ	㊿回転ナデ ㊽指頭痕→ナデ	淡褐	石(3) ◎	10	
37	鉢	口径(9.0) 残高(5.4)	口縁は短く、外反する。張りの強い脚部をもつ。	㊿ヨコナデ ㊽指頭痕→ナデ	㊿ヨコナデ ㊽指頭痕→ナデ	橙褐	砂粒 ○		

遺物観察表

表7 SX1出土遺物観察表 滑石製白玉

(1)

番号	残存	法 量				色 調
		径 (cm)	孔 (cm)	高さ (cm)	重さ (g)	
38	一部欠損	0.34×0.47	0.17×0.20	0.31×0.32	0.095	淡青茶
39	一部欠損	0.46×0.48	0.19×0.21	欠損×0.33	0.093	暗青灰
40	一部欠損	0.51×0.54	0.20	0.26×0.31	0.122	暗青灰
41	一部欠損	0.49×0.50	0.27×0.28	0.21×欠損	0.085	黄灰
42	完存	0.48×0.50	0.18×0.21	0.29×0.30	0.101	黄青
43	一部欠損	0.48×0.51	0.20×0.22	欠損×0.52	0.152	暗灰
44	完存	0.40×0.41	0.40	0.28×0.37	0.070	暗灰
45	完存	0.41×0.42	0.21×0.23	0.36×0.39	0.095	黒灰
46	完存	0.53×0.54	0.25	0.26×0.31	0.115	黒灰
47	一部欠損	0.48×0.49	0.23×0.25	欠損×0.40	0.105	灰
48	一部欠損	0.52×0.54	0.21×0.23	0.37×0.40	0.153	青灰
49	一部欠損	欠損×0.52	0.21×0.22	0.35×0.36	0.156	黒灰
50	一部欠損	0.55×0.56	0.22×0.27	欠損×0.34	0.131	暗灰
51	完存	0.42×0.44	0.24×0.25	0.32×0.40	0.094	暗灰
52	一部欠損	0.52×0.53	0.24	0.20×0.30	0.103	暗灰
53	一部欠損	0.48×0.49	0.19×0.20	0.23×0.28	0.091	灰
54	完存	0.60×0.62	0.19×0.22	0.26×0.33	0.176	暗灰
55	完存	0.50×0.52	0.23×0.27	0.33×0.40	0.141	暗灰
56	一部欠損	0.45×0.48	0.20×0.21	欠損×0.35	0.089	暗灰
57	完存	0.51×0.52	0.20	0.20×0.30	0.121	青灰
58	完存	0.49×0.50	0.21×0.22	0.29×0.30	0.116	灰褐
59	完存	0.49	0.23	0.22×0.33	0.094	黒灰
60	完存	0.50×0.52	0.20	0.28×0.32	0.134	青灰
61	完存	0.45	0.18×0.20	0.34×0.28	0.086	暗灰
62	一部欠損	0.50×0.51	0.17×0.20	欠損×0.30	0.109	暗灰
63	完存	0.51×0.52	0.19	0.30×0.36	0.152	暗灰
64	完存	0.52	0.18×0.20	0.24×0.26	0.108	褐
65	完存	0.49×0.50	0.27×0.28	0.30×0.35	0.107	暗灰
66	一部欠損	0.47×0.49	0.24×0.25	0.25×0.27	0.076	暗灰
67	完存	0.48	0.20	0.23×0.25	0.084	灰褐
68	完存	0.44×0.47	0.18×0.21	0.21×0.30	0.072	灰
69	一部欠損	0.46×0.48	0.22	0.26×0.40	0.111	青灰
70	一部欠損	0.47×0.49	0.18	0.24×0.30	0.095	灰
71	完存	0.50	0.19×0.20	0.17×0.24	0.079	暗灰
72	完存	0.48×0.49	0.13×0.15	0.30×0.38	0.129	暗灰
73	完存	0.51×0.54	0.23×0.24	0.36×0.44	0.189	青灰
74	一部欠損	0.48×0.50	0.22×0.34	0.31×0.38	0.088	暗灰
75	一部欠損	0.49×0.51	0.25×0.30	0.18×0.35	0.086	暗灰
76	完存	0.48×0.49	0.25	0.27×0.30	0.098	灰
77	一部欠損	0.50	0.22	欠損×0.32	0.113	暗灰

SX 1 出土遺物観察表 滑石製白玉

(2)

番号	残 存	法 量				色 調
		径 (cm)	孔 (cm)	高さ (cm)	重さ (g)	
78	一部欠損	0.44×0.47	0.18×0.19	0.16×0.26	0.068	灰 (黄混)
79	一部欠損	0.55×0.56	0.23	0.27×0.37	0.146	暗灰
80	完存	0.42×0.44	0.21	0.22×0.24	0.069	明灰
81	完存	0.50	0.24	0.17×0.22	0.056	黒灰
82	完存	0.49×0.50	0.19×0.20	0.29×0.30	0.102	暗灰
83	完存	0.48×0.50	0.19	0.36×0.37	0.140	黄灰
84	一部欠損	0.50×0.51	0.21	欠損×0.28	0.099	黄灰
85	完存	0.51×0.53	0.27	0.33×0.35	0.124	暗灰
86	完存	0.49×0.50	0.25	0.22×0.27	0.088	黒灰
87	一部欠損	0.50×0.51	0.20	0.17×0.28	0.085	暗灰
88	完存	0.49×0.50	0.26×0.28	0.37×0.38	0.114	青灰
89	完存	0.57×0.59	0.23	0.37×0.40	0.200	暗灰
90	完存	0.50×0.53	0.19×0.21	0.27×0.37	0.144	暗灰
91	完存	0.50×0.52	0.17×0.19	0.22×0.25	0.102	黄褐
92	完存	0.50	0.20×0.21	0.17×0.20	0.064	暗灰
93	完存	0.49×0.50	0.19×0.21	0.20	0.070	褐
94	完存	0.50×0.53	0.20×0.21	0.27×0.32	0.146	暗灰
95	完存	0.50	0.18×0.20	0.20×0.25	0.086	暗灰
96	一部欠損	0.45×0.47	0.19×0.21	0.31×0.34	0.100	青灰
97	完存	0.41×0.45	0.18×0.20	0.28×0.30	0.068	青灰
98	完存	0.47×0.48	0.18×0.20	0.21×0.23	0.086	灰褐
99	一部欠損	欠損×0.50	0.23	欠損×0.21	0.049	暗灰
100	完存	0.46×0.47	0.17×0.19	0.27×0.30	0.095	灰褐
101	一部欠損	0.46×0.49	0.15×0.16	0.26×0.28	0.107	褐
102	一部欠損	0.50	0.22×0.23	欠損×0.24	0.066	暗灰
103	完存	0.49	0.20×0.22	0.12×0.21	0.065	暗灰
104	完存	0.45×0.48	0.17×0.18	0.38	0.119	暗灰
105	一部欠損	0.47×0.49	0.18×0.20	0.29×0.31	0.105	褐
106	一部欠損	0.43×0.45	0.21	欠損×0.30	0.068	灰
107	一部欠損	0.47×0.50	0.15	0.28×0.32	0.133	茶褐
108	一部欠損	0.49	0.21×0.22	欠損×0.40	0.111	暗灰
109	完存	0.44×0.50	0.21×0.24	0.32×0.41	0.105	灰
110	完存	0.48×0.49	0.19	0.30×0.32	0.123	淡褐灰
111	一部欠損	0.49	0.24×0.26	0.28×0.39	0.112	灰
112	完存	0.48×0.49	0.25×0.27	0.29×0.30	0.102	暗灰
113	一部欠損	0.42×0.43	0.20×0.21	0.34×0.36	0.096	灰
114	完存	0.47×0.48	0.21	0.25×0.27	0.073	灰
115	完存	0.49×0.50	0.21×0.22	0.36×0.38	0.128	暗灰
116	一部欠損	0.46×0.48	0.19×0.20	0.21×0.32	0.086	灰
117	完存	0.50×0.51	0.22	0.18×0.29	0.125	灰褐

遺物観察表

SX1 出土遺物観察表 滑石製白玉

(3)

番号	残 存	法 量				色 調
		径 (cm)	孔 (cm)	高さ (cm)	重さ (g)	
118	完存	0.50×0.53	0.21×0.23	0.25×0.31	0.122	暗灰
119	完存	0.50×0.52	0.19×0.20	0.21×0.22	0.091	褐
120	完存	0.40×0.41	0.20×0.21	0.37×0.40	0.082	暗灰
121	完存	0.49×0.50	0.19×0.20	0.38×0.40	0.149	黒灰
122	一部欠損	0.51×0.52	0.21×0.23	0.13×0.21	0.072	暗灰
123	一部欠損	0.50	0.23×0.25	欠損×0.25	0.065	暗灰
124	一部欠損	0.50×欠損	0.21×0.23	0.20×0.38	0.115	黒灰
125	完存	0.54×0.57	0.21×0.25	0.11×0.21	0.080	灰褐
126	完存	0.52	0.21×0.23	0.21×0.23	0.103	暗灰
127	完存	0.48	0.13×0.15	0.29×0.31	0.103	灰褐
128	完存	0.50×0.51	0.21×0.22	0.17×0.19	0.073	暗灰
129	一部欠損	0.51	0.20×0.21	0.28×0.35	0.125	暗灰
130	完存	0.53×0.54	0.24×0.27	0.31×0.40	0.142	暗灰
131	一部欠損	0.51	0.21	欠損×0.27	0.090	暗灰
132	完存	0.52×0.54	0.21×0.23	0.22×0.30	0.113	暗灰
133	完存	0.51×0.54	0.23×0.25	0.18×0.22	0.092	暗灰
134	完存	0.49×0.51	0.18×0.20	0.33×0.35	0.147	暗灰
135	一部欠損	0.50×0.59	0.20×0.21	0.22×0.28	0.100	暗灰
136	一部欠損	0.50×0.51	0.19×0.20	0.14×0.19	0.075	暗灰
137	完存	0.48×0.50	0.24×0.27	0.21×0.28	0.075	暗灰
138	一部欠損	0.45×0.47	0.21×0.22	0.28×0.31	0.077	暗灰
139	一部欠損	0.52×0.53	0.15×0.18	0.27×0.29	0.116	茶褐
140	一部欠損	0.50	0.20×0.22	0.11×0.17	0.050	暗灰
141	完存	0.44×0.46	0.21×0.23	0.38×0.43	0.109	暗灰
142	完存	0.44×0.47	0.17×0.19	0.31×0.34	0.123	白褐
143	完存	0.49	0.19	0.22×0.25	0.085	淡褐 (一部暗灰)
144	完存	0.48	0.18×0.20	0.31×0.32	0.122	白褐
145	一部欠損	0.49×0.51	0.21×0.24	0.29×0.34	0.113	暗灰
146	完存	0.50×0.53	0.19×0.21	0.25×0.31	0.096	暗灰
147	一部欠損	0.51×0.52	0.20×0.21	0.24×0.33	0.199	青灰
148	完存	0.49×0.50	0.20×0.25	0.15×0.20	0.056	黒灰
149	一部欠損	0.50×0.52	0.22×0.24	0.17×0.35	0.103	灰
150	完存	0.45×0.46	0.21×0.24	0.27×0.30	0.083	灰
151	完存	0.49×0.51	0.18×0.21	0.23×0.25	0.100	青灰
152	一部欠損	0.48×0.49	0.18×0.21	0.38×0.40	0.133	灰
153	完存	0.48×0.50	0.18×0.19	0.30×0.31	0.117	灰
154	一部欠損	0.45×0.48	0.17×0.18	0.26×0.28	0.079	白褐
155	完存	0.49×0.50	0.20×0.21	0.20×0.21	0.077	白褐
156	完存	0.46×0.49	0.25×0.27	0.22×0.26	0.063	青灰
157	一部欠損	0.42×0.44	0.14×0.15	0.26	0.081	灰褐

SX1 出土遺物観察表 滑石製白玉

(4)

番号	残 存	法 量				色 調
		径 (cm)	孔 (cm)	高さ (cm)	重さ (g)	
158	一部欠損	0.50×0.52	0.20×0.21	0.22×0.32	0.113	暗灰
159	一部欠損	0.45×0.48	0.21×0.23	0.30×0.35	0.094	茶褐
160	完存	0.49	0.22	0.25×0.27	0.092	暗灰
161	完存	0.54×0.55	0.21×0.22	0.27×0.30	0.143	暗灰
162	完存	0.52	0.21	0.27×0.35	0.136	暗灰
163	一部欠損	0.48×0.49	0.20×0.21	0.25	0.092	灰褐
164	一部欠損	0.46×0.48	0.17×0.19	欠損×0.26	0.065	白褐
165	完存	0.49×0.51	0.19	0.23×0.30	0.114	黒灰
166	一部欠損	0.47×0.48	0.21×0.22	0.15×0.22	0.055	暗灰
167	完存	0.50×0.55	0.21×0.22	0.29×0.40	0.153	青灰
168	一部欠損	0.45×0.47	0.22	0.33×0.38	0.110	暗灰
169	一部欠損	0.44	0.19×0.20	0.17×0.23	0.051	暗灰
170	一部欠損	0.50×0.52	0.20×0.23	0.25×0.31	0.111	青灰
171	完存	0.49×0.50	0.14×0.16	0.18×0.24	0.095	暗茶褐
172	一部欠損	欠損×0.49	0.14×0.15	0.30×0.31	0.117	灰
173	完存	0.47×0.49	0.25×0.28	0.26×0.28	0.084	暗灰
174	一部欠損	0.53×0.54	0.21×0.22	0.24×0.30	0.125	暗灰
175	一部欠損	0.51×0.57	0.19×0.21	0.28×0.31	0.123	暗灰
176	一部欠損	0.47×0.48	0.12×0.15	0.26×0.30	0.102	白灰
177	一部欠損	0.50×0.51	0.21×0.25	0.23×0.32	0.088	暗灰
178	完存	0.47×0.48	0.20×0.23	0.23×0.31	0.082	黒灰
179	一部欠損	0.50×0.51	0.20	0.18×0.27	0.081	暗灰
180	完存	0.52	0.20×0.21	0.31×0.36	0.147	暗灰
181	一部欠損	0.48	0.20×0.21	欠損×0.35	0.095	黒灰
182	一部欠損	0.49×0.50	0.21	欠損×0.38	0.123	灰
183	一部欠損	0.48×0.49	0.13×0.15	0.30×0.31	0.123	灰褐
184	完存	0.51×0.53	0.19×0.20	0.36×0.41	0.175	暗灰
185	完存	0.50×0.52	0.19	0.31×0.36	0.157	青灰
186	一部欠損	0.44	0.15×0.16	0.27×0.28	0.081	明灰
187	一部欠損	0.51×0.52	0.21×0.24	0.35×0.42	0.159	暗褐
188	一部欠損	0.48×0.49	0.20	0.23×0.25	0.085	淡褐
189	完存	0.47×0.50	0.20×0.21	0.34×0.39	0.126	灰
190	完存	0.51×0.52	0.23×0.25	0.22×0.33	0.116	暗灰
191	完存	0.50×0.51	0.12×0.14	0.24×0.28	0.121	灰褐
192	完存	0.53×0.54	0.19×0.21	0.30×0.31	0.144	暗灰褐
193	一部欠損	0.49×0.50	0.20	0.24	0.087	褐
194	完存	0.50×0.51	0.19×0.20	0.26×0.35	0.132	青灰
195	一部欠損	欠損×0.54	0.20×0.23	0.23×0.25	0.107	褐
196	一部欠損	0.51×0.52	0.21	0.34	0.132	暗灰
197	一部欠損	0.50×0.52	0.21×0.22	0.29×0.38	0.142	暗灰

遺物観察表

SX1 出土遺物観察表 滑石製臼玉

(5)

番号	残 存	法 量				色 調
		径 (cm)	孔 (cm)	高さ (cm)	重さ (g)	
198	完存	0.46×0.48	0.18×0.19	0.18×0.24	0.068	暗灰
199	完存	0.49×0.50	0.22×0.23	0.12×0.17	0.053	黒灰
200	完存	0.50×0.51	0.20	0.17×0.23	0.087	黒灰
201	一部欠損	0.42×0.44	0.17	欠損×0.38	0.094	暗灰
202	完存	0.44×0.50	0.20×0.21	0.18×0.21	0.055	暗灰
203	一部欠損	0.48×0.50	0.21×0.23	0.14×0.25	0.078	青灰
204	完存	0.46×0.48	0.26×0.28	0.26×0.33	0.085	暗灰
205	完存	0.46×0.49	0.20	0.26×0.29	0.104	灰褐
206	完存	0.46×0.48	0.19	0.26×0.29	0.092	茶褐
207	一部欠損	0.50×0.52	0.15×0.17	欠損×0.35	0.125	茶褐
208	一部欠損	0.46×0.47	0.18×0.19	0.25×0.31	0.091	茶褐
209	完存	0.49×0.52	0.20	0.19×0.28	0.097	暗灰
210	完存	0.45×0.48	0.23×0.27	0.33×0.42	0.110	暗灰
211	完存	0.44×0.48	0.23×0.25	0.13×0.16	0.039	灰
212	完存	0.45×0.47	0.20×0.21	0.23×0.33	0.093	青灰
213	完存	0.46×0.47	0.18×0.20	0.25×0.31	0.088	暗灰
214	完存	0.44×0.45	0.19×0.22	0.32×0.40	0.093	暗灰
215	完存	0.51×0.52	0.20×0.21	0.33×0.37	0.135	暗灰
216	一部欠損	0.48×0.53	0.23×0.24	0.18×0.23	0.090	暗灰
217	完存	0.49×0.50	0.22×0.24	0.30×0.31	0.118	暗灰
218	一部欠損	欠損×0.54	0.21×0.25	欠損×0.32	0.107	青灰
219	完存	0.50×0.52	0.20×0.21	0.22×0.28	0.105	暗灰
220	一部欠損	0.48×0.49	0.21	0.16×0.21	0.065	暗灰
221	完存	0.46×0.47	0.24×0.26	0.32×0.33	0.108	暗灰
222	一部欠損	0.51	0.20×0.22	0.20×0.28	0.097	青灰
223	完存	0.46×0.49	0.22	0.21×0.31	0.085	暗灰
224	完存	0.49×0.51	0.20×0.22	0.25×0.30	0.103	黒灰
225	完存	0.49×0.52	0.25×0.28	0.30×0.38	0.128	暗灰
226	完存	0.47×0.48	0.15	0.29×0.30	0.109	灰褐
227	一部欠損	0.47×0.49	0.18×0.20	0.26×0.23	0.109	灰褐
228	完存	0.49×0.51	0.19	0.29×0.30	0.114	暗灰
229	一部欠損	0.48×0.49	0.18	0.30×0.31	0.120	灰褐
230	完存	0.50×0.51	0.21	0.21×0.32	0.118	暗灰
231	一部欠損	0.48×0.49	0.23×0.25	0.36×0.40	0.113	暗灰
232	完存	0.49×0.50	0.21	0.19×0.28	0.084	黒灰
233	完存	0.45×0.46	0.18×0.20	0.13×0.19	0.052	褐・黒灰

表 8 包含層出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調 整		色調 (外面) (内面)	胎 土 焼 成	備考	写真
				外 面	内 面				
234	壺	底径 (7.8) 残高 (2.1)	平底。	マメツ	マメツ	黒褐・白黄 黒褐	石・長 (2) 雲 ○		
235	甕	底径 (3.2) 残高 (4.2)	平底。	ハケ (5本/1cm)	マメツ	⑦ 赤褐 ⑧ 黒褐 ⑨ 淡黄	石・長 (2) ○		
236	壺	底径 (6.2) 残高 (3.3)	平底。底面に広葉樹の葉脈圧痕。	マメツ	マメツ	黄褐 白橙	長 (1) ○		10
237	壺	残高 (3.7)	二重口縁壺。	ヨコナデ	マメツ	白褐 黄褐	石 (1) ○		
238	碗	底径 (7.0) 残高 (1.5)	貼り付け高台。外側に接地面をもつ。	回転ナデ	回転ナデ	白灰	密 ◎		
239	鉢	残高 (3.7)	断面三角形の縁帯状の口縁。	㊦ 回転ナデ ㊧ ナデ	ナデ	淡灰	砂粒 ○		
240	土釜	残高 (4.6)	脚端部片。	ナデ	ナデ	茶褐	砂粒 ○		
241	碗	底径 (6.6) 残高 (1.8)	貼り付け輪高台。「ハ」の字に付いている。	マメツ	マメツ	淡黄褐 淡灰褐	密 ○		
242	碗	底径 (6.6) 残高 (1.5)	貼り付け輪高台。高台は底体部内側に付く。	マメツ	マメツ	淡橙褐	砂粒 ○		
243	碗	底径 (7.6) 残高 (1.7)	貼り付け輪高台。「ハ」の字に付いている。	マメツ	マメツ	淡赤 淡黄	密 ○		

表 9 包含層出土遺物観察表 石製品

番号	器 種	残 存	材 質	法 量				備考	写真
				長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)		
244	石核		サヌカイト	7.8	5.4	1.8	69.87		10
245	打製石鏃	一部欠損	サヌカイト	3.4	2.2	0.55	3.05		10



写真1 調査地全景（北より）



写真2 完掘状況全景（南より）



写真3 SB1遺物出土状況（北西より）



写真4 SB1・SD1近景（南西より）



写真5 掘立1完掘状況（北東より）



写真6 SK1・SD1近景（西より）



写真7 SX1遺物出土状況(1)(東より)



写真8 SX1遺物出土状況(2)

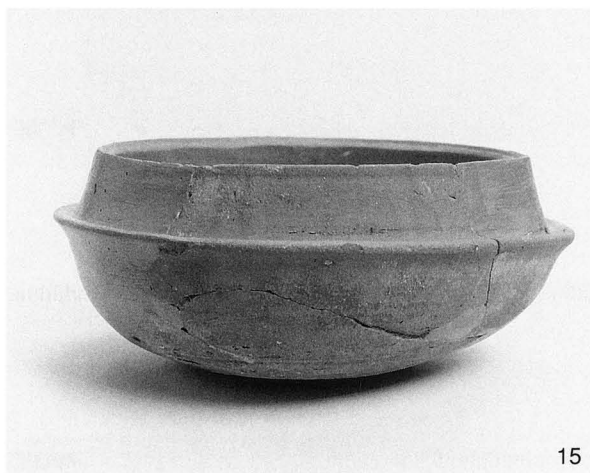
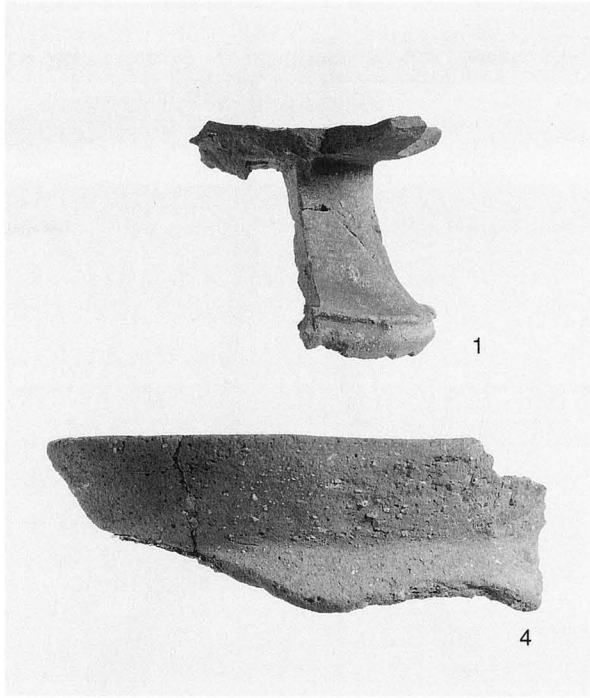


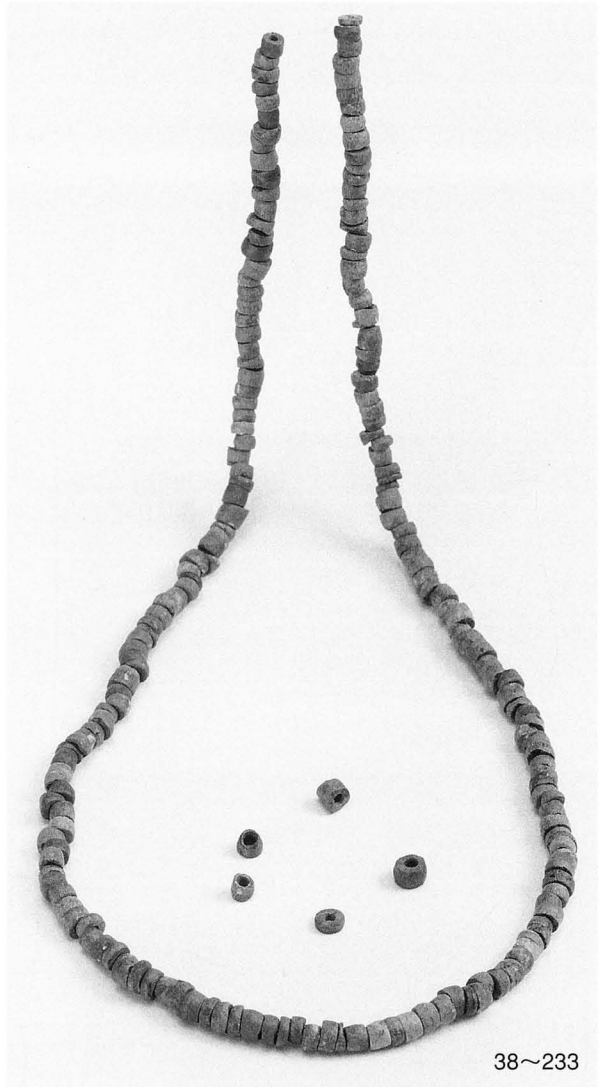
写真9 SB1・SX1出土遺物（1・4：SB1，10・12・14～16・29：SX1）



30



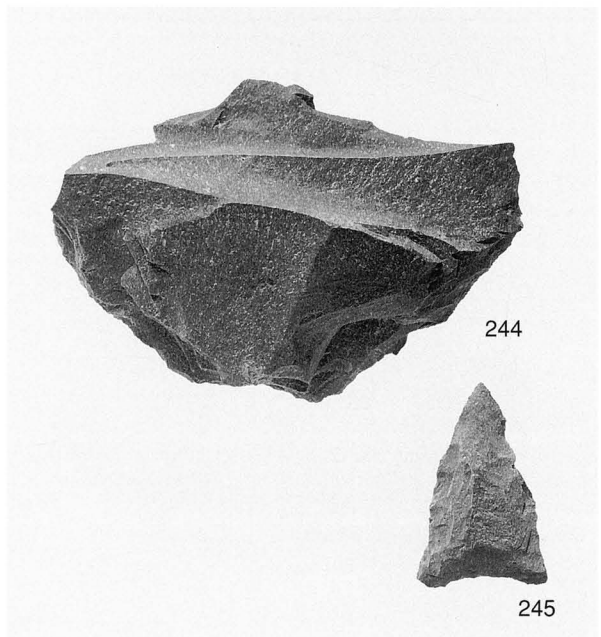
36



38~233



236



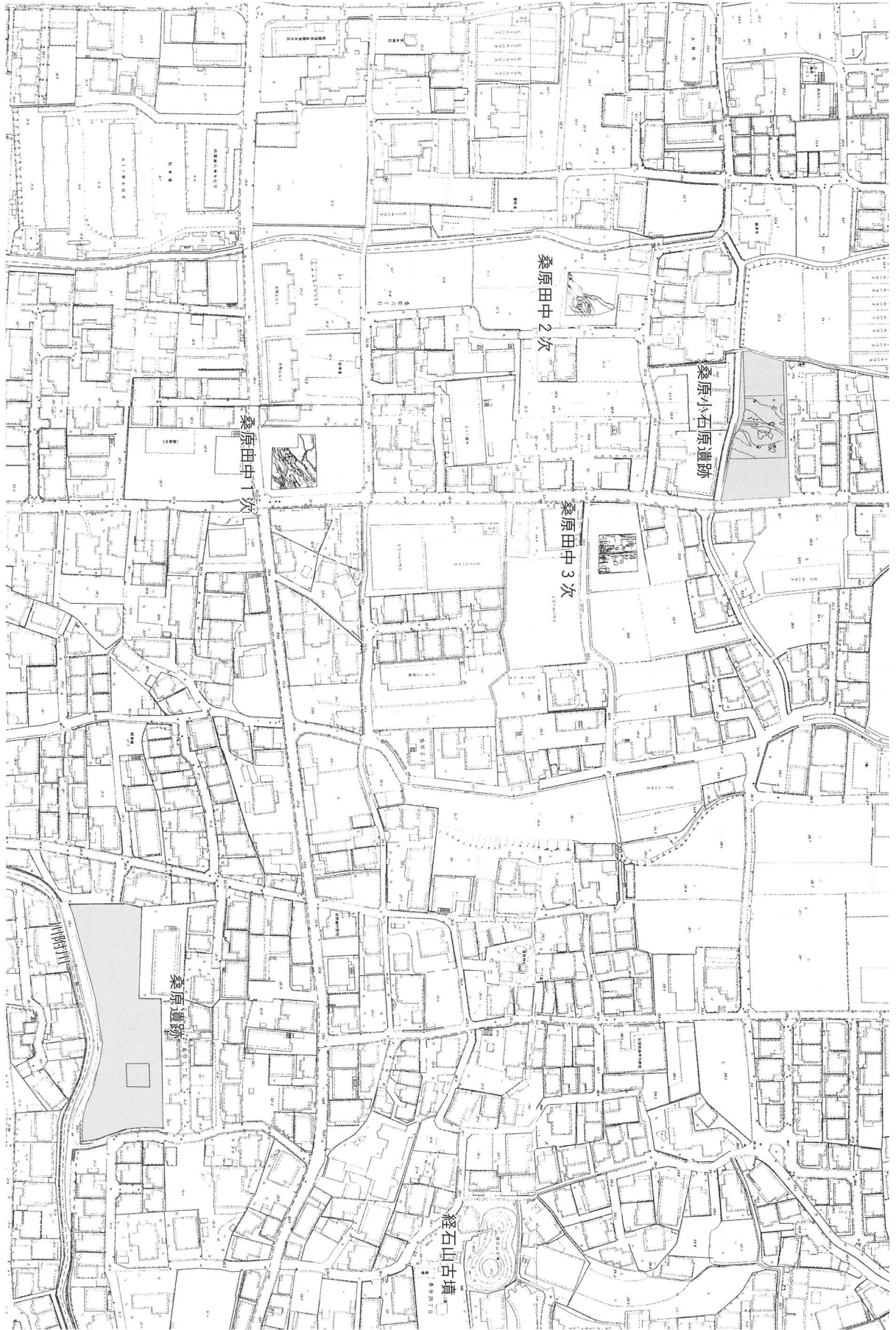
244

245

写真10 SX1・包含層出土遺物 (30・36・38~233 : SX1, 236・244・245 : 包含層)

第3章

くわ ばら
桑 原 遺 跡



第17図 位置図 (S=1:2,500)

第3章 桑原遺跡

1. 調査の経過

(1) 調査に至る経緯

1975（昭和50）年5月、吉見国忠氏より、松山市桑原町457～461における住宅建設にあたって、当該地の埋蔵文化財の確認願いが松山市教育委員会に提出された（第17図）。当地の東半部は、松山市の指定する埋蔵文化財包蔵地の「84 経石山古墳、85 三島神社古墳跡」内に含まれている。

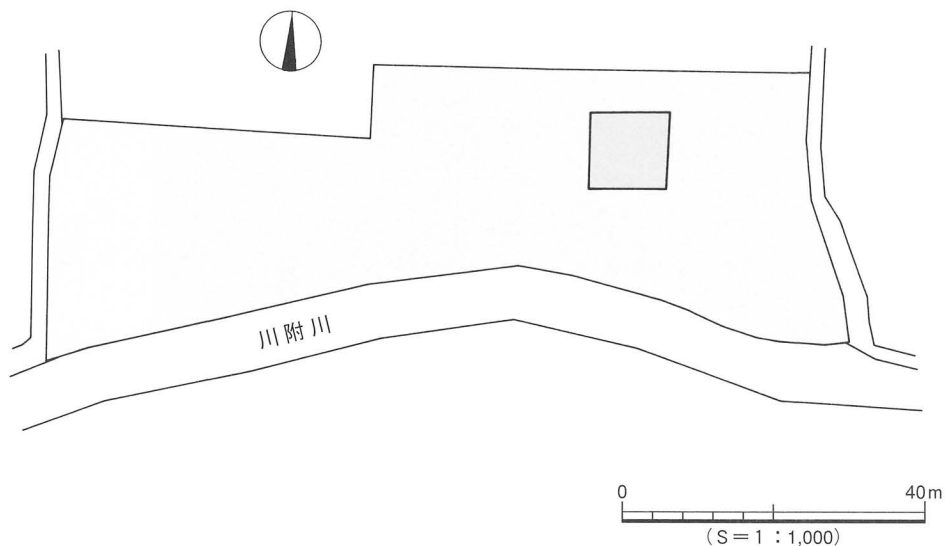
よって、開発によって失われる部分に対して、発掘調査を実施した。なお、調査区は申請地東半部の10m四方、面積100m²に設定した（第18図）。

(2) 調査組織

遺跡名	桑原（くわばら）遺跡
調査地	松山市桑原町457～461（現、桑原七丁目3-27・28・37）
調査期間	1975（昭和50）年5月24日～同年5月29日
調査面積	対象面積2,379m ² 、実施面積100m ²
調査担当	森 光晴（当時、文化財専門委員）

2. 調査概要

調査は、一週間で行う。はじめに表土や近現代坑等を除去し、つづいて遺構を検出し、竪穴式住居址かと思われる部分を掘り下げた。その際に焼土様の地点を検出している。ただし、報告では、記録



第18図 調査区測量図

類がなく、竪穴式住居址として判断することをひかえ、性格不明遺構（写真12）とした。出土遺物はほとんどなく、保管された遺物もない。時期は特定できない。調査は遺構の平板測量と、写真を撮影して終える。

調査地は、現在の川附川に隣接し、桑原地区の南端を占める位置にある。調査地が狭いこともあり、調査では明確な集落遺構を検出することはできなかった（第17・18図）。

〔関連文献の訂正〕

『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅰ』松山市教育委員会、1987年の33ページ「1. 昭和46～59年度 発掘調査遺跡一覧表（Ⅰ）」では、本調査（21 桑原遺跡）の時代欄に古墳前、遺構遺物等欄に住居址とあるが、時代欄は「不明」、遺構遺物等欄は「空白」に修正していただきたい。



写真11 調査地全景
（南西より）



写真12 性格不明遺構
（南東より）

第4章

桑原くわばら小石原こいしばら遺跡

第4章 桑原小石原遺跡

1. 調査の経過

(1) 調査に至る経緯

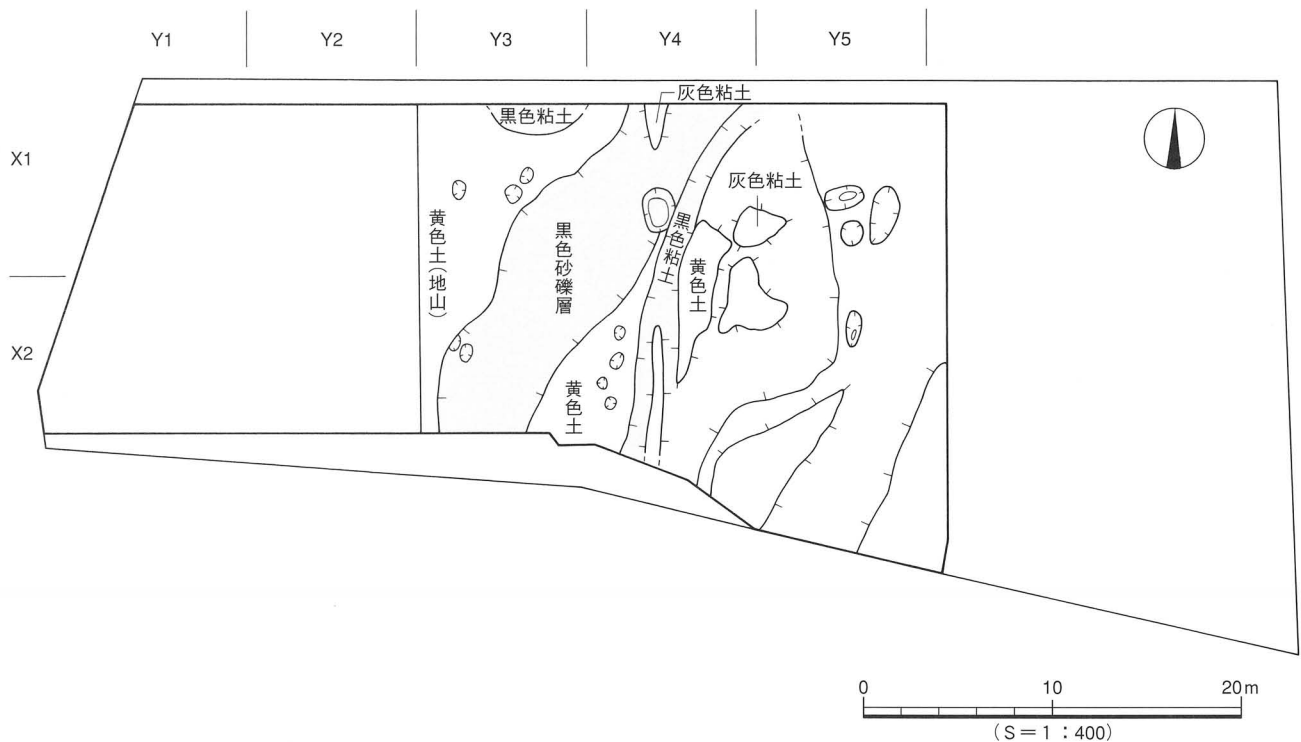
1976（昭和51）年11月、河崎清高氏より、松山市桑原町723（現：桑原六丁目4-42）における宅地造成にあたって、当該地の埋蔵文化財の確認願いが松山市教育委員会に提出された（44ページ、第17図）。当地は、松山市の指定する埋蔵文化財包含地の「83 枝松遺物包含地」内に含まれる。

よって、開発により失われる地点に対して、記録保存のために発掘調査を実施した。

なお、遺跡名は字名を用いて桑原小石原遺跡とした。

(2) 調査組織

遺跡名	桑原小石原（くわばらこいしばら）遺跡
調査地	松山市桑原町723（現、松山市桑原六丁目4-42）
調査期間	1977（昭和52）年3月2日～同年3月25日
調査面積	対象面積1,392m ²
調査担当	西尾幸則



第19図 遺構配置図（略図：日誌より作成）

2. 遺構と遺物

(1) 検出遺構 (第19図、写真13・14)

調査は、調査区内を9m四方のグリッドに分けて進め、南北は北からX1・X2、東西は西からY1～Y5と呼称した。

本調査に関する測量図は、現在所在が不明で、各遺構の情報は充分でない。第19図は遺構配置図であるが、この図は詳細な調査日誌から作成したものである。よって、遺構の位置関係は判明するものの、正確な測量値は読み取れない。

調査地は、旧自然流路上に位置していた。調査では、流路内外で遺構もしくは凹地を10数基検出し、流路を埋めた堆積土から遺物が出土している。

層位は、黄色土は基盤層で、地山と呼称されるものである。この上に、灰色粘土がある。灰色粘土が堆積した後に、流路が形成されたようで、流路は黒色砂礫層と黒色粘土とで埋められている。

黒色砂礫が堆積する流路 (第19図)

X1Y4からX2Y3にある。幅は4～7m、検出長は20mとなる。北側では灰色粘土が中洲状に検出されている。中央部と南部には、遺構や凹地がある。堆積土中からは第20図1～6の土器が出土している。

出土遺物 (第20図1～6、写真15)

1は東播系こね鉢で、口縁部が拡張され、端部はナデによりわずかに凹む。2・4～6は弥生土器で、2は複合口縁壺、4は大型の甕、5は壺の底部、6は受部が「U」字状に傾斜する支脚になる。3は土師器の高坏脚部になる。

時期：出土物の最も新しい第20図1で判断すれば中世になる。

黒色粘土が堆積する流路 (第19図)

X1Y4からX2Y4にある。幅は1m代で、検出長は20mとなる。北側では黒色砂礫層と接し、同層を切る様子が読み取れる。また、南側では流路が二つに分かれている。本層からも遺物は出土していると思われるが、遺物の注記からは特定できるものがない。

時期：黒色砂礫の流路を切っているとすれば、中世以降になる。

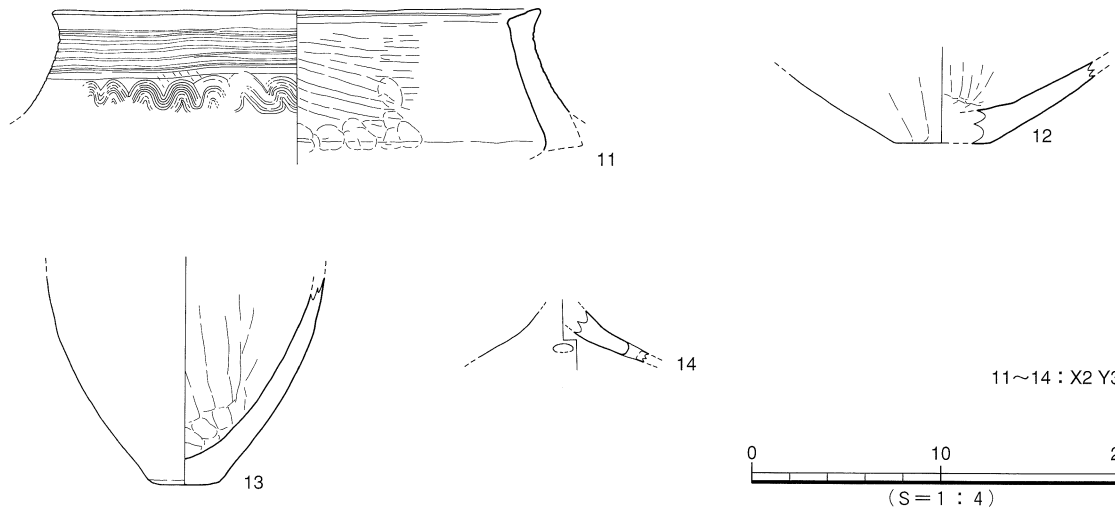
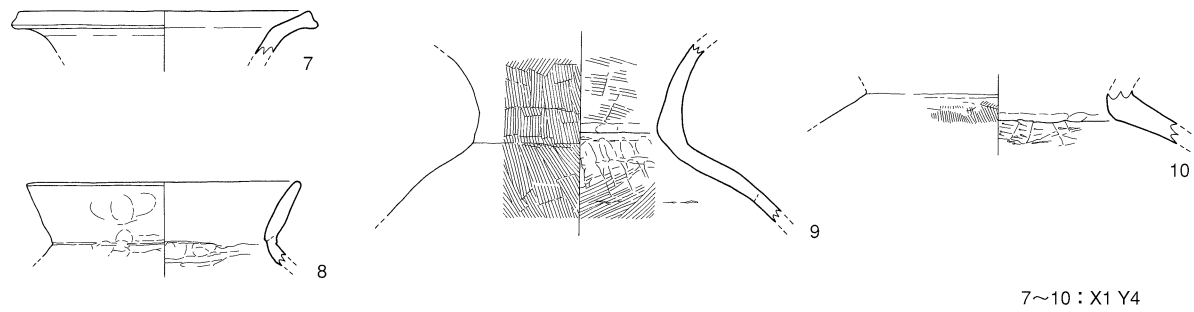
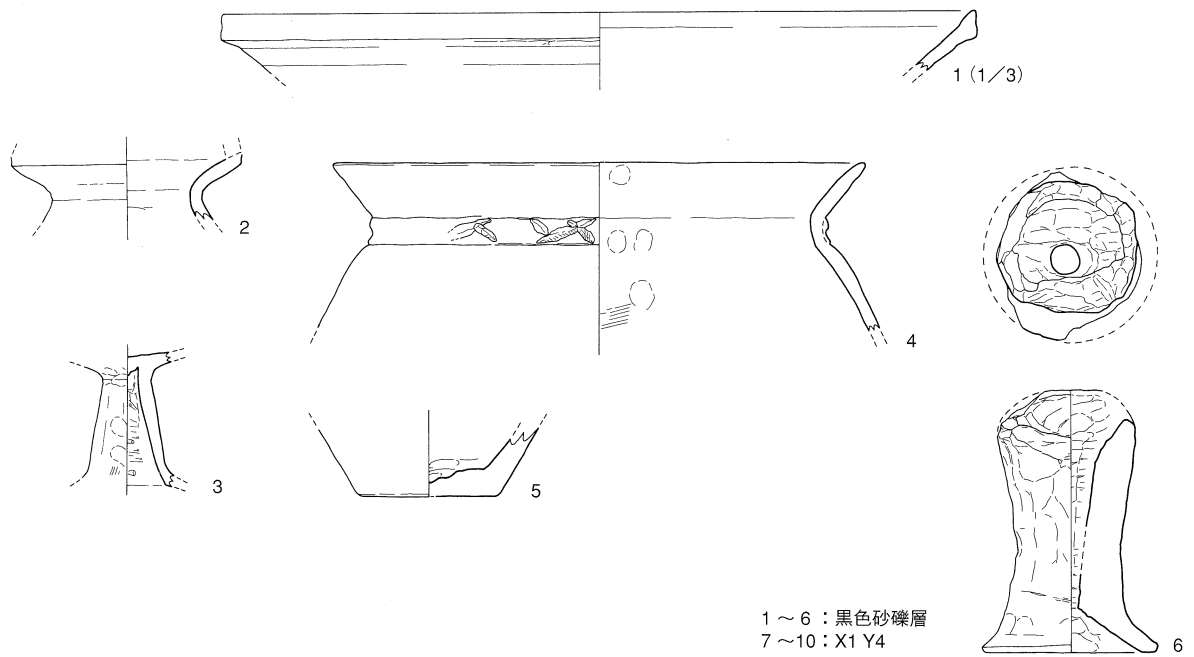
(2) 出土遺物 (第20・21図、写真15)

調査区内からの出土遺物はコンテナ1箱分で、実測可能な遺物は第20・21図である。遺物は、注記により出土地点を判読し、出土地点が特定されたなかで区別して提示する。

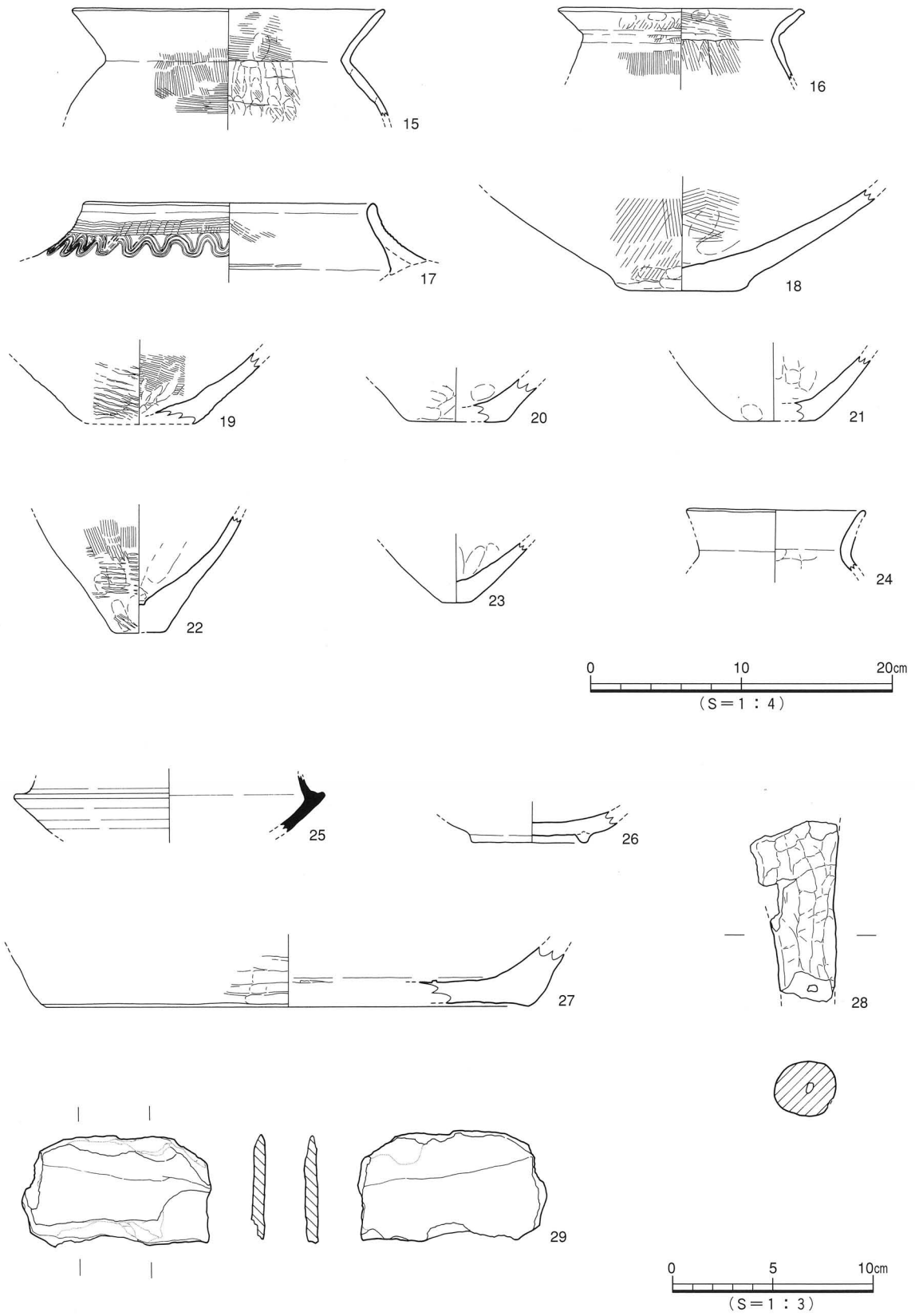
X1Y4出土品 (第20図7～10) 7・9は弥生土器で壺、8・10は土師器の壺になる。

X2Y3出土品 (第20図11～14) 11～14は弥生土器で、11・12は壺、13は甕、14は脚付鉢。

出土地点不明品 (第21図15～29) 15～23は弥生土器、24は古墳時代土師器、25は須恵器、26は中世土師器坏、27は備前焼大甕、28は三足鍋脚部、29は石器で石庖丁の未製品となる。



第20図 包含層・グリッド出土遺物実測図



第21図 出土地点不明遺物実測図

〔関連文献の訂正〕

『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅰ』松山市教育委員会、1987年のP33「1. 昭和46～59年度発掘調査遺跡一覧表（Ⅰ）」、38桑原小石原遺跡の時代欄は中世、遺構遺物等欄は自然流路に修正していただきたい。

遺物一覧 ー凡例ー

(1) 遺物観察表は、宮内慎一と梅木謙一が作成した。

法量欄 () : 復元推定値

調整欄 土器の各部位名称を略記。

例) 口→口縁部、胴中→胴部中位、柱→柱部、胴底→胴部～底部。

胎土欄 胎土欄では混和剤を略記した。

例) 砂→砂粒、長→長石、石→石英、安→安山岩、密→精製土。

() 内の数値は混和剤粒子の大きさを示す。

例) 石・長 (1～4)、多→「1～4mm大の石英・長石を多く含む」である。

焼成欄 焼成欄の略記について。◎→良好、○→良、△→不良。

表10 出土遺物観察表 土製品

(1)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	写真
				外面	内面				
1	こね鉢	口径(29.6) 残高 2.3	口縁端部は上方にたちあがる。	ヨコナデ	ヨコナデ	灰白色 灰白色	密 ◎	X2Y3 黒色砂礫	
2	壺	残高 3.5	複合口縁壺。複合口縁部は欠落。	マメツ	マメツ	淡橙色 淡白橙色	石・長(1) ○	X1Y4 黒色砂礫	
3	高坏	残高 7.3	坏底部充填技法。	ナデ	㊦ナデ ㊧ケズリ	淡黄色 淡黄色	石・長(1～2) ◎	X1Y4 黒色砂礫	
4	甕	口径(28.1) 残高 8.8	斜格子目の刻目突帯。	マメツ	マメツ	淡褐色 淡褐色	石・長(1～3) ◎	X2Y3 黒色砂礫	
5	壺	底径(7.4) 残高 3.5	中型品。平底。	ナデ	ナデ	橙褐色 暗灰色	石・長(1～2) ◎	X2Y3 黒色砂礫	
6	支脚	底径 8.9 器高 13.8	受部は「U」字状に切りこまれる。	ナデ	㊦ナデ ㊧ケズリ ㊨ナデ	淡黄褐色 淡黄褐色	石・長(1～2) ◎	X2Y3 黒色砂礫	15
7	壺	口径(15.4) 残高 2.2	口縁端部は下方に拡張。	ナデ	ナデ	茶褐色 茶褐色	石・長(1) ◎	X1Y4	
8	壺	残高 9.3	口縁端部は丸みをもつ。	ハケ	ハケ (一部ナデ)	淡茶褐色 淡茶褐色	石・長(1～5) ◎	X1Y4	
9	壺	残高 2.9	中型品。広口壺。	ハケ→ヨコナデ	㊦ヨコナデ ㊧ケズリ	淡黄褐色 淡黄褐色	石・長(1～2) 金ウンモ ◎	X1Y4	
10	甕	口径(14.4) 残高 4.5	中型品。	ヨコナデ	㊦ヨコナデ ㊧ナデ(ケズリ)	黄灰褐色 黄褐色	石・長(1～2) 金ウンモ ◎	X1Y4	

遺物観察表

出土遺物観察表 土製品

(2)

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	写真
				外面	内面				
11	壺	口径(25.4) 残高 7.2	柳描沈線文8条+波状文(8条)。	ヨコナデ→施文	ハケ (一部ナデ)	灰橙色 灰褐色	石・長(1~3) ◎	X2Y3	15
12	壺	底径(5.0) 残高 4.5	中型品。平底。	マメツ	ナデ	黄褐色 黒褐色	石・長(1~2) ◎	X2Y3	
13	甕	底径(3.8) 残高 10.9	小型品。平底。	ナデ	ナデ	黄灰色 黄灰色	石・長(1~5) ◎	X2Y3 黒斑	
14	脚付鉢	残高 2.7	脚部。焼成前円孔。	マメツ	マメツ	茶褐色 茶褐色	石・長(1~4) ◎	X2Y3	
15	甕	口径(20.6) 残高 7.0	口縁部は長く直線的。	㊦マメツ ㊧ハケ	㊨ハケ ㊩ハケ→ナデ	乳褐色 乳褐色	石・長(1~3) ◎	地点不明	
16	甕	口径(16.3) 残高 4.6	口縁端部は面をなす。	ハケ→ナデ	ハケ	暗褐色 褐色	石・長(1~4) ◎	地点不明	
17	壺	口径(18.9) 残高 4.5	柳描沈線文6条+波状文(4条)。	ナデ→施文	ハケ→ヨコナデ	灰橙色 灰褐色	石・長(1~3) ◎	地点不明 黒斑	15
18	壺	底径(7.2) 残高 6.7	大型品。平底。	ハケ	ハケ	淡褐色 淡灰褐色	石・長(1~4) 金ウンモ ◎	地点不明 黒斑	
19	壺	底径(7.4) 残高 4.5	大型品。平底。	タタキ	ハケ (一部ナデ)	茶褐色 黄褐色	石・長(1~2) ◎	地点不明	
20	壺	底径(6.6) 残高 2.6	中型品。平底。	ナデ	ナデ	茶褐色 褐色	石・長(1~3) ◎	地点不明	
21	壺	底径(5.4) 残高 4.2	中型品。平底。	マメツ	マメツ	茶褐色 暗褐色	石・長(1~4) ◎	地点不明	
22	甕	底径(3.5) 残高 7.7	中型品。平底。	タタキ→ハケ	ナデ	茶褐色 灰褐色	石・長(1~3) 金ウンモ ◎	地点不明 黒斑	
23	甕	底径(2.1) 残高 3.4	中型品。平底。	マメツ	マメツ	黄褐色 灰黄褐色	石・長(1~2) ウンモ ◎	地点不明	
24	甕	口径(11.3) 残高 4.0	口縁端部は丸みをもつ。	ナデ	ナデ	灰黄褐色 灰黄褐色	石・長(1~2) ◎	地点不明	
25	坏身	残高 2.8	たちあがりは短く、端部を欠く。	㊪回転ナデ ㊫回転ケズリ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎	地点不明	
26	坏	底径(5.0) 残高 1.6	輪高台。	マメツ	ナデ	淡黄色 黄灰色	密 ◎	地点不明	
27	甕	底径(23.8) 残高 2.9	大型品。	回転ナデ	回転ナデ	茶色 暗茶色	石・長(1~2) ◎	地点不明	
28	鍋	残高 8.8	三足鍋の脚部片。	ナデ		暗褐色	石・長(1~2) ◎	地点不明	

表11 出土遺物観察表 石製品

番号	器種	残存	材質	法量				備考	写真
				長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)		
29	石庖丁	完形	緑色片岩	9.2	5.3	0.6	59.8	地点不明	15

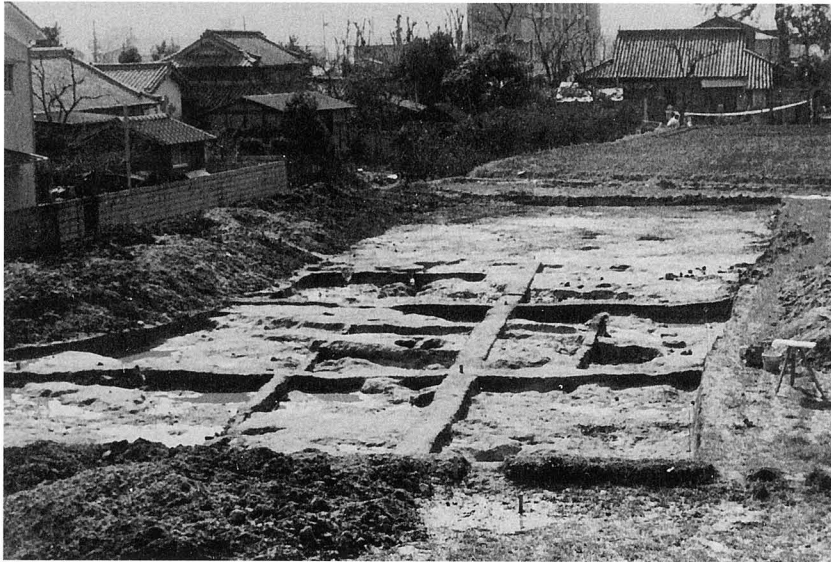


写真13 調査地全景
(西より)

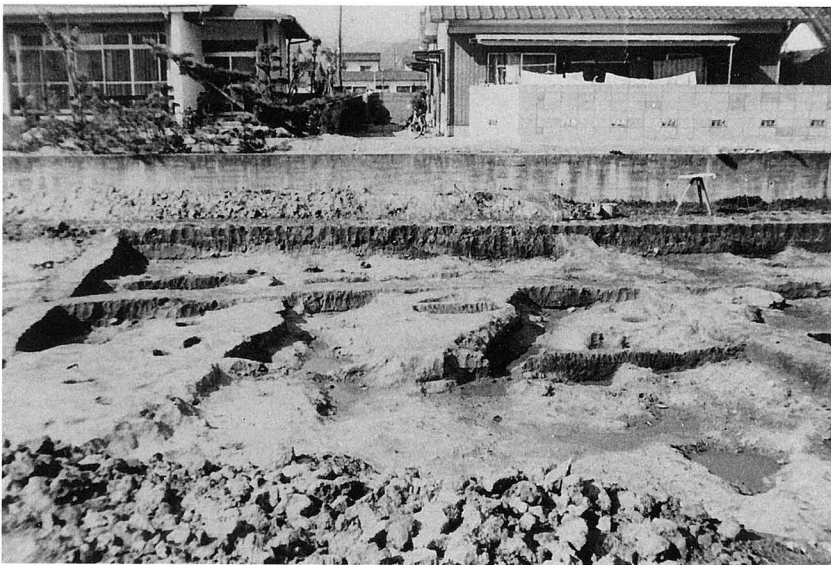
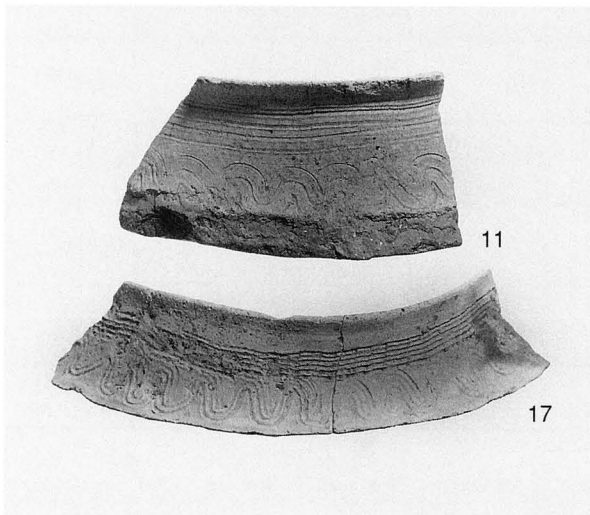


写真14 遺構完掘状況 (南より)



6



11

17

写真15 出土遺物

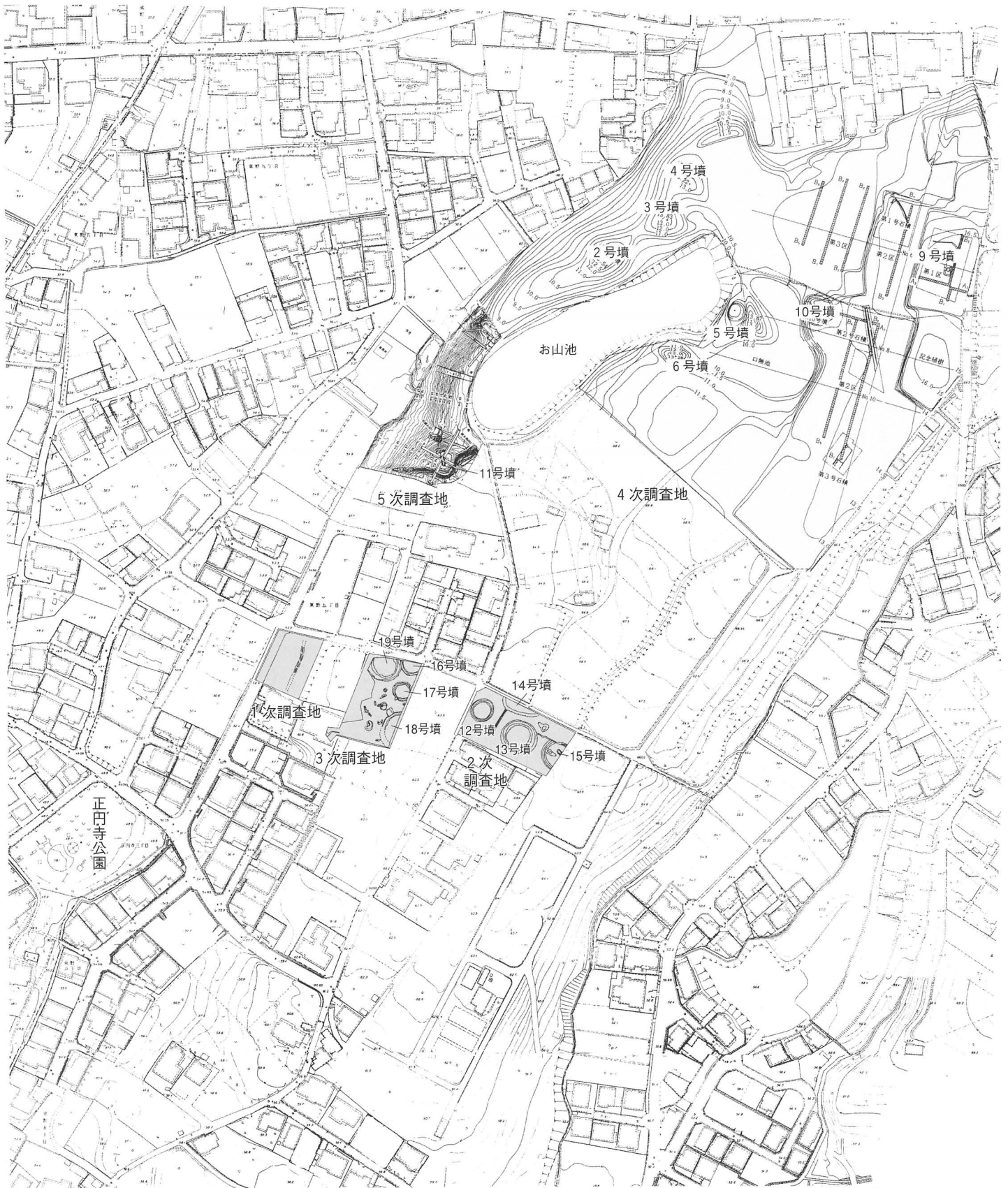


29

第5章

ひがし の ちゃ や だい 東野お茶屋台遺跡

— 1次調査地 —



第22図 調査地位置図 (S = 1 : 2,500)

この範囲は、北約3分の2が埋蔵文化財包含地〔79 お茶屋台古墳群〕内にあたる。昭和50年に未調査のまま開発された。再開発では埋蔵文化財の確認を必要とする。

第5章 東野お茶屋台遺跡1次調査地

1. 調査の経過

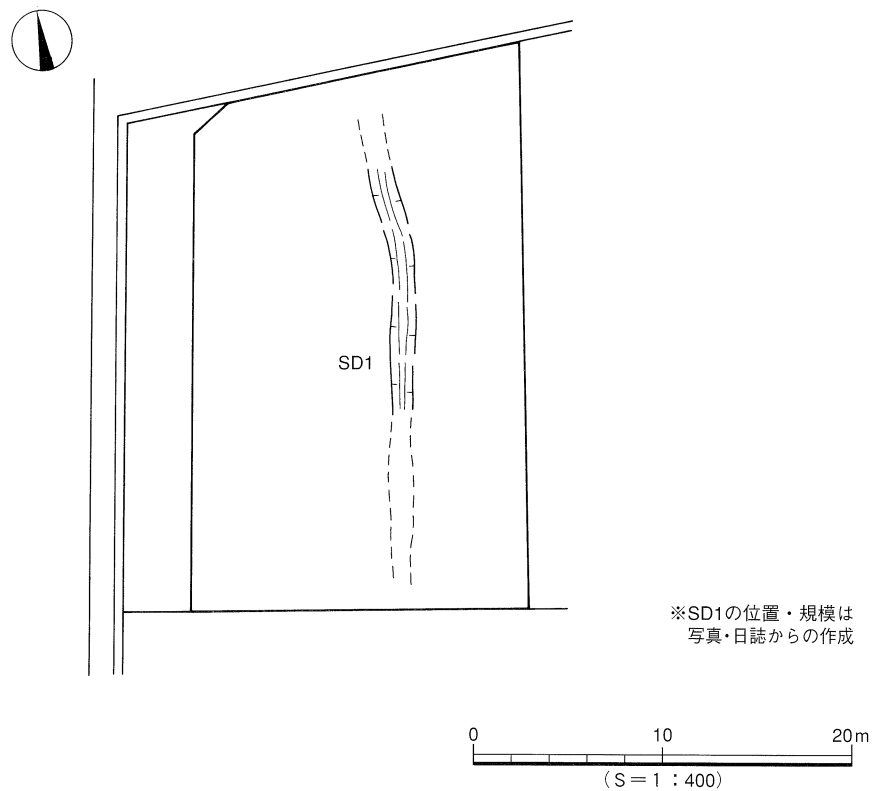
(1) 調査に至る経緯

1975（昭和50）年2月、澤田房通氏より、松山市東野五丁目甲898-48における宅地造成（教会建設）にあたって、当該地の埋蔵文化財の確認願いが松山市教育委員会に提出された（第22図）。

当地は、松山市の指定する埋蔵文化財包含地の「79 お茶屋台古墳群」内に含まれる。よって、開発により失われる地点に対して、記録保存のために発掘調査を実施した。

(2) 調査組織

遺跡名	東野お茶屋台遺跡1次調査地
調査地	松山市東野五丁目甲898-48
調査期間	1976（昭和51）年4月16日～同年4月30日
調査面積	対象面積495m ²
調査担当	森 光晴（当時、文化財専門委員）



第23図 調査地測量図

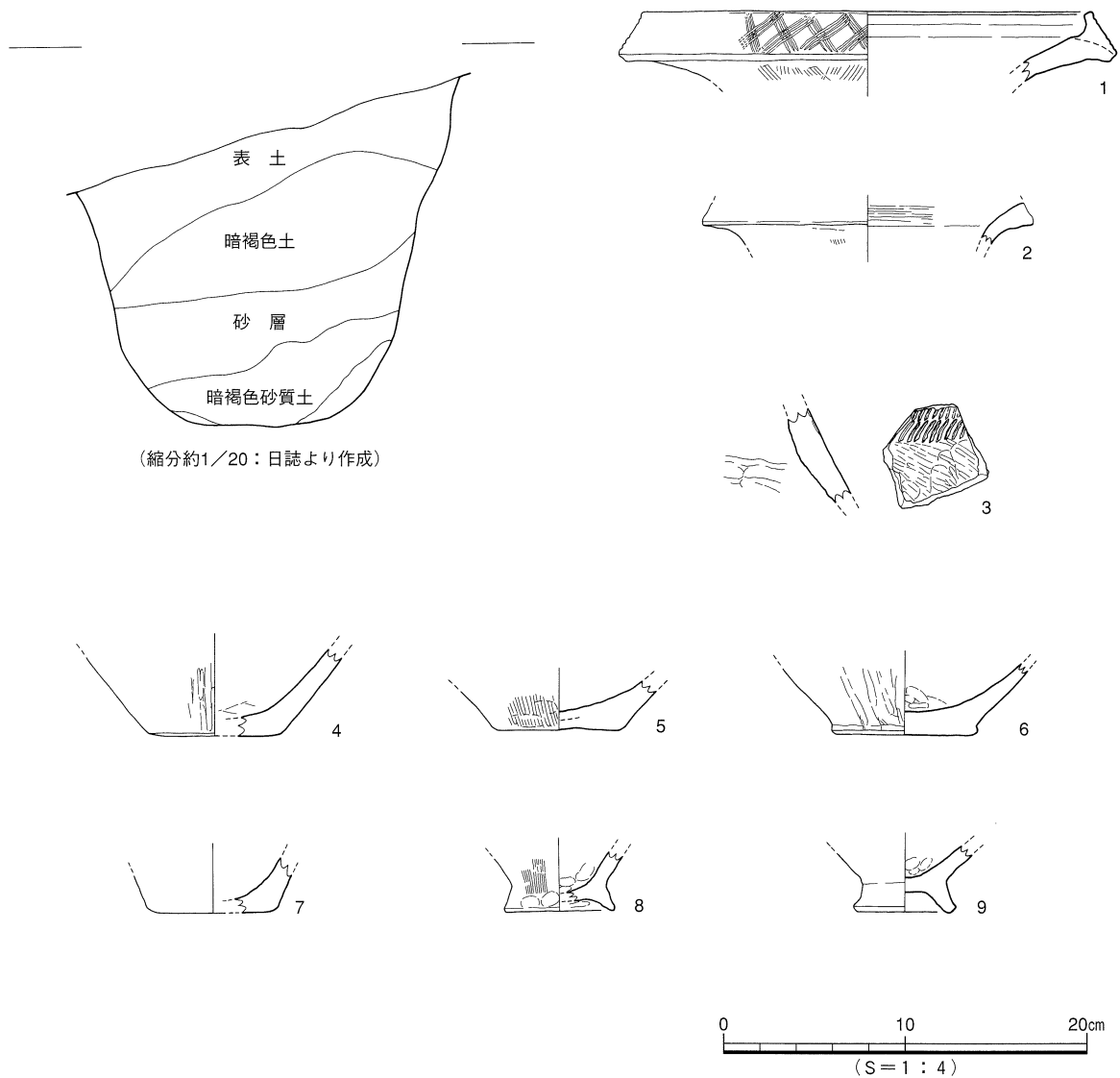
2. 遺構と遺物

調査地は丘陵の西斜面にあり、表土層下は遺構検出面になり、溝1条を検出している。

なお、本調査に関する測量図は現在所在不明にて、測量図は詳細に記述された日誌と担当者からの助言を基に作成している。したがって、正確な測量値は提示できていない。

S D 1 (第23・24図、写真16・17)

S D 1は、調査区の中央で南北に検出された。規模は南北検出長13m、幅1mほどになり、断面形態はゆるやかな「U」字状を呈している。埋土は下部より、暗褐色砂質土、砂層、暗褐色土、表土となり、最下部にある土層名は記載がない。出土遺物は、コンテナ1箱分になるが、実測可能なものは第24図にあげた9点にすぎない。



第24図 溝断面図・溝出土遺物実測図

出土遺物（第24図1～9、写真18）

1～9は弥生土器である。1～6は壺で、1は口縁部片。口縁部は上方に拡張され、端面には櫛描斜格子目文をもつ。2は複合口縁壺の口縁部片で、拡張部が欠落している。口縁端面は無文になる。3は肩部片で、押圧による「ノ」字状文が上下二段に施されている。4～6は底部で、4・5は平底、6は平底で低い粘土板状のたちあがりをもつ。7～9は甕の底部で、7は平底、8・9はくびれの上げ底になる。

時期：出土物は弥生時代後期前半に比定されるもので、溝の埋没時期にあてておく。

今回の調査では、弥生時代後期の溝と遺物を確認することができた。本調査地の丘陵上部には2・3次調査地があり、遺構はないが、同時期遺物が検出されている。よって、弥生時代後期前半の集落は、丘陵頂上部が居住区になることを想定しておく。

〔関連文献の訂正〕

『松山市埋蔵文化財調査年報I』松山市教育委員会、1987年のP33、「1. 昭和46～59年度 発掘調査遺跡一覧表（I）」29東野遺跡の遺跡名は東野お茶屋台1次、時代欄は弥生時代、遺構・遺物等欄は溝に修正していただきたい。

遺物観察表（作成：梅木・水口） 凡例は52ページ参照

表12 溝出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	写真
				外面	内面				
1	壺	口径(24.9) 残高 3.8	櫛描斜格子目文(3条)。	㊦ヨコナデ ㊧ハケ	ヨコナデ	茶色 淡茶色	石・長(1～4) 金ウツモ ◎		18
2	壺	残高 2.2	複合口縁壺。複合口縁部は欠落。	㊦ヨコナデ ㊧ハケ→ヨコナデ	ハケ	茶褐色 暗灰茶色	石・長(1～2) 金ウツモ ◎		
3	壺	残高 4.8	「ノ」字状押圧文2段。	ミガキ	ナデ	暗茶色 淡茶色	石・長(1～3) ◎		18
4	壺	底径(7.3) 残高 4.7	中型品。平底。	ミガキ	ナデ	灰茶色 黒灰色	石・長(1～4) 金ウツモ ◎		
5	壺	底径(6.7) 残高 2.6	中型品。わずかにくぼむ。	ミガキ	マメツ	淡茶色 茶褐色	石・長(1～4) 金ウツモ ◎		
6	壺	底径(7.4) 残高 3.6	中型品。平底。	ミガキ	ナデ	茶褐色 暗茶色	石・長(1～4) 金ウツモ ◎		
7	甕	底径(6.2) 残高 3.0	中型品。平底。	マメツ	マメツ	茶褐色 淡茶色	石・長(1～5) ○		
8	甕	底径(6.0) 残高 3.2	中型品。くびれの上げ底。	ハケ (一部ナデ)	ナデ	赤茶色 淡褐色	石・長(1～5) 金ウツモ ○		
9	甕	底径(5.0) 残高 3.6	中型品。くびれの上げ底。	ヨコナデ	ナデ	褐色 淡褐色	石・長(1～4) ◎		



写真16 調査地全景（南より）



写真17 SD1 完掘状況（北より）

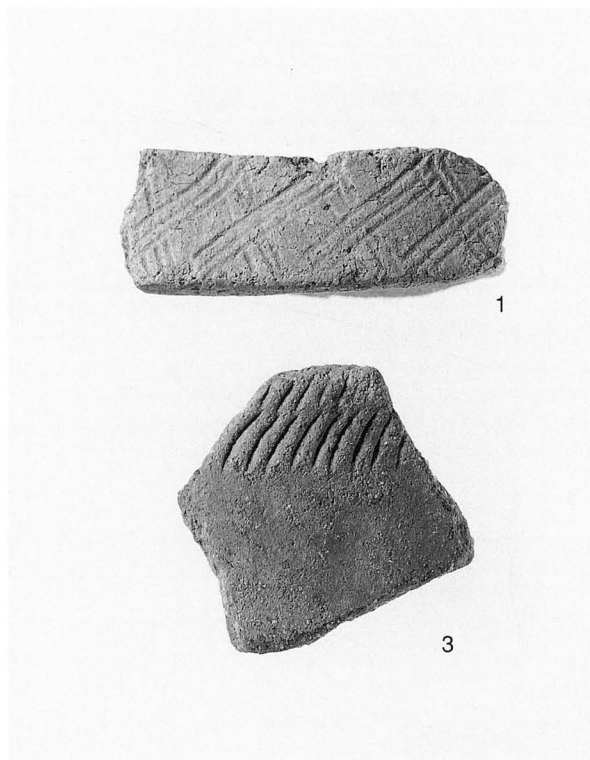


写真18 SD1 出土遺物

第6章

ひがし の ちゃ や だい 東野お茶屋台遺跡

— 2次調査地 —

第6章 東野お茶屋台遺跡2次調査地

1. 調査の経過

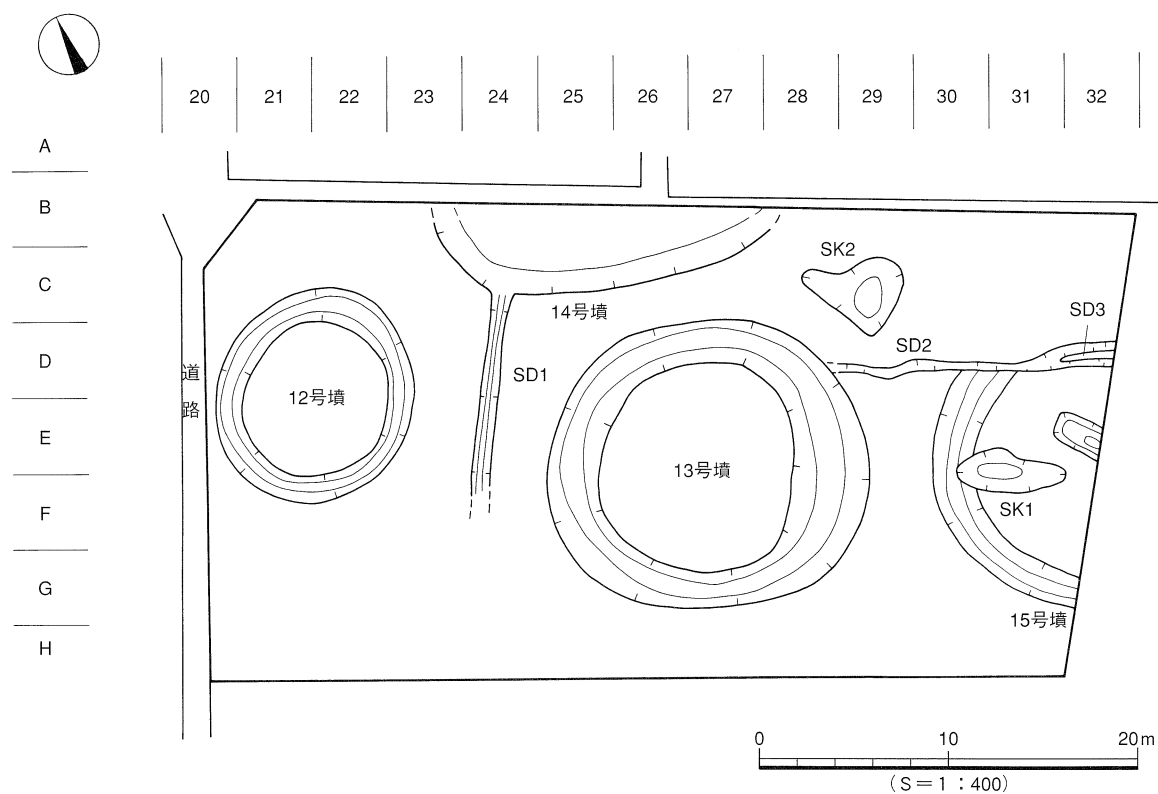
(1) 調査に至る経緯

1976（昭和51）年5月、越智 楓氏より、松山市東野五丁目甲898-14における宅地造成にあたって、当該地の埋蔵文化財の確認願いが松山市教育委員会に提出された（56ページ、第22図）。

当地は、松山市の指定する埋蔵文化財包含地の「79 お茶屋台古墳群」内に含まれる。よって、開発により失われる地点に対して、記録保存のために発掘調査を実施した。

(2) 調査組織

遺跡名	東野お茶屋台遺跡2次調査地
調査地	松山市東野五丁目甲898-14
調査期間	1976（昭和51）年5月13日～同年6月14日
調査面積	対象面積532m ²
調査担当	森 光晴（当時、文化財専門委員）



第25図 遺構配置図（日誌より作成：略図）

2. 遺構と遺物

調査にあたっては、4 m四方のグリッドを設定し、南北は北からA～H、東西は東から20～32とした。東の基準は1次調査地の西端あたりに設定している。

検出遺構は古墳4基、溝3条、土坑2基である。なお、遺構配置図(第25図)は、測量図が現在所在不明なために、詳細な日誌、写真等より作成した。よって、規模と位置は厳密には正確でなく、かつ日誌に記載された各種の数字を本文に記すため、第25図とは一致しない場合もある。

12号墳(第25図、写真20)

12号墳は、調査区西、C21・22～F21・22にあり、周溝は全て検出したが、墳丘盛土は削平のために未検出である。墳形は円墳とみられ、規模は周溝外径10.0m、周溝内径7.6m、深さ1.2mとなる。遺物は周溝から少量出土している。

出土遺物(第26図、写真25)

1～3は須恵器の坏蓋、4・5は弥生土器の壺になる。

時期：出土物より、5世紀末～6世紀初頭とする。

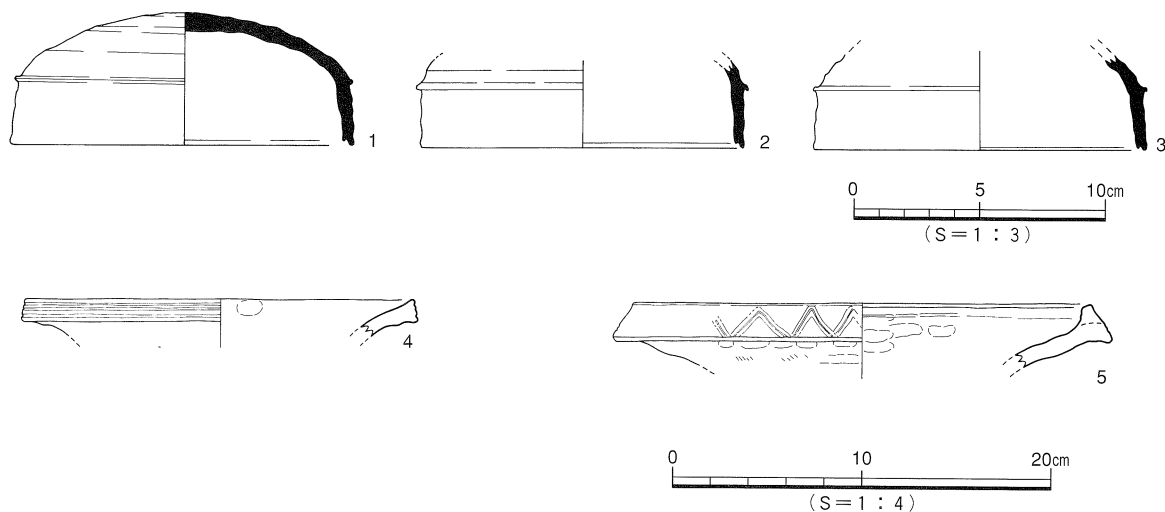
13号墳(第25図、写真21)

13号墳は、調査区中央、D25-28～G25-28にあり、周溝は全て検出したが、墳丘盛土は削平のために未検出である。墳形は円墳とみられ、規模は周溝外径16m、周溝内径11mとなる。遺物はE25～F25地点に多く、特にF25地点の第27図7・8・14は完形品で一括遺物の状況にある(写真21)。須恵器・埴輪・石器が出土している。

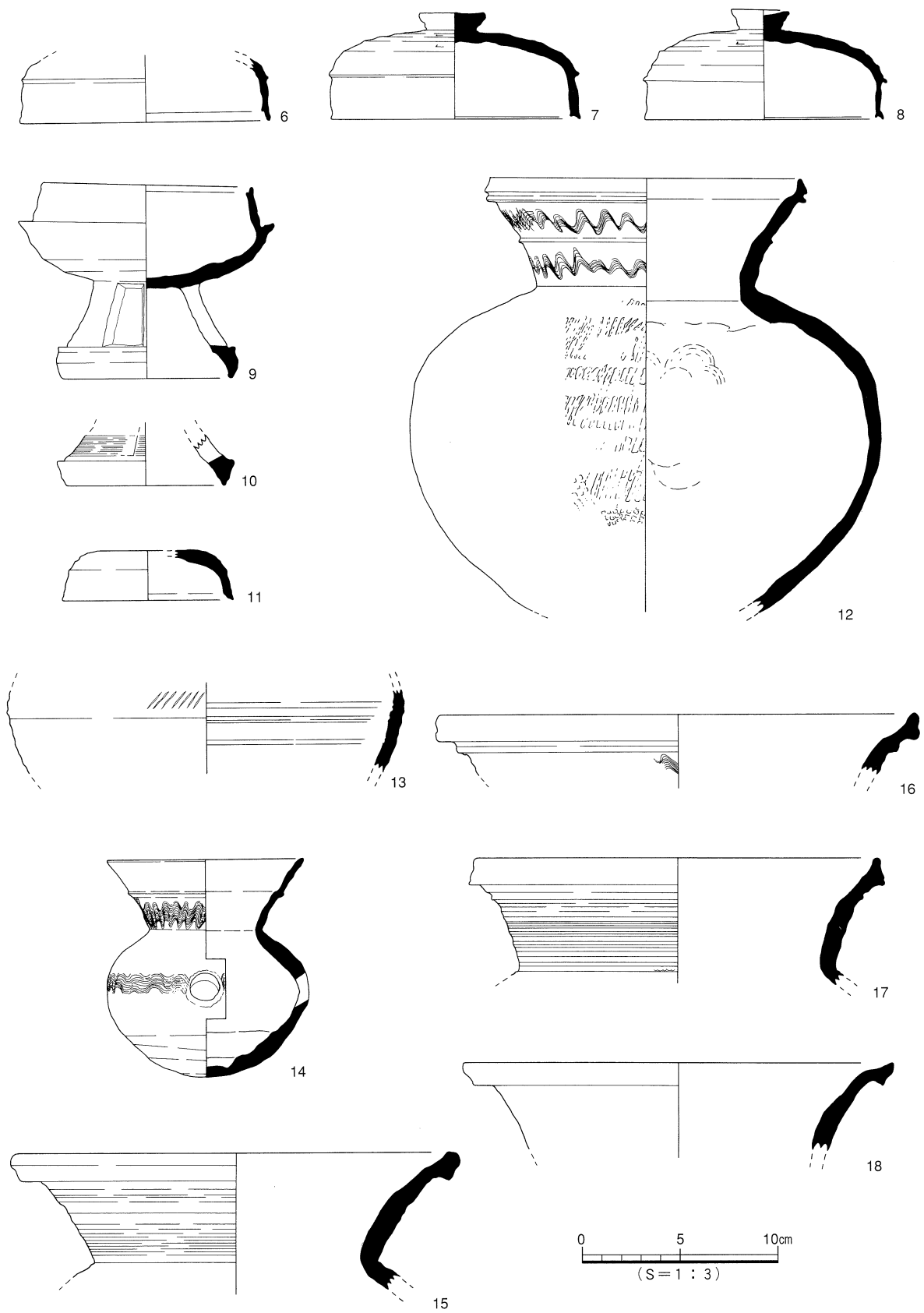
出土遺物(第27・28図、写真26・27)

6～20は須恵器である。6は坏蓋、7～10は高坏、11は短頸壺の蓋、12は壺、13は壺もしくは甗、14は甗、15～19は甗、20は高坏形器台である。21・22は埴輪で、21はタガ部、22は盾形埴輪の盾面部と思われる。23は石器で、頁岩製の剥片になる。

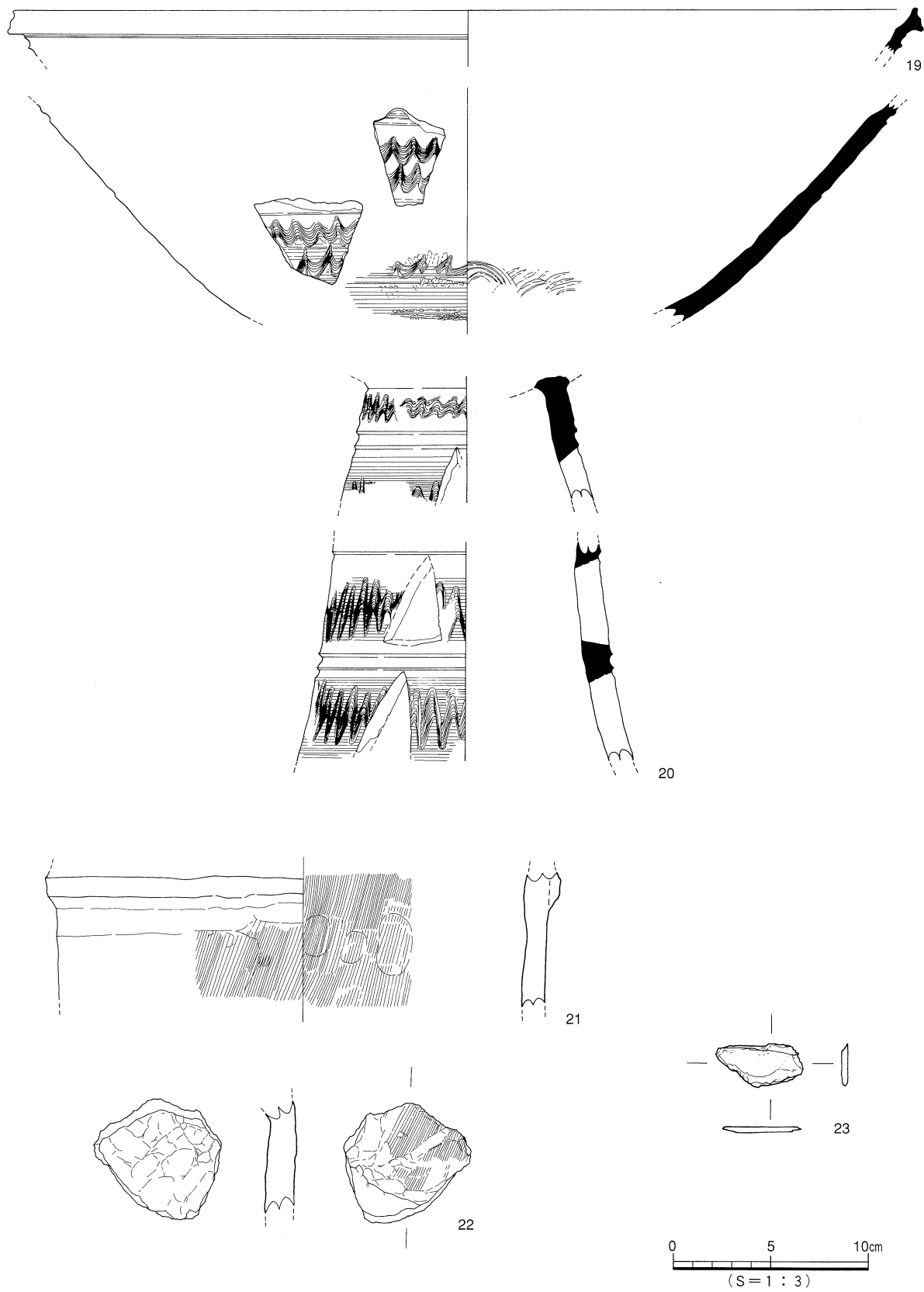
時期：出土遺物より、5世紀末～6世紀初頭にする。



第26図 12号墳出土遺物実測図



第27図 13号墳出土遺物実測図 (1)



第28図 13号墳出土遺物実測図(2)

14号墳（第25図、写真22）

14号墳は調査区北、B23-28～C23-27にある。規模と須恵器の完形品出土から、古墳の周溝として認定した。規模は検出長東西18m、南北5mになる。周溝からは完形品を含む須恵器の出土が多く、特にB26とC27には遺物が多くあり、埴輪、鉄製品（1点）、弥生土器、石器が少量ある。

出土遺物（第29～33図、写真28～31）

B26出土品：24～29・31・32・34・36・42～44および48が出土し、48以外は須恵器である。24・25は坏蓋、26～28は杯身、31・32は高坏、34は甗、36は短頸壺の蓋、42・43は大型の甗、44は器台になる。48は弥生土器の支脚である。

C27出土品：須恵器33・35・38・39・41がある。33は甗、35は直口壺、38・39は広口壺、41は大型甗になる。

その他の地区・地点不明品：須恵器では、30の高坏杯身、37の短頸壺、40の甗、45の器台脚部がある。埴輪は46の1点で、円形スカシ孔を持つタガ部である。

鉄製品には49のヤリガンナが1点あり、石器には粘板岩もしくは頁岩製の磨製石鏃が1点ある。

時期：出土須恵器より、6世紀中葉とする。

15号墳（第25図、写真23・24）

15号墳は調査区東端、D30-32～G30-32にあり、調査区外につづく。周溝は検出したが、墳丘盛土は削平を受け消失している。墳形は周溝形状より円墳とみられる。周溝の中央付近の調査区境には長方形土坑があり、主体部に関係する可能性もあるが、断定できない。規模は周溝外径で、東西検出長13m（内径11m）、南北検出長9m（内径6m）になる。中央にある土坑は、検出長3.0m、検出幅1.8mを測る。土坑からは、礫が出土している。本墳に伴う遺物で、実測可能なものはない。

時期：特定できない。

SD1（第25図、写真22）

SD1は調査区中央、C24～F24にある。14号墳と切り合うが、切り合い関係は判断できない。規模は、南北検出長11m、東西検出長1mを測る。流れは東から西に向かう。出土遺物には、第34図51～60がある。

出土遺物（第34図51～60、写真32）

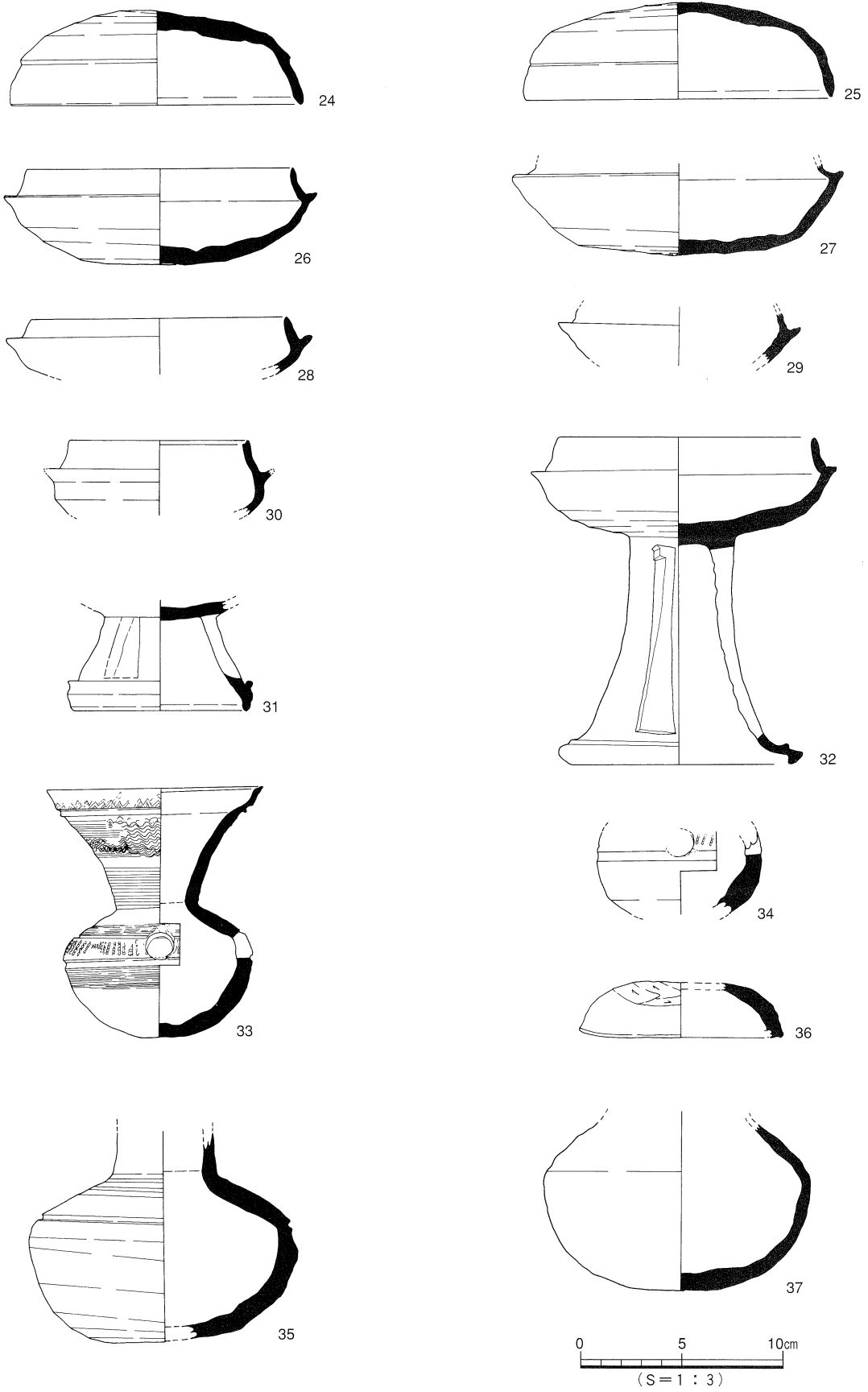
51～55、57～59は弥生土器である。51～53は中型壺、54は甗、55は壺の頸部、57～59は壺の底部になる。56は広口壺の頸部で、結晶片岩が含まれている。60は鉄器で、剣になるものとみられる。

時期：切り合い関係が不明で、遺物は弥生時代後期と古墳時代初頭の土器、鉄器は古墳時代とみられ、したがって古墳時代以降としておく。

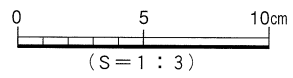
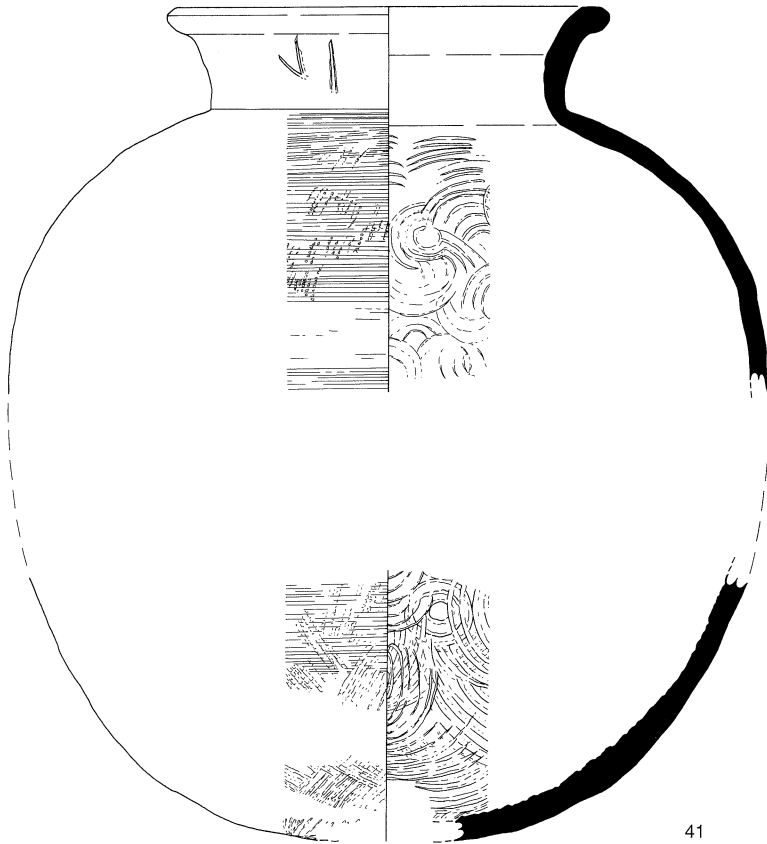
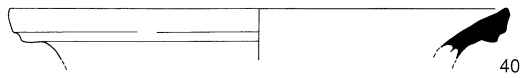
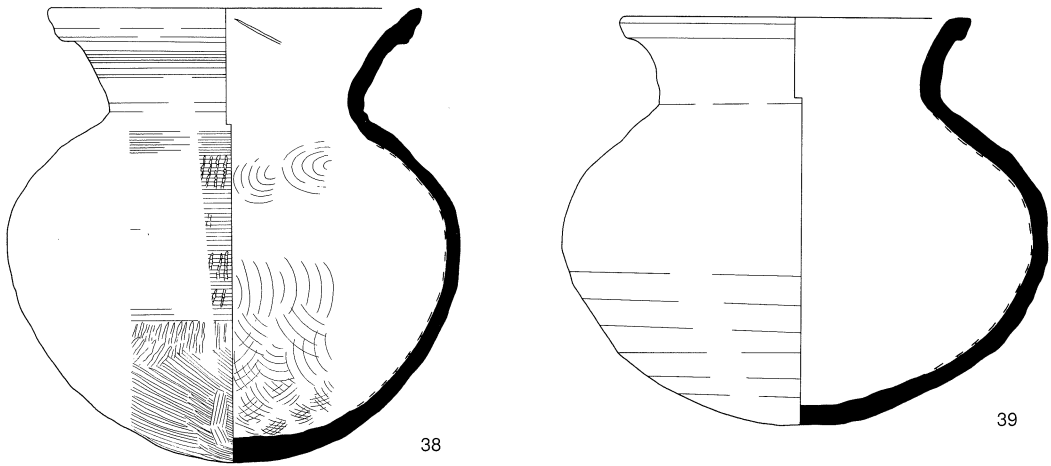
SD2

SD2は調査区東、D28～D32にある。13・15号墳と切り合うが、その関係は13号墳では判断がなく、15号墳では図上でSD2が切ることになる。規模は検出長15m、幅25～30cm、深さ20～30cmとなる。遺物は少量で、図化できるものはない。

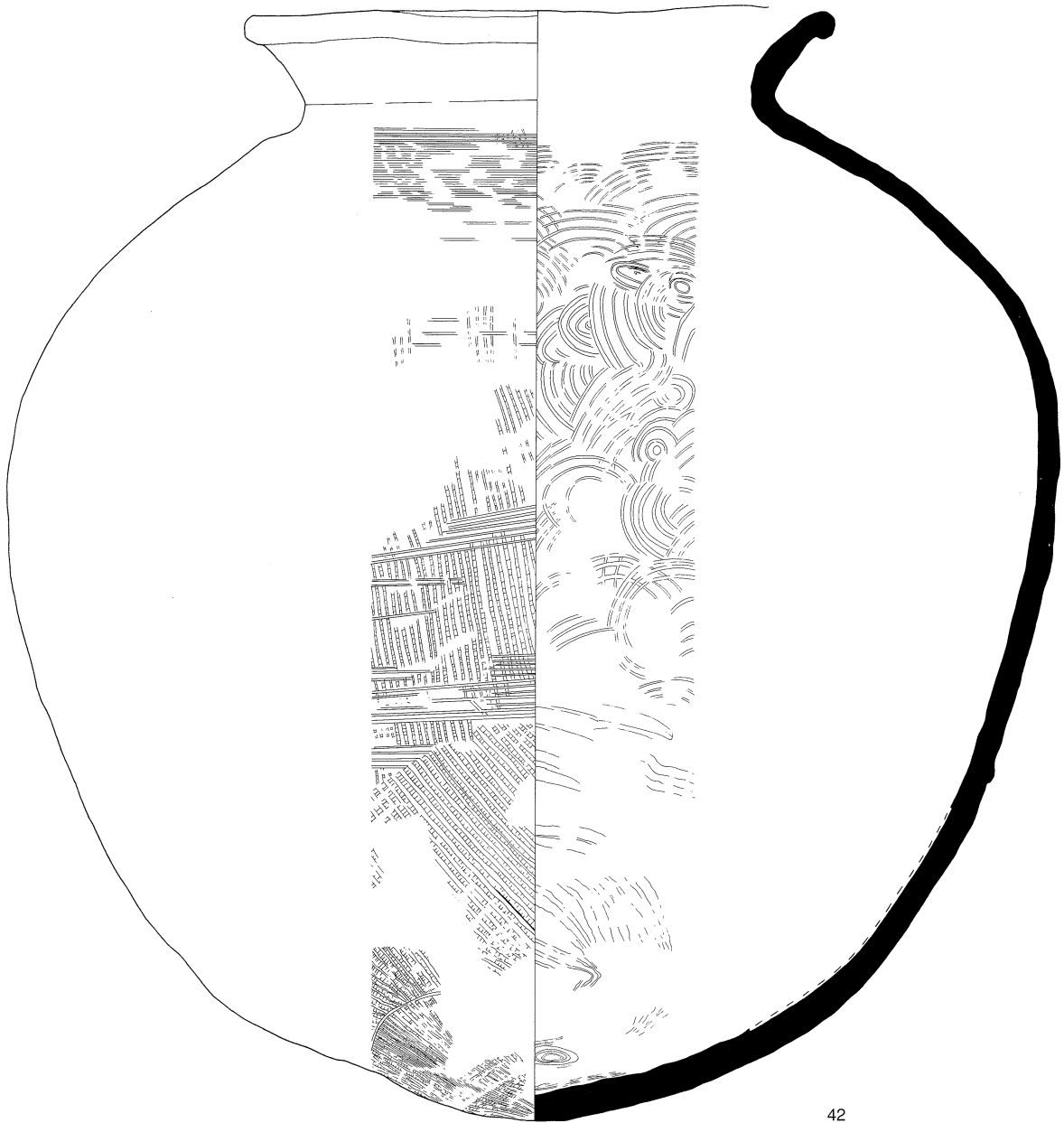
時期：切り合い関係より、古墳時代6世紀以降になる。



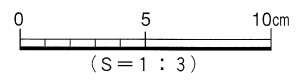
第29図 14号墳出土遺物実測図 (1)



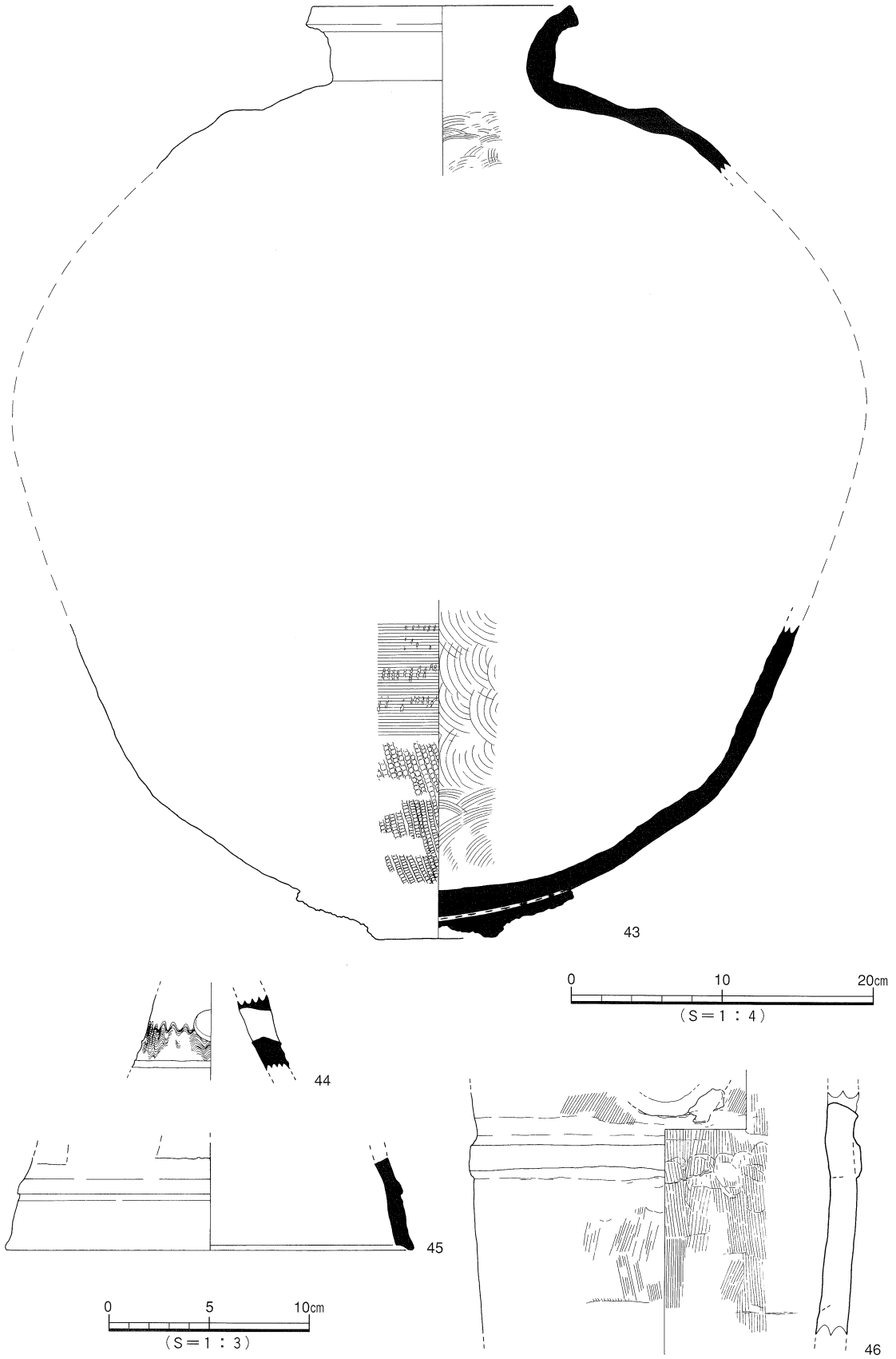
第30図 14号墳出土遺物実測図(2)



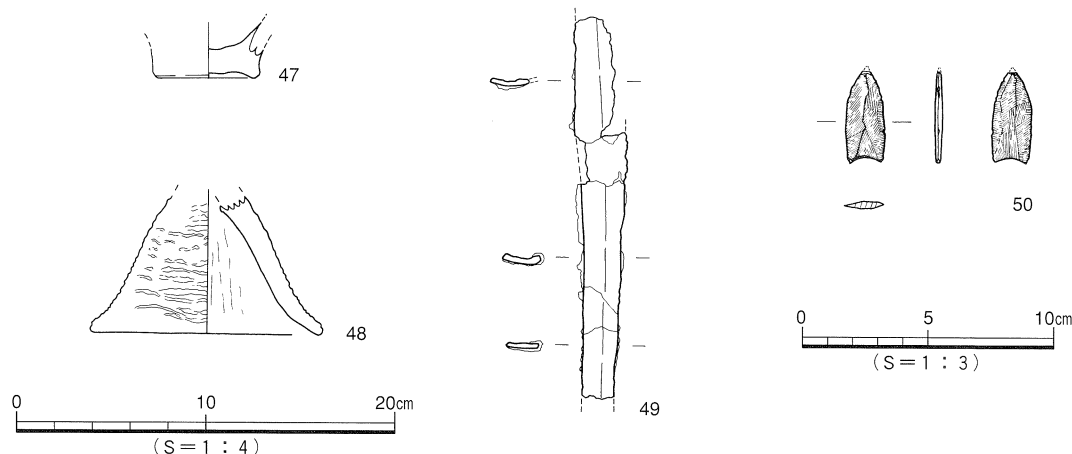
42



第31図 14号墳出土遺物実測図(3)



第32図 14号墳出土遺物実測図 (4)



第33図 14号墳出土遺物実測図(5)

SD 3 (第25図)

SD 3は、調査区東端、D31~32にある。SD 2と切り合い関係にあるが、SD 2が枝分かれした溝ともみられる。規模は、検出長4m、幅25~30cm、深さ20~30cm。遺物は少量で、図化できるものはない。

時期：SD 2と同一溝とすれば、SD 2と同時期を考え、古墳時代6世紀以降とする。

SK 1 (第25図)

SK 1は調査区東、E30-32~F30-32にあり、15号墳を切る。平面形態は長楕円形を呈し、規模は長軸6m、短軸2~3mになる。遺物は図化できるものがない。

時期：15号墳を切ることから、古墳時代6世紀以降とする。

SK 2 (第25図)

SK 2は調査区中央東、C28・29~D29にある。平面形態は隅丸三角形を呈し、規模は長軸5m、短軸4mとなる。遺物は図化できるものがない。

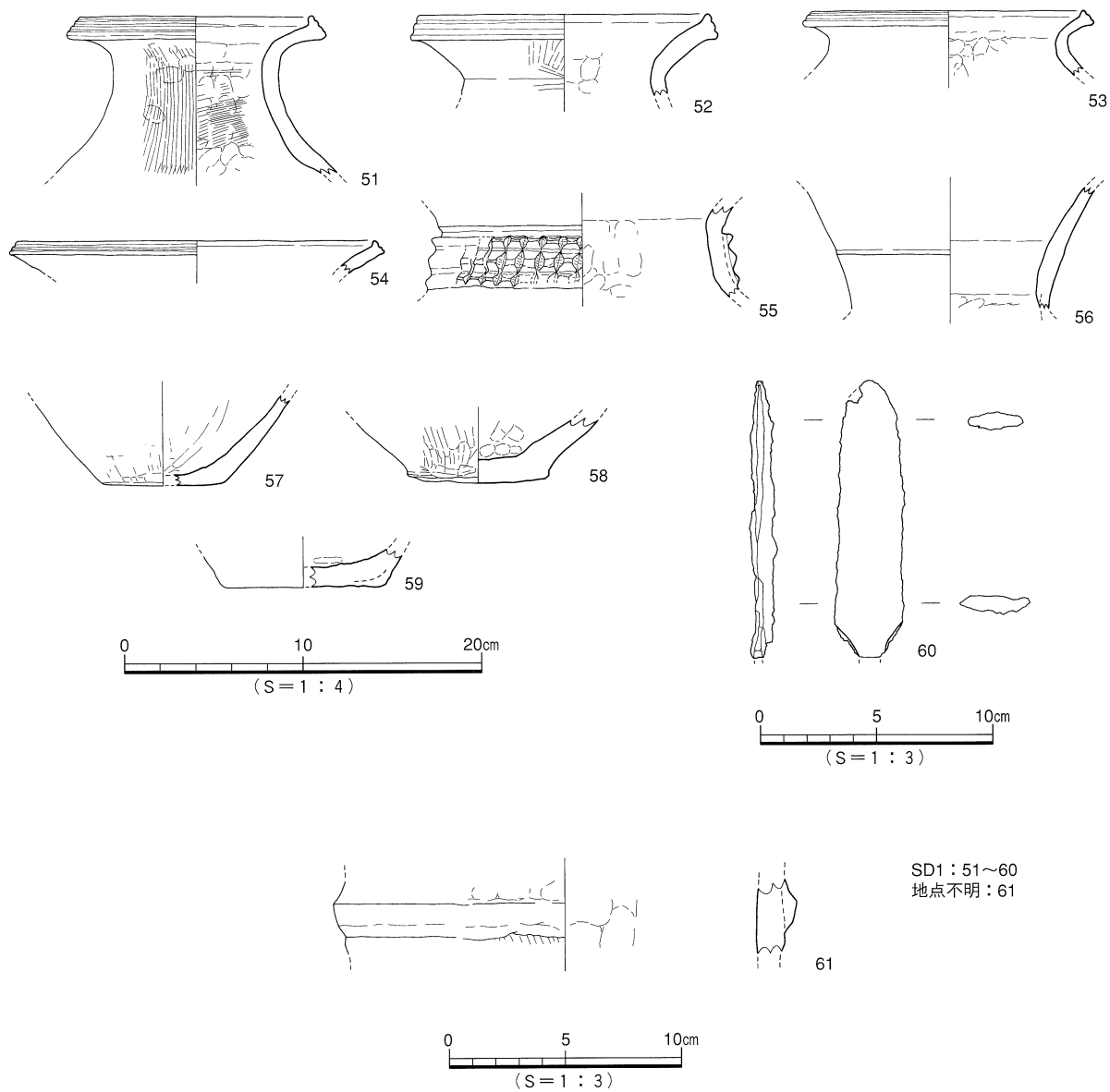
時期：切り合い関係や時期を特定できる出土物がないため、判断できない。

地点不明遺物(第34図61)：61は出土地点が判断できない円筒埴輪のタガ部である。

3. 小 結

本調査では、古墳4基が主要な遺構になる。

古墳は、群集墳を形成していたとみられ、5世紀末~6世紀代に築造・使用された古墳である。出土遺物より時期的変遷をみれば、12号墳と13号墳が古く、次に14号墳となる。15号墳は出土遺物に恵まれず位置付けができない。一方で、13号墳と14号墳は出土品に恵まれている。13号墳ではE25~F25地点に遺物が集中し、14号墳ではB26地点とC27地点とに遺物が集中し、良好な資料が得られている。両者とも周溝内祭祀の可能性をもつ。また、13号墳からは、埴輪片が出土し、埴輪の樹立が推定



第34図 SD1・地点不明遺物実測図

される。遺物では、14号墳C27地点出土品にヘラ記号が2点あり注目される。

このほか、本来は古墳の副葬品とみられる鉄器が、14号墳周溝内でヤリガンナ1点、SD1で剣1点が出土している。

弥生時代遺物では、SD1の結晶片岩を胎土に含む壺は形態・胎土より東阿波型土器に属するもので、県内では稀少な資料になる。公開され確実な資料では初例といえる。14号墳周溝内出土の粘板岩もしくは頁岩製の磨製石鏃は平野内では類例が少なく、石材から搬入品の可能性も考えに入れたほうがよい。

遺物観察表

表13 出土遺物観察表 土製品

(1)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	写真
				外面	内面				
1	坏蓋	口径 13.4 稜径 13.2 器高 5.1	丸みのある天井部。断面三角形の鈍い稜をもつ。口縁端部は内傾し、端面に沈線状の凹みあり。ほぼ完成品。	㊸回転ヘラケズリ1/3 ㊹回転ナデ	回転ナデ	灰黄色 灰黄色	石・長(1~2) ◎	12号墳	25
2	坏蓋	口径(12.6) 稜径(13.0) 残高 3.4	斜め下方に下がる丸みのある稜をもつ。口縁端部は内傾し、端面に沈線状の凹みあり。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰黄色	密(長3) ◎	12号墳	
3	坏蓋	口径(13.0) 稜径(13.2) 残高 3.6	断面三角形の鈍い稜をもつ。口縁端部は内傾し、端面に沈線状の凹みあり。小片。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色 灰色	密(石4) ◎	12号墳	
4	壺	口径(20.4) 残高 2.0	凹線3条。	ヨコナデ	ナデ	茶褐色 茶褐色	石・長(1~3) 金 ◎	12号墳	
5	壺	口径(24.0) 残高 3.3	2条一組の山形文。	ハケ→ナデ	ナデ	茶褐色 茶褐色	石・長(1~2) 金 ◎	12号墳	25
6	坏蓋	口径(12.6) 稜径(12.5) 残高 3.2	断面三角形の鋭い稜をもつ。口縁端部は内傾し、端面に沈線状の凹みあり。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密(長3) ◎	13号墳 F25	
7	蓋	口径 12.5 器高 5.3 つまみ径2.8 つまみ高0.9	有蓋高坏の蓋。つまみ中央部がわずかに突出。口縁端部は内傾する凹面をなす。天井部外面に重ね焼きの痕跡あり。完成品。	㊺回転ナデ ㊻回転ヘラケズリ1/3 ㊼回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ◎	13号墳 F25	26
8	蓋	口径 12.0 器高 5.5 つまみ径2.9 つまみ高1.0	有蓋高坏の蓋。つまみ中央部は凹む。口縁端部は内傾する凹面をなす。重ね焼きの痕跡あり。完成品。	㊽回転ナデ ㊾回転ヘラケズリ1/3 ㊿回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密(長1~2) ◎	13号墳 F25	26
9	高坏	口径 10.8 底径 8.5 器高 9.8	口縁端部は内傾し、端面に沈線状の凹みあり。脚部部に凸線が巡る。台形状の透かし(3方向)あり。2/3の残存。	㊽回転ナデ ㊾回転ヘラケズリ1/3 ㊿回転ナデ	㊽回転ナデ ㊾ナデ ㊿回転ナデ	青灰色 青灰色	密(長1~4) ◎	13号墳	26
10	高坏	底径(8.0) 残高 2.5	高坏の脚部片。柱部に回転カキメ調整と透かしを施す。小片。	㊽回転カキメ ㊿回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密(長1) ◎	13号墳 G25	
11	蓋	口径(8.6) 残高 2.5	短頸壺の蓋。天井部は扁平で、口縁端部は内傾する。小片。	回転ナデ	回転ナデ	灰白色 灰白色	密 ◎	13号墳 F25	
12	壺	口径 15.8 胴部径 23.8 残高 21.7	口縁部は上方に拡張し、口縁下に1条の凸帯が巡る。頸部に凸線1条と波状文2段を施す。底部欠損。	㊽回転ナデ ㊾平行タタキ→ナデ ㊿格子目タタキ	㊽回転ナデ ㊾円弧タタキ→ナデ	褐色 褐色	密(長1~3) ◎	13号墳 F25	26
13	壺	胴部径(20.0) 残高 4.1	壺または甕の胴部片。沈線1条と列点文を施す。	回転ナデ	回転ナデ	乳黄色 乳黄色	密 ○	13号墳 F25	
14	甕	口径 10.2 器高 10.9 孔径 1.5	口縁端部は丸い。頸部に凸線1条と波状文。胴部に円孔(φ1.4cm)と波状文を施す。完成品。	㊽回転ナデ ㊾回転ナデ ㊿回転ヘラケズリ→ナデ	回転ナデ	灰白色 灰白色	密(長1~2) ◎	13号墳 F25	26
15	甕	口径(21.8) 残高 6.2	口縁端部は丸くおさめ、口縁下に凸帯1条が巡る。	㊽回転ナデ ㊿回転カキメ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密(長1~4) ◎	13号墳 E25	
16	甕	口径(24.0) 残高 3.3	口縁部は上下方に拡張し、頸部に凸帯1条と波状文を施す。	回転ナデ	回転ナデ	黒灰色 青灰色	密(長1~3) ◎	13号墳 G28	
17	甕	口径(20.2) 残高 5.9	口縁部は上下方に拡張し、頸部に凸帯を施す。	㊽回転ナデ ㊿回転カキメ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ◎	13号墳 E25	
18	甕	口径(21.6) 残高 4.3	口縁部は斜め上方と下方に拡張し、口縁内面に弱い稜をもつ。自然釉付着。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密(長2~5) ◎	13号墳 E25	
19	甕	口径(45.6) 残高 2.3	大型品。口縁部は上下方に拡張し、頸部に凸帯1条を施す。小片。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色 灰黄色	密 ◎	13号墳 H26	27
20	器台	残高(33.0)	高坏形器台。坏部に2列の波状文2段以上。脚部に凸帯2条3段以上と、波状文1列4段以上、三角形透かし3個以上あり。	㊽格子目タタキ→ 回転カキメ ㊿回転カキメ 回転ナデ	㊽円弧タタキ→ ナデ ㊿回転ナデ	青灰色 褐色	密(長1~4) ◎	13号墳 G25,27,28	27

出土遺物観察表 土製品

(2)

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	写真
				外面	内面				
21	円筒埴輪	残高 6.7	胴部は直線的で、断面台形状のタガを持つ。	タテメハケ	タテハケ	暗茶褐色 暗茶褐色	石・長 (1~2) ◎	13号墳 D26	27
22	盾形埴輪	残長 6.1	盾面部。円筒部との接合部付近は、盾裏面が外反する。	ナナメハケ	指オサエ	黄褐色 黄褐色	石・長 (1~3) ◎	13号墳	
24	坏蓋	口径 14.3 稜径 13.2 器高 4.6	丸みのある断面三角形の稜をもつ。口縁端部は内傾する。ほぼ完形品。	㊦回転ヘラケズリ1/3 (右回り) ㊧回転ナデ	㊦回転ナデ ナデ ㊧回転ナデ	灰白色 灰白色	密 (長 1) ◎	14号墳 B26	28
25	坏蓋	口径 14.9 稜径 14.5 器高 4.7	天井部と口縁部の境界は凹線状の凹みによる。口縁端部は尖る。3/4の残存。	㊦回転ヘラケズリ1/4 (右回り) ㊧回転ナデ	㊦回転ヘラケズリ ナデ ㊧回転ナデ	灰白色 灰白色	密 (石・長 1) ◎	14号墳 B26	28
26	坏身	たちあがり径 13.0 受部径 15.2 器高 4.7	たちあがり端部は尖り気味。受部は短く上外方にのびる。底部は平底風。ほぼ完形品。	㊦回転ナデ ㊧回転ヘラケズリ1/2 (右回り)	回転ナデ	灰色 青灰色	密 (長 1) ◎	14号墳 B26	28
27	坏身	受部径 16.0 残高 4.4	たちあがりは欠損。受部は短く上外方にのびる。底部は平底風。	回転ナデ 回転ヘラケズリ1/3 (右回り)	回転ナデ	灰色 灰白色	密 (長 1~2) ◎	14号墳 B26	
28	坏身	たちあがり径 (12.4) 受部径 (13.0) 残高 2.7	たちあがりは短く内傾し、端部は尖る。受部は上外方に短くのびる。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰白色	密 ◎	14号墳 B26	
29	坏身	受部径 (11.9) 残高 2.3	たちあがり。底部は欠損。受部は短く上外方にのびる。小片。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密 (長 1) ◎	14号墳 B26	
30	坏身	たちあがり径 (8.8) 残高 3.6	たちあがりは長く内傾し、端面は内傾する凹面をなす。	回転ナデ	回転ナデ	灰白色 灰白色	密 (長 1) ◎	14号墳	
31	高坏	底径 (8.4) 残高 5.2	有蓋高坏の脚部。脚端部に凸線1条が巡る。3方向の長方形透かしあり。	㊦ナデ ㊧回転ナデ	㊦ナデ ㊧回転ナデ	緑灰色 青灰色	密 (長 1~5) ◎	14号墳 B26	
32	高坏	口径 12.4 底径 10.6 器高 15.8	たちあがり端部は尖り気味。脚部は太く、脚端部は下内方に屈曲する。柱部に3方向の台形状透かし (1段) あり。ほぼ完形品。	㊦回転ナデ ㊧回転ヘラケズリ1/3 ㊨回転ナデ	回転ナデ	灰白色 灰白色	密 (長 1~3) ○	14号墳 B26	28
33	甕	口径 10.5 胴部径 9.2 器高 12.2	口縁部と頸部に波状文。胴部に刺突列点文を施す。円孔 (φ1.3cm)。自然釉付着。2/3の残存。	㊦回転ナデ ㊧回転カキメ ㊨回転カキメ ㊩回転ヘラケズリ	回転ナデ	灰白色 灰白色	密 ◎	14号墳 C27	29
34	甕	胴部径 (7.8) 残高 4.0	扁球形の胴部。凹線1条と列点文を施す。(φ1.3cm以上)。小片。	㊦回転ナデ ㊧回転ヘラケズリ	回転ナデ	黒灰色 灰白色	密 ◎	14号墳 B26	
35	壺	胴部径 13.1 残高 10.2	直口壺。肩部に沈線1条が巡る。	㊦回転ナデ ㊧回転カキメ ㊨回転ヘラケズリ	回転ナデ	黒灰色 青灰色	密 (長 1) ◎	14号墳 C27	29
36	蓋	口径 10.0 残高 2.7	短頸壺の蓋。口縁端部は平坦面をもつ。2/3の残存。	㊦ヘラケズリ ㊧回転ナデ	回転ナデ	黒灰色 灰白色	密 ◎	14号墳 B26・27	29
37	壺	胴部径 13.0 残高 8.1	短頸壺。肩部の張りは強い。	㊦回転ナデ ㊧ナデ	回転ナデ	褐灰色 褐灰色	密 ○	14号墳 C24	
38	壺	口径 14.6 胴部径 17.8 器高 17.8	広口壺。口縁部は三角形に拡張し、端部は丸い。頸部内面にヘラ沈線文あり (記号?)。2/3の残存。	㊦回転ナデ ㊧回転カキメ ㊨平行タタキ→カキメ ㊩平行タタキ	㊦回転ナデ ㊧円弧タタキ ㊨円弧タタキ	灰黄色 灰黄色	密 ○	14号墳 C27	29
39	壺	口径 14.0 胴部径 19.1 器高 15.9	広口壺。口縁部は方形に拡張し、端部内面は平坦。2/3の残存。	㊦回転ナデ ㊧回転ナデ ㊨回転ヘラケズリ	回転ナデ	灰色 灰色	密 (長 1~5) ◎	14号墳 C27	29
40	甕	口径 (19.8) 残高 2.0	中型品。口縁下に凸線1条が巡る。小片。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰白色	密 (長 1) ◎	14号墳 C24	
41	甕	口径 (16.8) 残高 (33.0)	口縁端部は丸く拡張する。頸部外面にヘラ沈線文3条 (記号?)。	㊦回転ナデ ㊧平行タタキ→カキメ ㊨平行タタキ	㊦回転ナデ ㊧同心円タタキ ㊨円弧タタキ	灰白色 灰白色	密 (長 1) ◎	14号墳 C27	29

遺物観察表

出土遺物観察表 土製品

(3)

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	写真
				外面	内面				
42	甕	口径 24.7 器高 48.0	口縁端部は丸く拡張する。	㊶回転ナデ ㊷平行タタキ→カキメ ㊸平行タタキ	㊶回転ナデ ㊷円弧タタキ ㊸円弧タタキ	黒灰色 青灰色	密 (石・長) ◎	14号墳 B26 自然釉	30
43	甕	口径 (17.0) 残高 (60.2)	口縁端部は「コ」の字状におさめる。 底部外面に焼成時の際の別遺物が付着 している。自然釉付着。	㊶回転ナデ ㊷平行タタキ→カキメ ㊸平行タタキ	㊶回転ナデ ㊷円弧タタキ ㊸円弧タタキ	深緑色 灰色	密 (長1~2) ◎	14号墳 B26	30
44	器台	残高 3.6	円孔と波状文、凹線をもつ。	回転ナデ→施文	回転ナデ	青灰色 黄灰色	密 ◎	14号墳 B26	
45	器台	底径 (20.0) 残高 4.5	脚端部は内傾する凹面をなす。 裾部に沈線1条と透かし (2ヶ所看取) あり。	回転ナデ	回転ナデ	灰白色 灰白色	密 (長1) ◎	14号墳	
46	円筒 埴輪	残高 11.95	胴部は直線的にやや外傾し、断面低い 台形状のタガを持つ。その上位に円形 のスカシを施す。	タテハケ	タテハケ	淡黄茶色 淡黄茶色	石・長 (1~3) ◎	14号墳 C25	31
47	甕	底径 4.7 残高 2.9	上げ底。	マメツ	マメツ	乳橙色 乳褐色	長 (1~9) ◎	14号墳	
48	支脚	底径 (12.0) 残高 7.2	脚端部は丸くおさめる。	タタキ	ケズリ	乳灰色 乳灰色	石 (1~3) 金 ◎	14号墳 B26	
51	壺	口径 (13.6) 残高 9.0	沈線文3条。	㊶上ハケ→ナデ ㊶下ハケ	㊶ナデ ㊷ハケ→ナデ	淡茶褐色 褐色	石・長 (1~2) ◎	SD1	
52	壺	口径 (16.5) 残高 4.6	凹線文2条。	ハケ→ヨコナデ	ヨコナデ (一部ナデ)	暗茶色 淡茶色	石・長 (1~2) ◎	SD1	
53	壺	口径 (15.4) 残高 3.6	沈線文2条。	ヨコナデ	ヨコナデ (一部ナデ)	淡褐色 淡褐色	石・長 (1~2) ◎	SD1	
54	甕	口径 (21.4) 残高 1.9	沈線文2条。	ヨコナデ	ヨコナデ	茶褐色 茶褐色	石・長 (1~2) ◎	SD1	
55	壺	残高 5.2	突帯3条。突帯上に刻目。	ナデ	ナデ	淡茶色 淡茶色	石・長 (1~2) 金 ◎	SD1	
56	壺	残高 7.0	広口直口壺の頸部。	ヨコナデ	ナデ	茶褐色 茶褐色	密・結晶片岩 赤色土粒 ◎	搬入品 SD1	
57	壺	底径 (6.9) 残高 5.0	中型品。底部。	ミガキ	ナデ	茶褐色 暗茶褐色	石・長 (1~2) 金 ◎	SD1	
58	壺	底径 8.0 残高 3.5	大型品。平底。	ミガキ (一部ナデ)	ナデ	茶褐色 淡茶色	石・長 (1~3) 金 ◎	SD1	
59	壺	底径 (8.8) 残高 2.1	中型品。平底。	マメツ	マメツ	茶褐色 淡茶色	石・長 (1~4) ○	SD1	
61	円筒 埴輪	残高 3.2	胴部には、断面「三角形」のタガを 持つ。	タテハケ	指オサエ	淡黄色 淡黄色	石・長 (1) ◎	地点不明	

表14 出土遺物観察表 石製品

番号	器種	残存	材質	法量				備考	写真
				長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)		
23	剥片	完形	頁岩	4.20	2.10	0.30	4.26	13号墳	27
50	磨製石鏃	ほぼ完形	粘板岩か頁岩	3.40	1.50	2.50	1.98	14号墳 B27	31

表15 出土遺物観察表 鉄製品

番号	器種	残存	法量				備考	写真
			長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)		
49	刀子	約 1 / 3	15.2	2.3	0.45	15.90	14号墳 B24	31
60	剣	ほぼ完形	11.7	2.9	0.6	45.30	SD1	32



写真19 調査地全景
(西より)



写真20 12号墳完掘状況
(南より)



写真21 13号墳遺物出土状況 (南西より)





写真22 14号墳・SD1
完掘状況(南西より)



写真23 15号墳完掘状況
(北より)

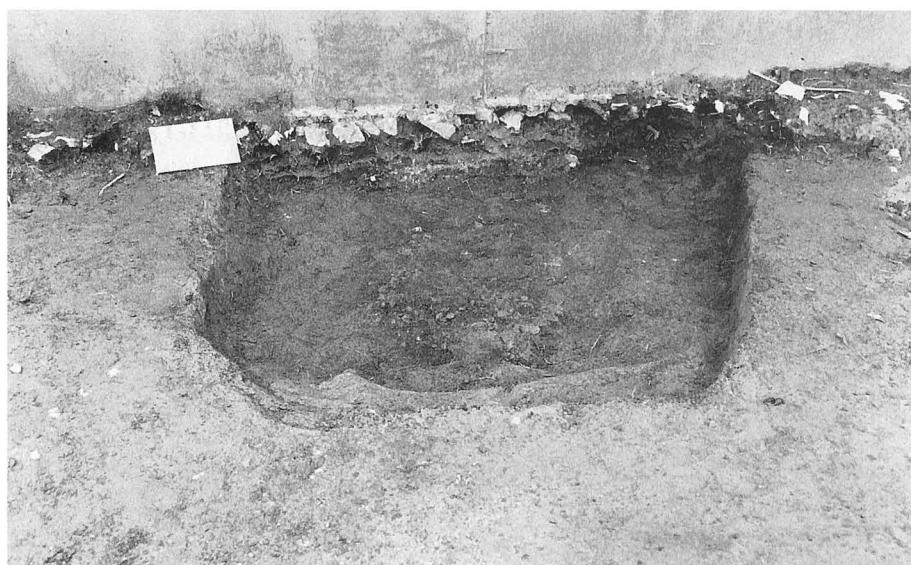


写真24 15号墳主体部
(北西より)

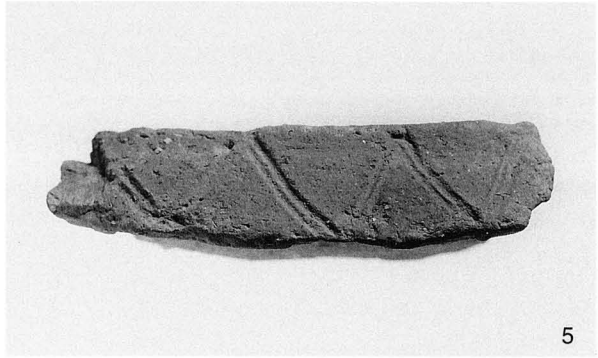


写真25 12号墳出土遺物



写真26 13号墳出土遺物 (1)

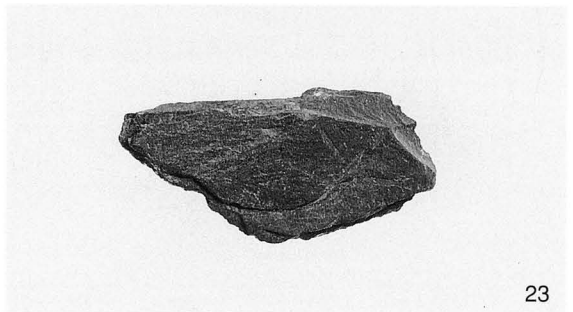
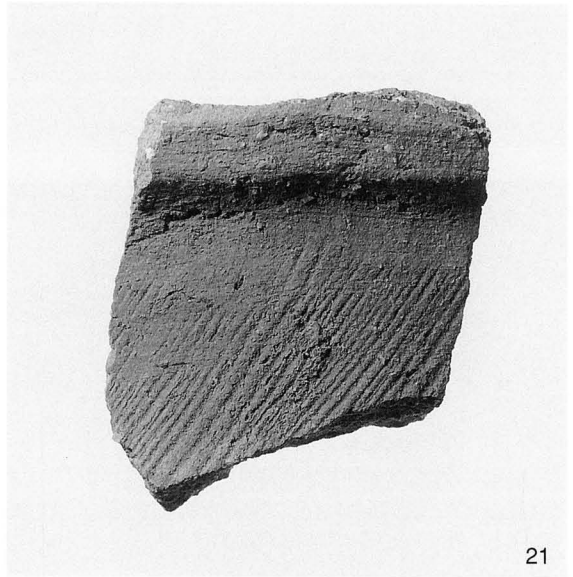
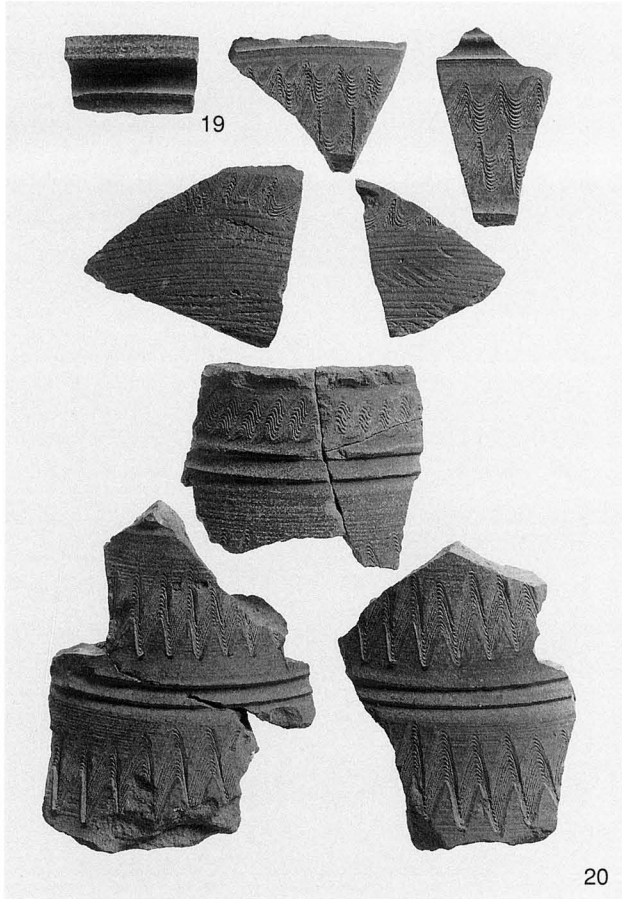


写真27 13号墳出土遺物 (2)



写真28 14号墳出土遺物 (1)



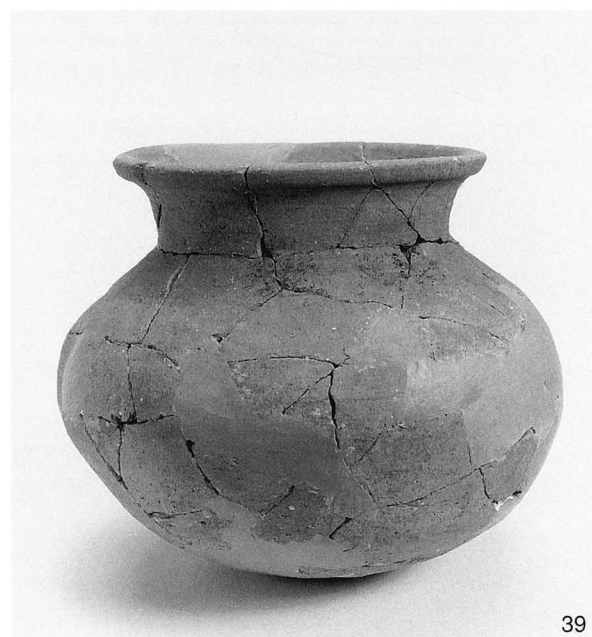
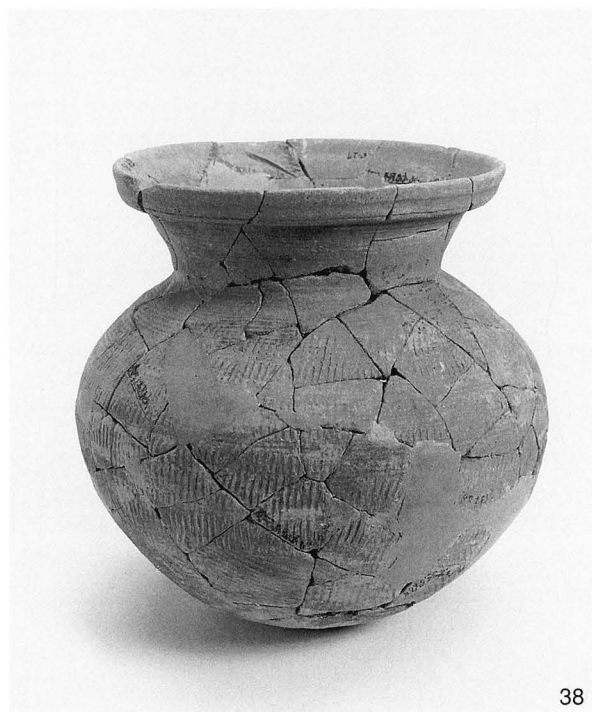


写真29 14号墳出土遺物 (2)



42



43

写真30 14号墳出土遺物 (3)

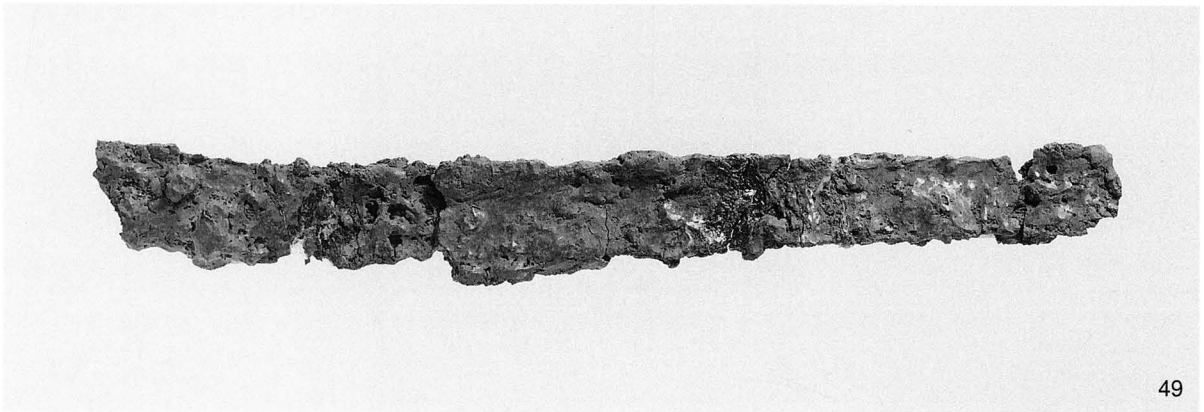
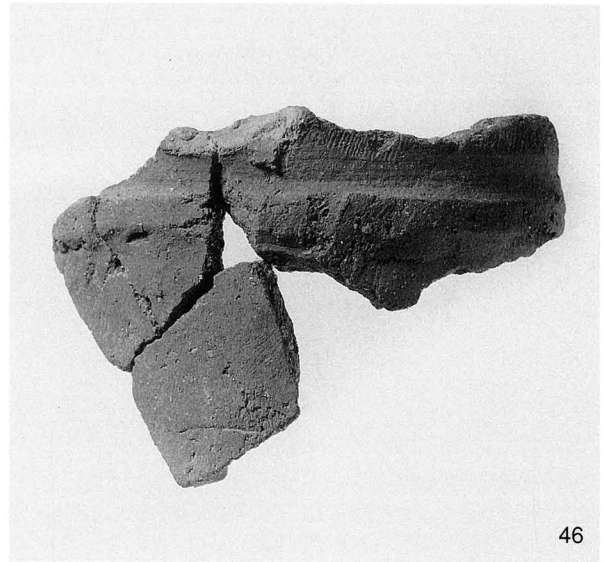
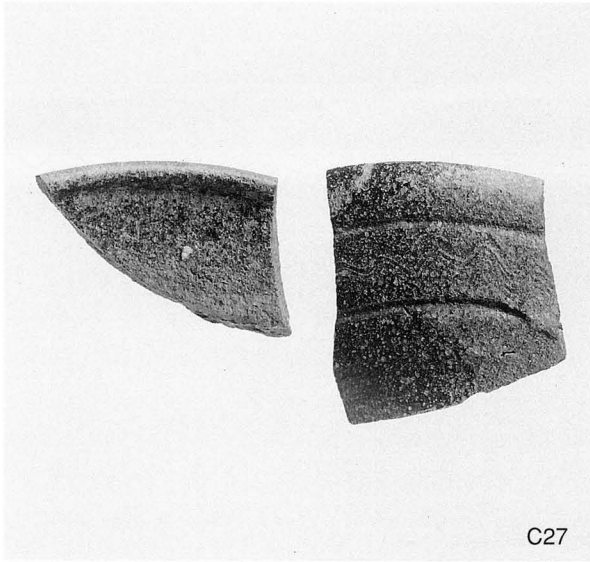


写真31 14号墳出土遺物 (4) (C27・46・49・50)

写真32 SD1 出土遺物 (60)

第7章

ひがしの 東野お茶屋台遺跡

— 3次調査地 —

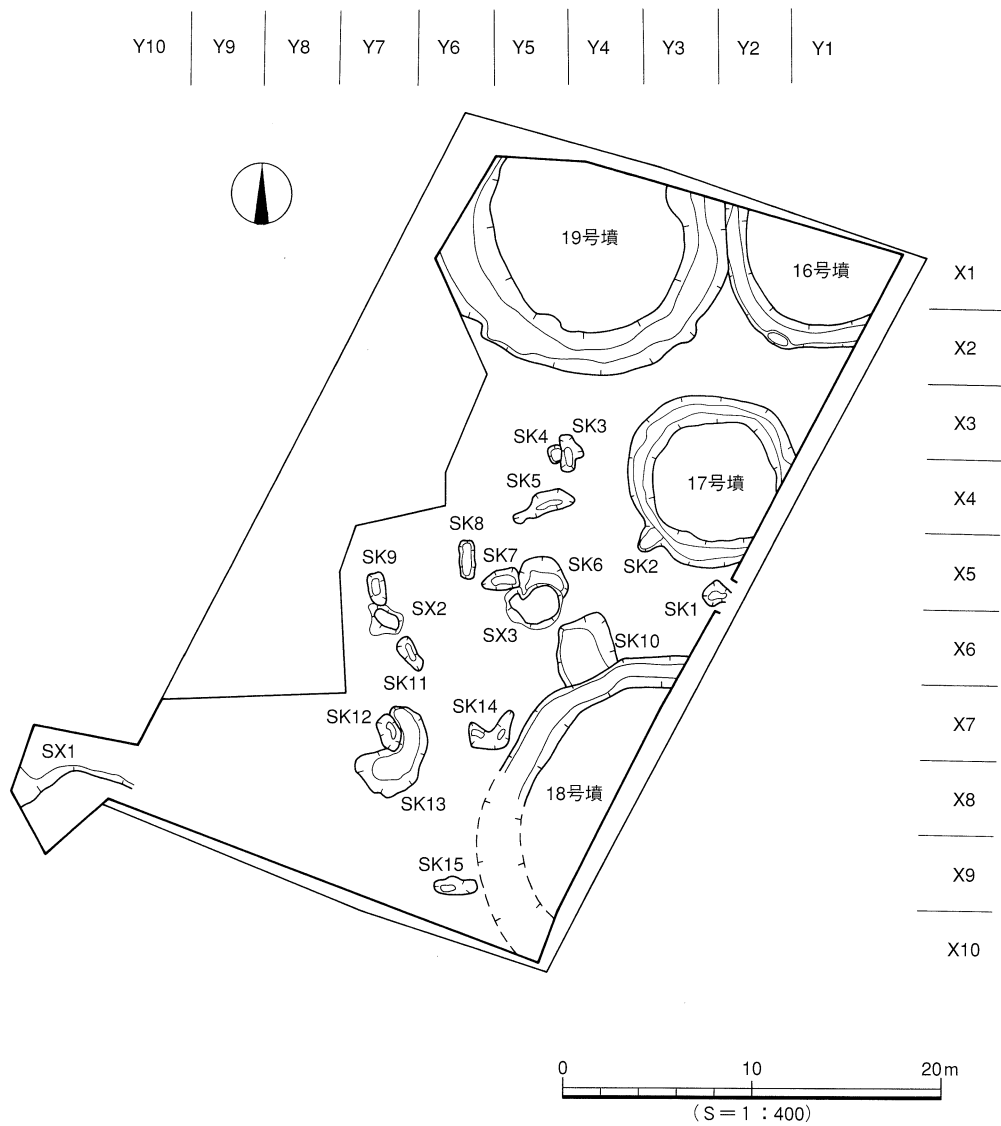
第7章 東野お茶屋台遺跡 3次調査地

1. 調査の経過

(1) 調査に至る経緯

1977（昭和52）年に、宅地開発にあたって松山市東野五丁目甲898内での埋蔵文化財の確認願いが松山市教育委員会に提出された（56ページ、第22図）。当地は、松山市の指定する埋蔵文化財包含地の「79 お茶屋台古墳群」内に含まれている。

よって、開発により失われる地点に対して、記録保存のために発掘調査を実施した。



第35図 遺構配置図（愛媛県史より：一部加筆修正）

(2) 調査組織

遺跡名	東野お茶屋台遺跡3次調査地
調査地	松山市東野五丁目甲898内
調査期間	1977年7月5日～同年7月27日
調査面積	対象面積1,470m ²
調査担当	森 光晴（当時、文化財専門委員）

2. 遺構と遺物

調査では、調査区内を4m四方のグリッドに分け、調査区の北東隅を起点とし、南北はX1～X10、東西はY1～Y10とした。検出した遺構は、古墳4基、土坑15基、その他(SX)3ヶ所である。なお、第35図遺構配置図は測量図が現存しないので、『愛媛県史 資料編 考古』P481の図を基に、森光晴氏の助言と日誌等から加筆修正した図である。

(1) 古墳

16号墳（第35図、写真36・37）

16号墳は、調査区の北東隅、X1・2-Y1・2にあり、その多くが調査区外となる。19号墳と切り合い関係にあり、本墳が19号墳に切られている。墳形は円墳になり、墳丘盛土は削平され消失し、周溝は3分の1弱を検出した。規模は、周溝内径が検出長8m、周溝外径が検出長10m、周溝幅は1.2～1.8mとなる。遺物は稀薄で、実測可能なものは第36図1の1点に限られる。

出土遺物（第36図1）

1は弥生土器で、甕の口縁部になる。前期中～後葉。

時期：19号墳に切られることから、5世紀末までの築造としておく。

17号墳（第35図、写真38）

17号墳は、調査区の中央東、X3～5-Y2～4にあり、東側の一部が調査外となる。土坑SK2と切り合うが、切り合い関係は判断されていない。墳形は円墳になり、墳丘盛土は削平され消失し、周溝は4分の3強を検出した。規模は、周溝内径が6.6m、周溝外径が9.4m、周溝幅は1.0～1.5mになる。遺物は少量で、実測可能なものは第36図2～4である。

出土遺物（第36図2～4、写真45）

2は須恵器で、器台の脚部になり、三角形状になると思われる透かしをもつ。3・4は弥生土器で、壺になり、4の肩部には貝殻文の押圧文がみられる。

時期：出土品より、6世紀とする。

18号墳（第35図、写真39・40）

18号墳は、調査区南東、X6～10-Y3～6にあり、SK10を切る。墳形は円墳になり、墳丘盛土は削平され消失し、周溝は2分の1を検出し、東は調査外にいたる。なお、南側は写真と遺物の出土状況より範囲を推定している。規模は、周溝内径が推定19m、周溝外径が推定14m、周溝幅は1.6～2.0mになる。遺物は須恵器、土師器、鉄器、埴輪、礫が出土し、特に埴輪の出土量が多い。

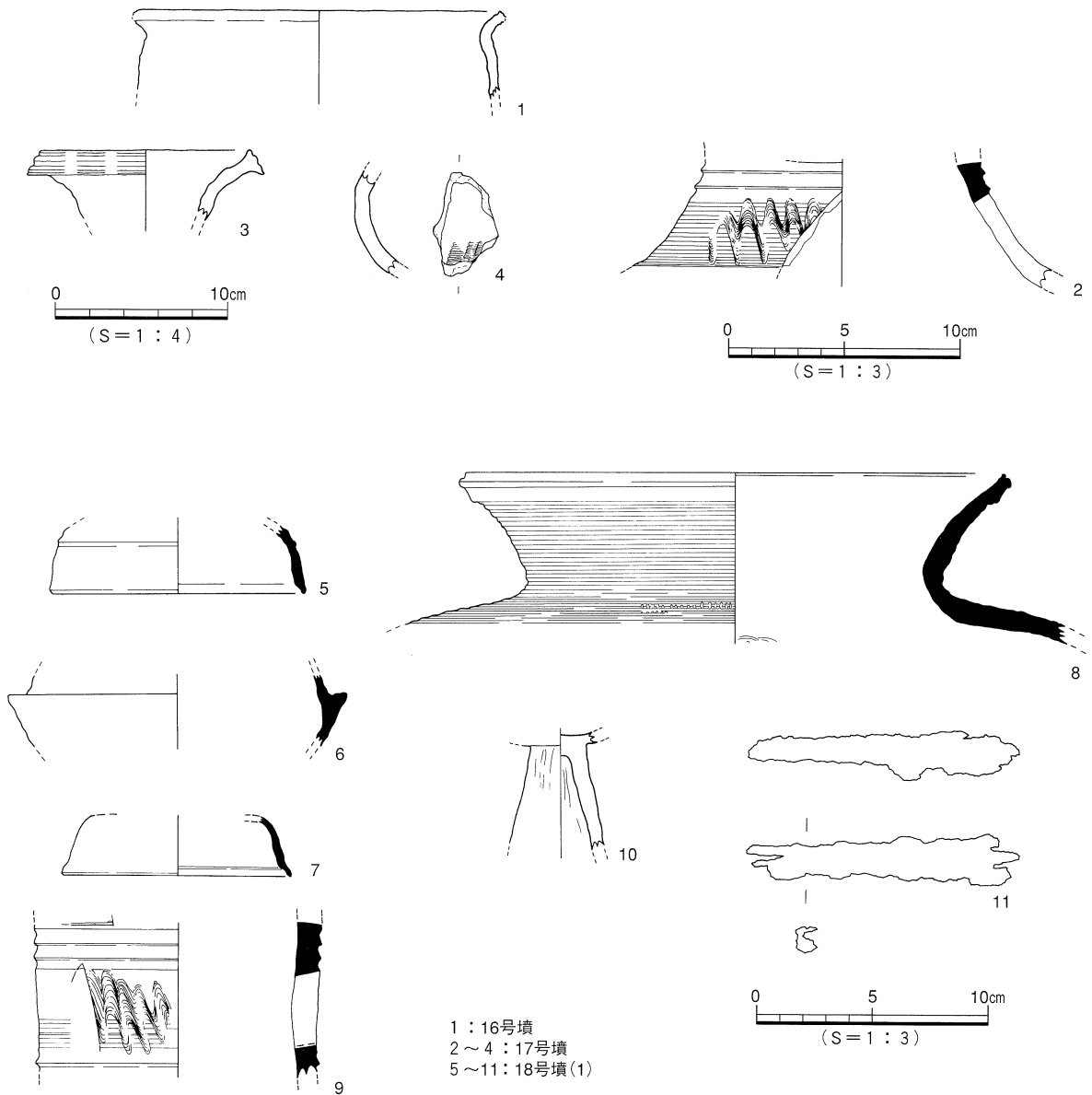
出土遺物（第36図5～11、第37～39図、写真45～47）

5～9は須恵器で、5は坏蓋、6は杯身、7は短頸壺の蓋、8は甕、9は器台の脚部になる。10は土師器で、高坏の脚部である。11は鉄製品で、鉄鏃と思われる。

12～38は埴輪で、円筒埴輪になる。良好な資料なので詳しく記述する（埴輪文責：山内英樹）。

12～15は口縁部からタガ部までが残存する個体である。いずれも口縁端部は外方に尖り気味であり、確認出来る限りでは、スカシ孔は円形で、最上段を除く各段に2個ずつ、直角に交差しながら穿たれている。また12はタガ形状が断面「三角形状」を呈しているのに対し、13～15は断面台形状または角のとれた山形を呈し、口縁端部内面にヨコハケ調整が見られる点で特徴的である。

16～25は口縁部である。端部のあまり尖らない17・19の個体を除くと、その大半は口縁端部が外方に尖るものである。外面調整はタテハケであるのに対し、内面調整には相違が見られ、端部内面にヨ



第36図 16・17・18号墳(1) 出土遺物実測図

コハケが見られないもの（16～19）と、ヨコハケが見られるもの（20～25）に大別される。また、そのヨコハケ原体は極めて細かいのも特徴である。

26～36はタガ部である。タガ形状は断面「三角形」を呈するもの（28・29・32）と、断面台形状（または山形）を呈するもの（26・27・30・31・33～36）が確認されるが、器面調整はすべて外面ナメハケ、内面指によるナデ・オサエである。36はその傾きから朝顔形埴輪のくびれ部の可能性も指摘できるが、スカシの位置に疑問が残る。

37は胴部である。外面調整にヨコハケが用いられている点が特徴的である。

38は基底部である。外面には強いタテハケが施されており、その上から端部をナデにより再調整しているのが確認できる。内面には指によるナデ・オサエが顕著に残る。

19号墳（第35図、写真36・41）

19号墳は、調査区北端、X 1・2 - Y 3～6 にあり、16号墳を切る。墳形は円墳になり、墳丘盛土は削平され消失し、周溝は2分の1強を検出し、北は調査外にいたる。規模は、周溝内径が10m、周溝外径が16m、溝幅2.8～3.6mになる。遺物は、X 2 Y 4 に最も多くあり、X 2 Y 3 と X 2 Y 7 にも集中的に出土している。遺物には、第40・41図で、須恵器が多数を占め、少量の弥生土器と石器がある。

出土遺物（第40・41図、写真48・49）

X 2 Y 4 出土品：41の坏蓋、50～52の高坏脚部、54の壺、57の大甕が出土している。

X 2 Y 3 出土品：46の高坏の蓋と58の大甕とがある。

X 2 Y 7 出土品：44の杯身と45の高坏の蓋とがある。

その他の遺物：注記が明確でなく、出土地点が詳細に分からないものである。39・40は坏蓋、42・43は杯身、47は高坏の蓋、48・49は高坏、53・55・56は壺になる。59・60は弥生土器で、59は器台、60は甕になる。61・62は石製品で、61は磨石、62はサヌカイトの剥片である。

(2) 土 坑（第35図、写真42～44・50）

記述に際しては、S K 8・5・9・11・12・15は調査時と土坑名（番号）が同じで、その他の土坑は記録が不十分なため、改めて報告に際し、土坑名（番号）を付したものである。

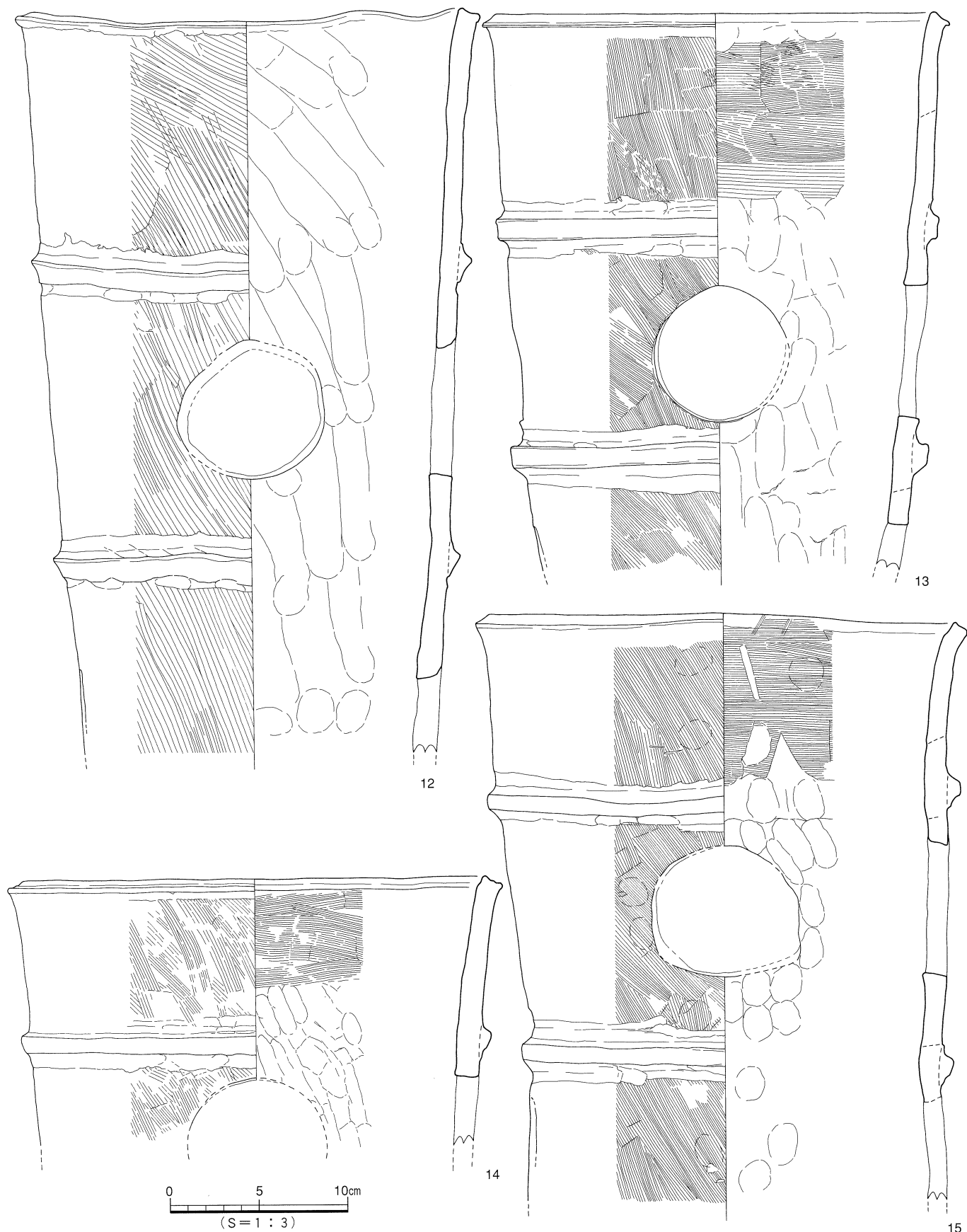
S K 8：X 5 Y 6 にある。平面形態は長方形を呈し、規模は長軸2.0m、短軸0.8mになる。遺物は完形の須恵器の坏2点が出土している。時期は、7世紀とする。

S K 5：X 4 Y 5 にある。平面形態は台形状を呈し、規模は長軸3.4m、短軸1.0mになる。実測可能な遺物はなく、時期は特定できない。

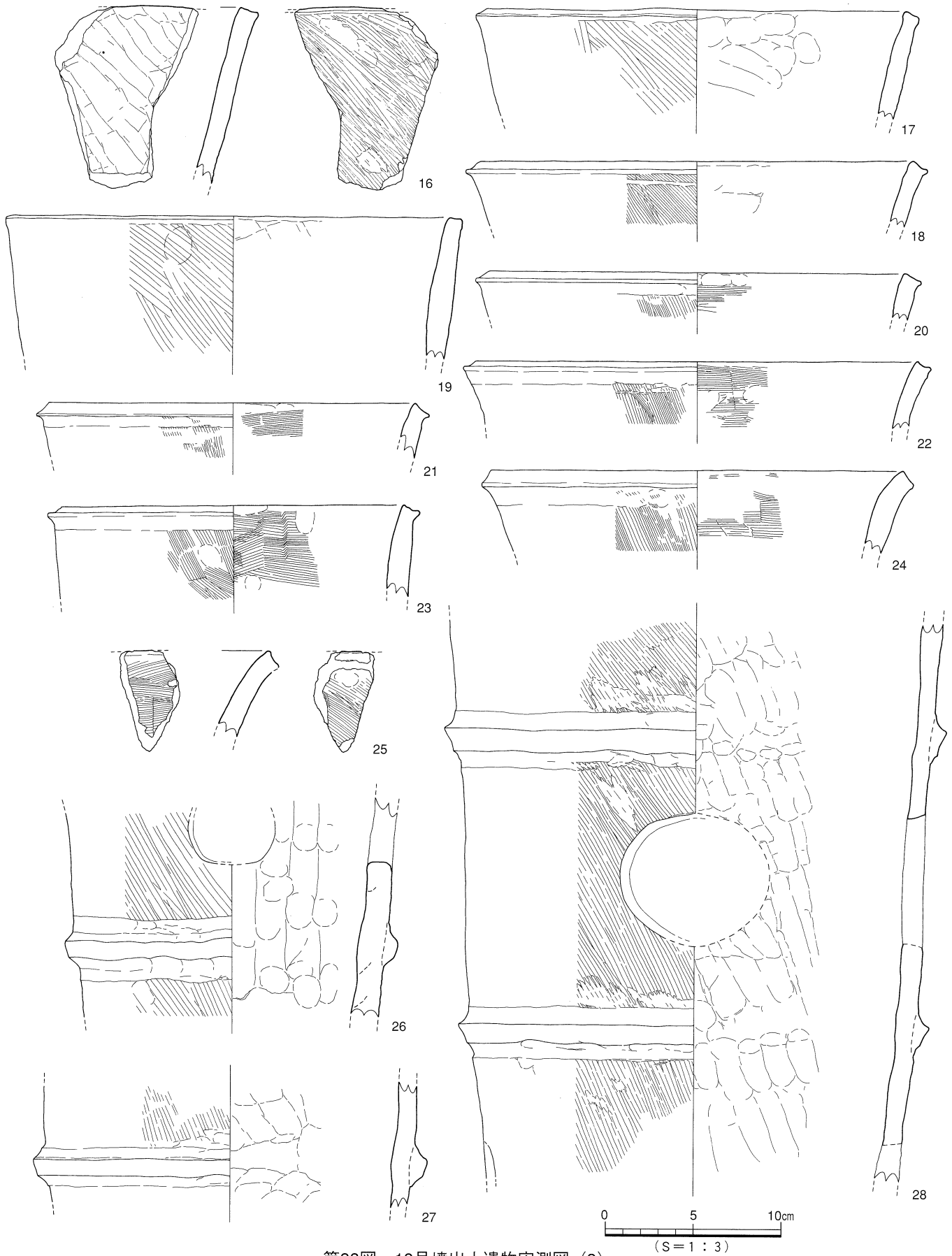
S K 9：X 5 Y 7 にあり、S X 2 を切る。平面形態は長方形を呈し、規模は長軸1.7m、短軸0.8mになる。実測可能な遺物はなく、時期は特定できない。

S K 11：X 6 Y 6～7 にあり、平面形態は長形状を呈する。規模は長軸1.8m、短軸0.8mで、実測可能な遺物はない。時期は特定できない。

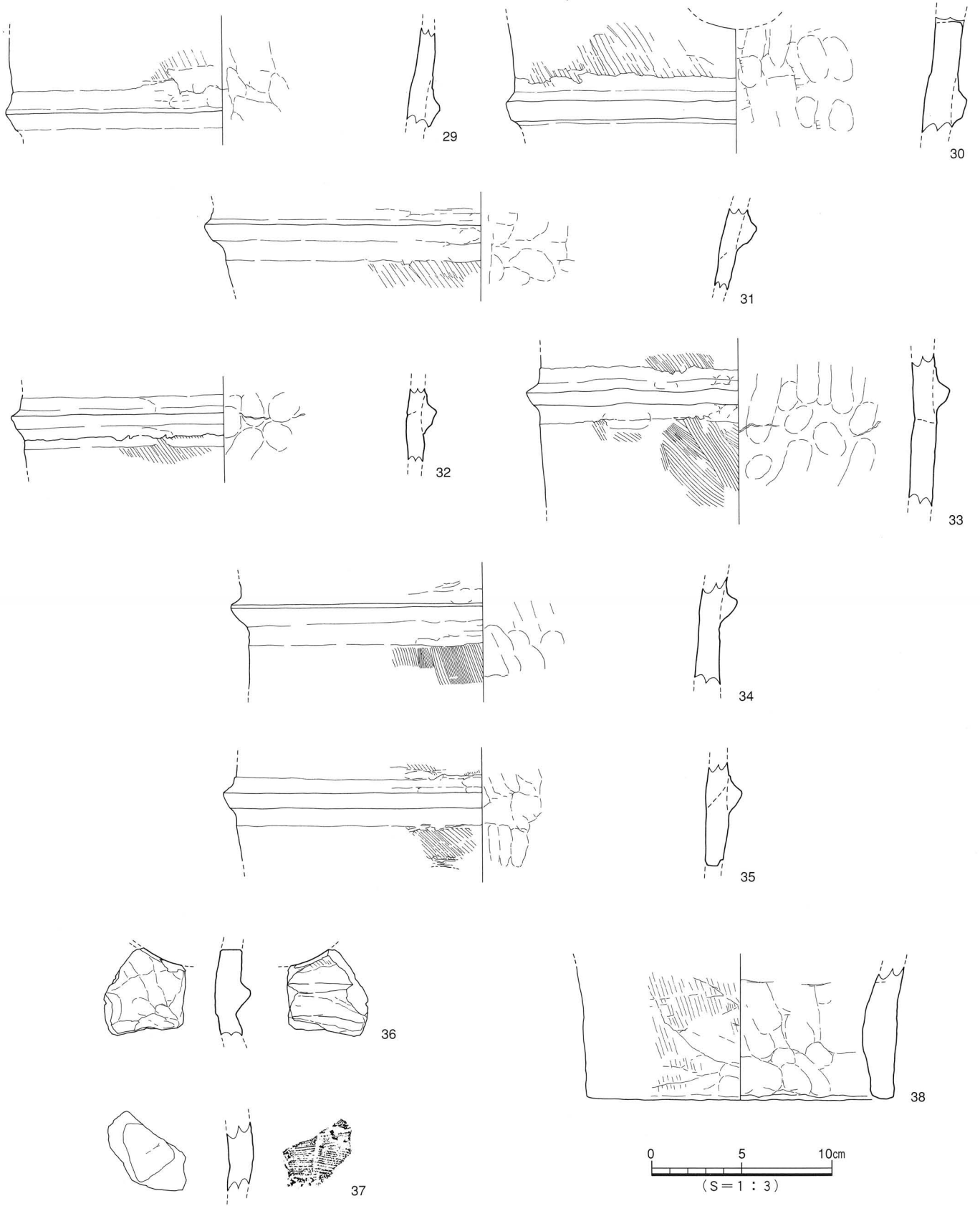
S K 12：X 7 Y 7 にあり、S K 13 を切る。平面形態は楕円形状を呈し、規模は長軸2.0m、短軸1.2mになる。実測可能な遺物はなく、時期は特定できない。



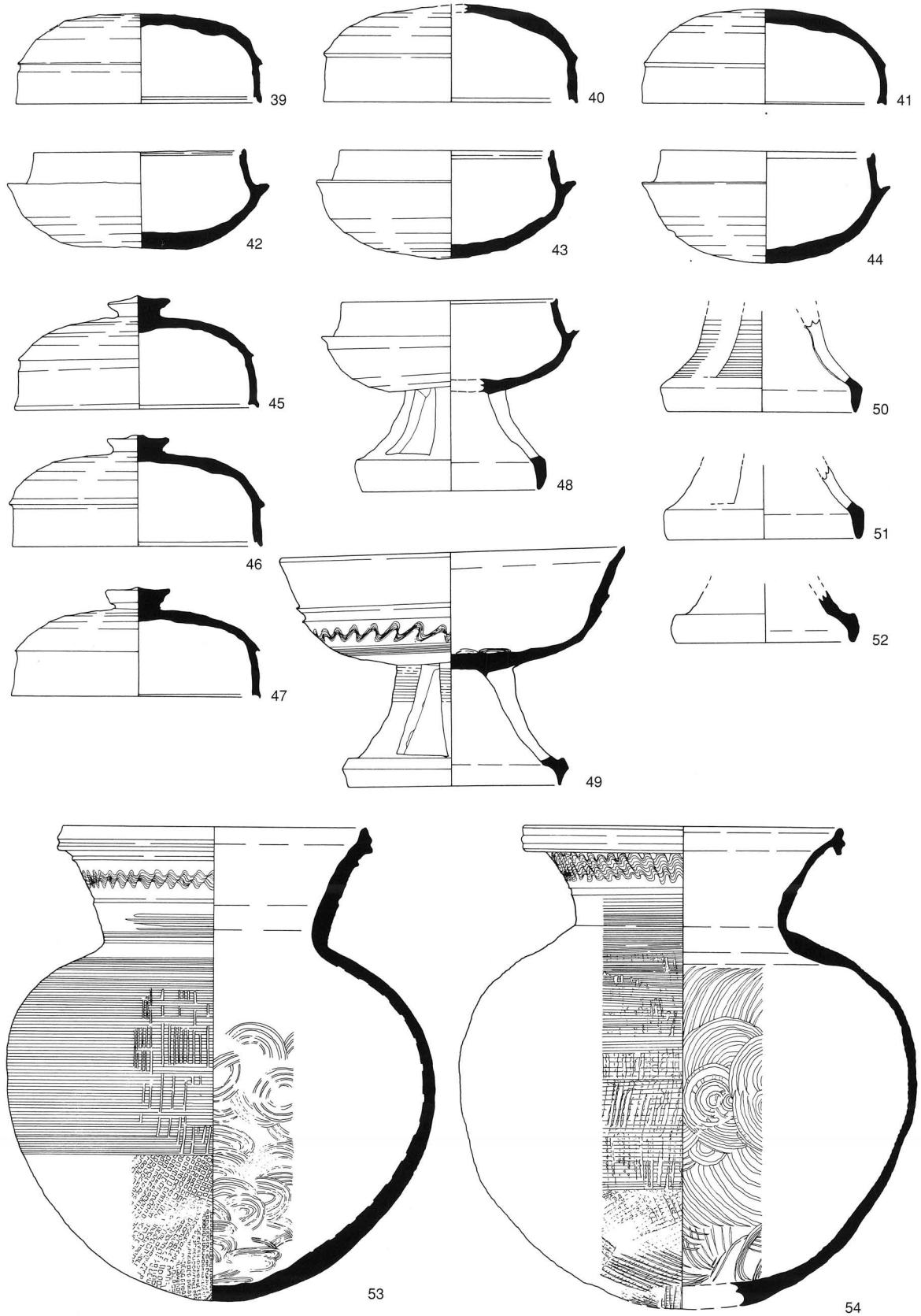
第37図 18号墳出土遺物実測図(2)



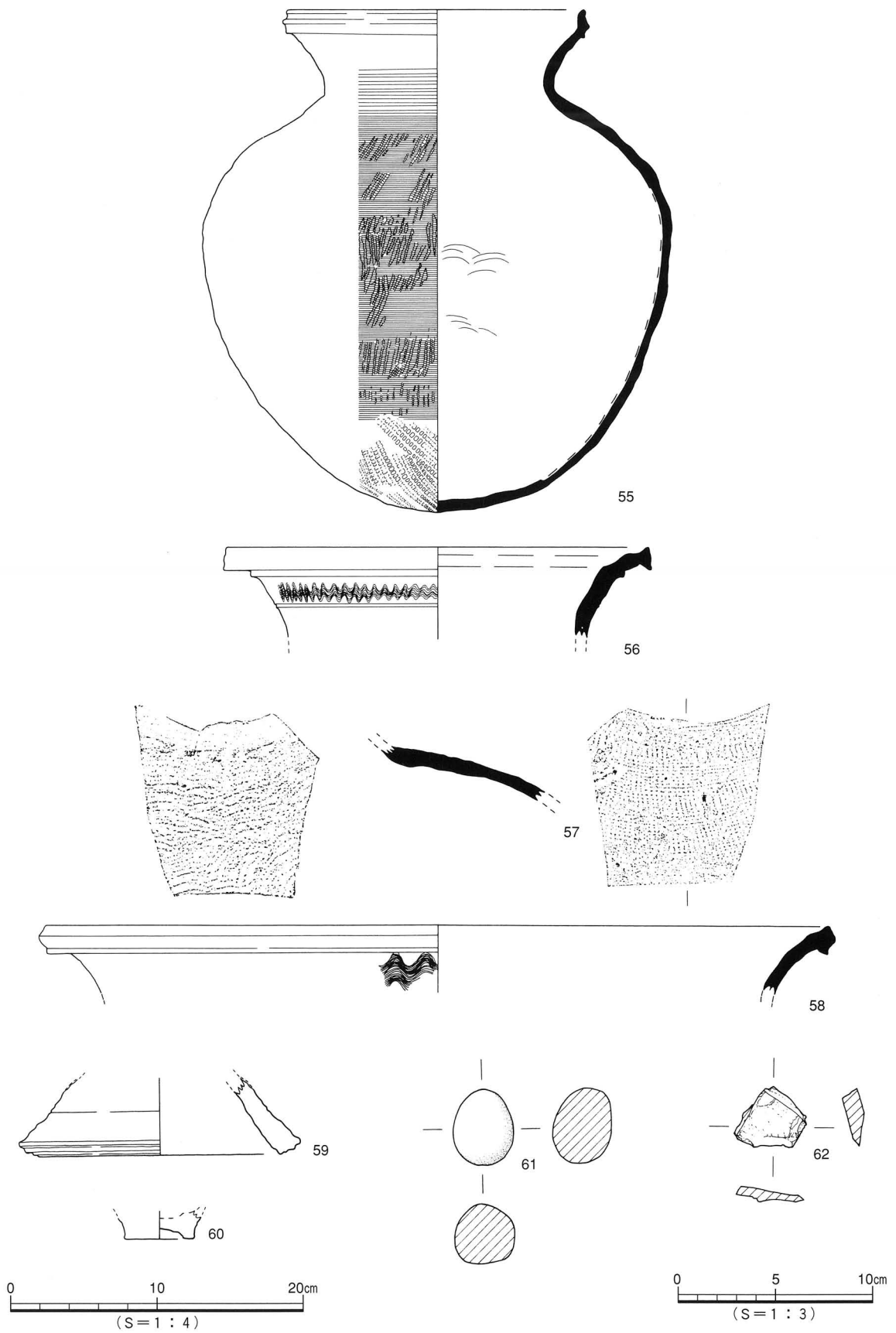
第38図 18号墳出土遺物実測図 (3)



第39図 18号墳出土遺物実測図(4)



第40図 19号墳出土遺物実測図(1)



第41図 19号墳出土遺物実測図(2)



第42図 SK8 出土遺物実測図

SK15：X 9 Y 6 にある。平面形態は長方形を呈し、規模は長軸2.2m、短軸0.8mになる。実測可能な遺物はなく、時期は特定できない。

・番号改変の土坑

SK 1：X 5 Y 3 にある。平面形態は隅丸方形を呈し、規模は長軸1.4m、短軸1.4mになる。実測可能な遺物はなく、時期は特定できない。

SK 2：X 5 Y 3～4 にあり、17号墳と切り合うが、その関係は不明。平面形態は楕円形状で、規模は長軸1.3m、短軸1.2mになる。実測可能な遺物はなく、時期は特定できない。

SK 3：X 3～4－Y 4～5 にあり、SX 4 と切り合うが、その関係は不明。平面形態は長方形を呈し、規模は長軸2.0m、短軸0.8mになる。実測可能な遺物はなく、時期は特定できない。

SK 4：X 3～4－Y 5 にあり、SK 3 と切り合うが、その関係は不明。平面形態は隅丸方形を呈し、長軸0.8m、短軸0.7mになる。実測可能な遺物はなく、時期は特定できない。

SK 6：X 5 Y 5 にあり、SX 3 に切られ、SK 7 を切る。平面形態は隅丸方形を呈し、規模は長軸2.4m、短軸1.5mになる。実測可能な遺物はなく、時期は特定できない。

SK 7：X 5 Y 5 にあり、SK 6 に切られる。平面形態は隅丸三角形を呈し、規模は長軸2.0m、短軸1.1mになる。実測可能な遺物はなく、時期は特定できない。

SK10：X 6 Y 4 にあり、18号墳に切られる。平面形態は長方形を呈し、規模は長軸3.4m、短軸3.0mになる。実測可能な遺物はない。18号墳に切られることから古墳時代6世紀以前になる。

SK13：X 7～8－Y 6～7 にあり、SK12に切られる。平面形態は楕円形状を呈し、規模は長軸4.7m、短軸3.6mになる。実測可能な遺物はなく、時期は特定できない。

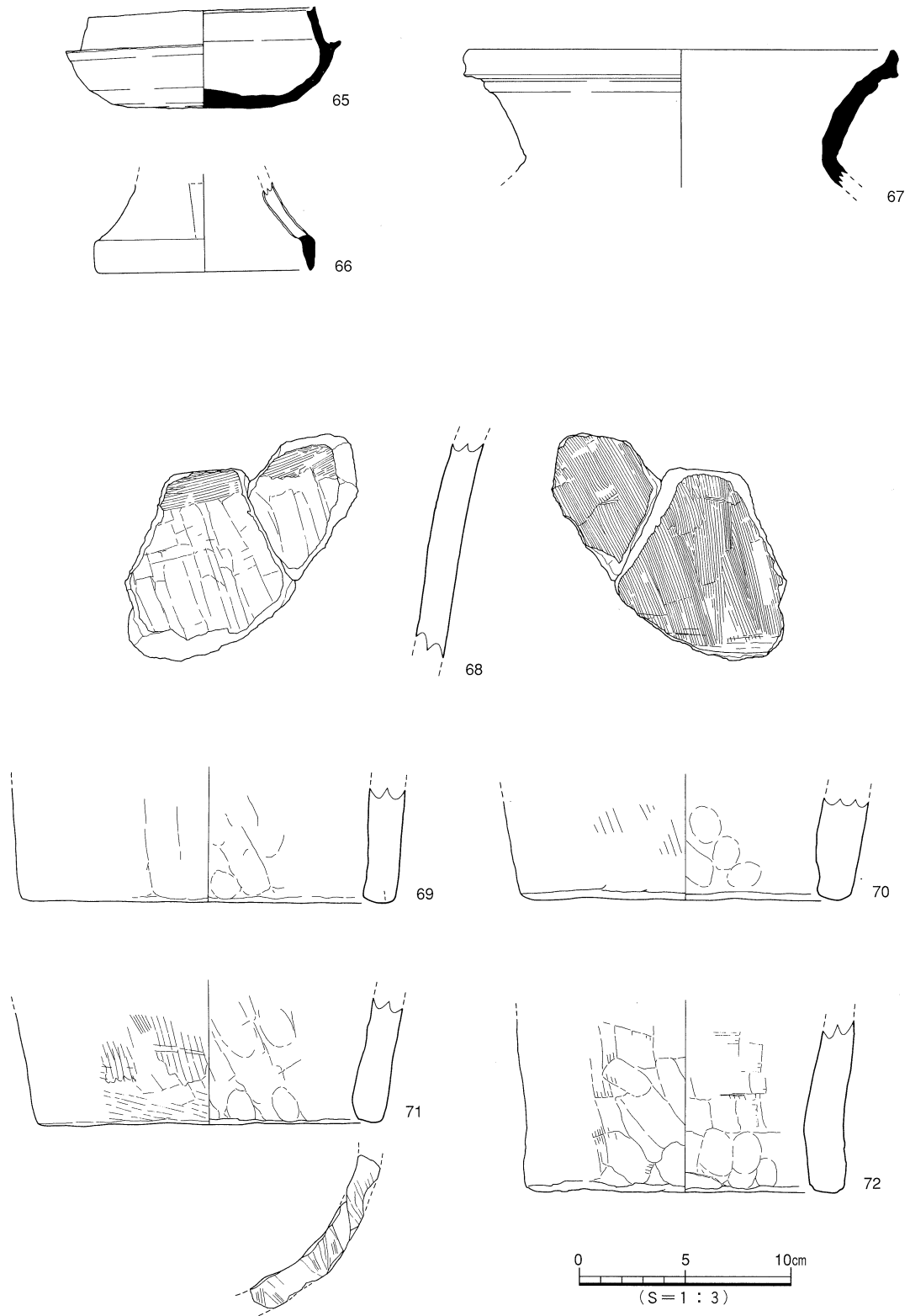
SK14：X 7 Y 5～6 にある。平面形態は「L」字状を呈し、規模は長軸2.5m、短軸2.2mになる。実測可能な遺物はなく、時期は特定できない。

(3) その他の遺構

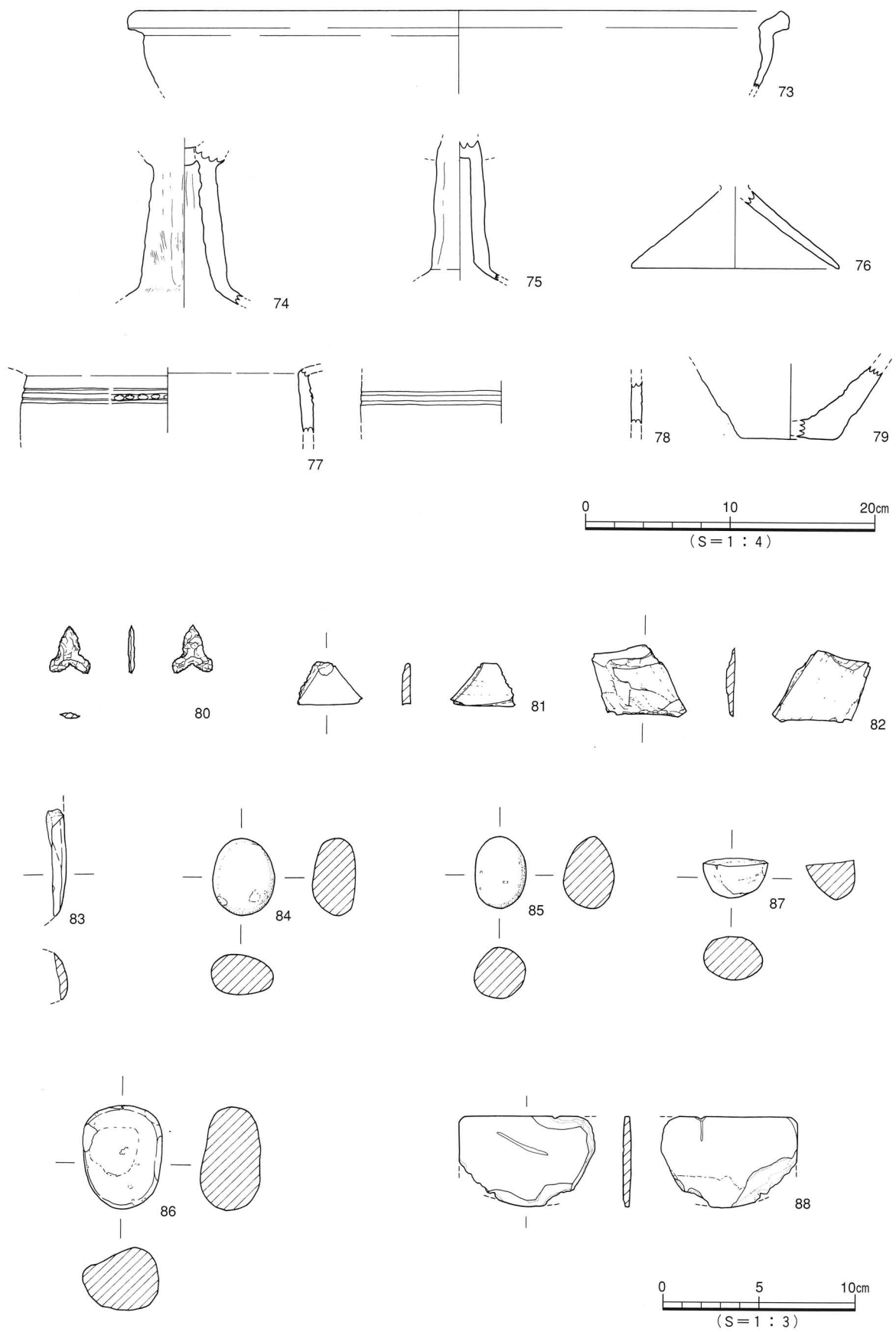
SX 1：調査区の南西隅にあり、北及び西は調査区外になる。地形の落ちで、人工的かは判断できない。規模は長軸6.2m、短軸4.2mになる。実測可能な遺物はなく、時期は特定できない。

SX 2：焼土の高まりである。X 6 Y 7 にあり、SK 9 に切られる。平面形態は台形状を呈し、規模は長軸2.1m、短軸1.6mになる。実測可能な遺物はなく、時期は特定できない。

SX 3：焼土の高まりである。X 5～6－Y 5 にあり、SK 6 を切り、SK 7 と接する。平面形態は円形状を呈し、規模は長軸2.8m、短軸2.4mになる。実測可能な遺物はなく、時期は特定できない。



第43図 出土地点不明遺物実測図(1)



第44図 グリッド・出土地点不明遺物実測図 (2)

(4) グリッド取り上げ遺物・出土地点不明遺物 (第43・44図、写真50)

グリッド取り上げ遺物：65の杯身はX 7 Y 10出土品、68の器種不明埴輪と70の円筒埴輪は18号墳の可能性をもつ。71の円筒埴輪と77の弥生前期の甕はX 5 Y 3 出土品、75の高坏脚部はX 7 Y 6 出土品、78の弥生前期の甕はX 6 Y 6 出土品。石器では、84の磨石はX 4 Y 6 出土品、85の磨石はX 6 Y 6 出土品、86の磨石、87の器種不明品はX 7 Y 7 出土品、88の器種不明品はX 5 Y 2 出土品になる。

出土地点不明遺物：66・67・69・72・73・74・76・79～83である。

3. 小 結

本調査では、古墳4基が主要な遺構になる。墳丘は削平され未検出であるが、周溝と周溝内遺物を確認するに至った。その結果、周溝内遺物は、完形品を含み、かつ集中して出土していることより、周溝内祭祀と考えてよいだろう。また、古墳の時期は5世紀末～6世紀前期中半までにおさまり、群集墳を形成していたとみられ、このうち、18号墳には埴輪が樹立されていたようで、他の古墳とは区分が可能になる。

土坑はいずれも時期や性格が判断できるものは少なく、課題を残す結果となった。ただし、このなかでも、SK 8は長方形の平面形状と完形の坏が2点出土していることで、墓の可能性が指摘できる。

遺物観察表一覧 (作成：宮内・山内・水口) 凡例は52ページを参照

表16 出土遺物観察表 土製品

(1)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		色調 (外面) (内面)	胎 土 焼 成	備考	写真
				外 面	内 面				
1	甕	口径(20.8) 残高 4.6	如意形口縁。	㊶ヨコナデ ㊷ナデ	ナデ	乳褐色 乳褐色	石・長(1~4) ◎	16号墳 X1,Y2	
2	器台	残高 5.2	脚部片。2条の凸帯の上下に三角形(?)状の透かしあり。回転カキメ→波状文。	回転ナデ	回転ナデ	灰白色 灰白色	密 ◎	17号墳	45
3	壺	口径(12.0) 残高 4.0	口縁端部を上下方に拡張し、凹線文3条を施す。	マメツ	マメツ	乳橙白色 乳橙白色	石・長(1~3) ◎	17号墳	
4	壺	残高 5.9	頸部片。貝殻施文。	マメツ	マメツ	乳橙白色 乳橙白色	石・長(1) 赤色酸化土粒 ◎	17号墳	
5	坏蓋	口径(10.8) 残高 2.8	丸みのある鈍い稜。口縁端部は内傾。小片。	回転ナデ	回転ナデ	灰白色 灰白色	密 ◎	18号墳 X6Y3	
6	坏身	受部径(14.5) 残高 3.0	受部は太く、やや上外方にのびる。小片。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色 灰色	密 ◎	18号墳 X6Y3	
7	蓋	口径(9.8) 残高 3.6	短頸壺の蓋。口縁端部は内傾し、沈線状の凹みあり。小片。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色 灰白色	密 ◎	18号墳 X9Y5	
8	甕	口径(23.0) 残高 6.5	外反する口頸部。口縁下に丸みのある断面三角形の凸帯が巡る。口縁端部はナデ凹む。	㊸回転ナデ ㊹平行タタキ→ 回転カキメ	㊺回転ナデ ㊻円弧タタキ	青灰色 灰色	密(長5) ◎	18号墳 X7Y5	
9	器台	残高 6.5	2条と1条以上の凸線が巡り、凸線間に波状文と透かし(三角形?)を施す。	回転ナデ 回転カキメ	回転ナデ	黒灰色 灰白色	密 ◎	18号墳 X6Y4	
10	高坏	残高 4.7	円筒状の脚部。内面にシボリ痕あり。	ミガキ(マメツ)	ナデ	乳橙白色 乳橙白色	密 ◎	18号墳 X7Y4	

出土遺物観察表 土製品

(2)

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	写真
				外面	内面				
12	円筒 埴輪	口径 23.6 残高 41.6	胴部から口縁部にかけて直線的に外傾。口縁端部は外方に尖り気味で、タガ断面は「三角形」を呈す。円形のスカシあり。口縁部ひずみ。	口端 ヨコナデ 胴 ナナメハケ	口端 ヨコナデ 胴 ナデ	黄茶褐色 黄茶褐色	石・長 (1~2) ◎	18号墳 X7Y5 X8Y5-6	45
13	円筒 埴輪	口径 (25.8) 残高 31.2	胴部から口縁部にかけてやや外傾し、口縁端部が外方に尖る。タガ断面は台形状を呈し、円形のスカシあり。	口端 ヨコナデ 胴 ナナメハケ	口端 ヨコナデ 上部 ヨコハケ 中部 ナデ	淡黄褐色 淡黄褐色	石・長 (1~2) ◎	18号墳 X6Y3-4 X7Y6 X8Y5-6	45
14	円筒 埴輪	口径 (27.6) 残高 14.8	口縁部はわずかに外反し、口縁端部はナデによりくぼむ。タガは山形を呈し、角がない。タガ下に円形のスカシあり。	口端 ヨコナデ 胴 ナナメハケ	口端 ナデ 上部 ヨコハケ 中部 ナデ	黄茶褐色 黄褐色	石・長 (1~3) ◎	18号墳 X7Y5	45
15	円筒 埴輪	口径 27.0 残高 32.7	胴部から口縁部にかけて外傾し、口縁端部が外方へ屈曲する。断面台形状のタガを持ち、タガ間には2方向の円形のスカシを施す。	口端 ヨコナデ 胴 ナナメハケ	口端 ヨコナデ→ハケ 上部 ヨコハケ 中部 指オサエ	黄茶褐色 黄茶褐色	石・長 (1~3) ◎	18号墳 X4Y5	46
16	円筒 埴輪	残高 9.9	口縁部は直線的。口縁端部はわずかに外方へ摘み出る。	タテハケ	ナデ	淡黄褐色 淡黄褐色	石・長 (1~3) 安山岩 ◎	18号墳 X8Y6	46
17	円筒 埴輪	口径 (23.6) 残高 6.0	口縁部は外傾。口縁端部は角がなく、わりと丸い。	タテハケ	ナデ	淡茶色 淡茶色	石・長 (1) ◎	18号墳 X8Y6	46
18	円筒 埴輪	口径 (26.1) 残高 3.7	口縁端部は外方へ尖り気味。	口端 ハケ→ヨコナデ 胴 タテハケ	ナデ	茶褐色 茶褐色	石・長 (1~2) ◎	18号墳 X9Y5	46
19	円筒 埴輪	口径 (25.7) 残高 7.95	直線的にのびる口縁部を持ち、口縁端部を丸くおさめる。	口端 ヨコナデ 胴 タテハケ	マメツ	乳黄色 乳黄色	石・長 (1~3) ○	18号墳 X6Y4	46
20	円筒 埴輪	残高 2.7	口縁端部は外方へ尖り気味。	口端 ハケ→ヨコナデ 胴 タテハケ	口端 ヨコナデ 胴 ヨコハケ	淡茶褐色 淡茶褐色	石・長 (1) ◎	18号墳 X7Y5	46
21	円筒 埴輪	口径 (20.5) 残高 3.05	口縁端部は外方へ尖り気味。	口端 ハケ→ヨコナデ 胴 タテハケ	口端 ヨコナデ 胴 ヨコハケ	淡茶褐色 淡茶褐色	石・長 (1) ◎	18号墳 X6Y3	46
22	円筒 埴輪	口径 (24.9) 残高 3.7	口縁端部がやや外反する。口縁端面はナデによりくぼむ。	口端 ハケ→ヨコナデ 胴 タテハケ	ヨコハケ	淡茶褐色 淡茶褐色	石・長 (1~4) ◎	18号墳 X7Y5	46
23	円筒 埴輪	口径 (21.0) 残高 5.2	直線的な口縁部。口縁端部は外方へ尖り気味。	口端 ハケ→ヨコナデ 胴 タテハケ	口端 ハケ→ヨコナデ 胴 ヨコハケ	茶褐色 茶褐色	石・長 (1~3) ◎	18号墳 X6Y5-6	46
24	円筒 埴輪	口径 (23.2) 残高 4.5	口縁端部付近が若干外反し、口縁端部はやや外方へ尖る。	口端 ハケ→ヨコナデ 胴 タテハケ	口 マメツ 胴 ヨコハケ	茶褐色 茶褐色	石・長 (1) ◎	18号墳 X6Y3	46
25	円筒 埴輪	残高 4.8	外反する口縁端部を持つ。	タテハケ	口端 ヨコナデ 胴 ヨコハケ→ ナナメハケ	茶褐色 淡褐色	石・長 (1) ◎	18号墳 X9Y5	46
26	円筒 埴輪	タガ径 (18.8) 残高 12.2	胴部はやや外傾し、断面台形状のタガを持つ。上位には円形のスカシが施される。	ナナメハケ	ナデ・指オサエ	淡茶褐色 淡茶褐色	石・長 (1~2) 赤色土粒 ○	18号墳 X8Y6	47
27	円筒 埴輪	残高 7.0	直線的にのびる胴部に、断面台形状のタガを持つ。	ナナメハケ	ナデ・指オサエ	黄褐色 黄褐色	石・長 (1~2) ◎	18号墳 X7Y5	47
28	円筒 埴輪	残高 32.2	やや外傾する胴部には、断面「三角形」のタガを持つ。タガ間には2方向の円形スカシあり。	ナナメハケ	ナデ・指オサエ	淡黄褐色 淡黄褐色	石・長 (1~2) ◎	18号墳 X7Y5 X8Y6	47
29	円筒 埴輪	残高 5.4	胴部に断面「三角形」のタガを持つ。	ナナメハケ	ナデ (マメツ)	黄褐色 黄褐色	石・長 (1~3) ◎	18号墳 X6Y4	47
30	円筒 埴輪	残高 6.35	胴部に断面台形状のタガを持ち、その上位に円形と思われるスカシあり。	ナナメハケ	ナデ	淡黄褐色 淡黄褐色	石・長 (1~3) ◎	18号墳 X8Y5	47
31	円筒 埴輪	残高 4.4	胴部に断面山形 (「三角形」か?) のタガを持つ。	ナナメハケ	ナデ	淡黄褐色 淡黄褐色	石・長 (1) ◎	18号墳 X7Y5	47

出土遺物観察表 土製品

(3)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	写真
				外面	内面				
32	円筒埴輪	タガ径(23.3) 残高 4.0	胴部には断面「三角形」のタガを持つ。	ナナメハケ	ナデ	淡茶色 淡茶色	石・長(1~2) ○	18号墳 X8Y6	47
33	円筒埴輪	タガ径(23.2) 残高 8.3	直線的にのびる胴部に、断面山形(「三角形」か?)のタガを持つ。	ナナメハケ	ナデ・指オサエ	茶褐色 褐色	石・長(1~3) 安山岩? ○	18号墳 X9Y5	47
34	円筒埴輪	残高 5.8	断面山形(「三角形」か?)のタガを持つ。	ナナメハケ	ナデ	淡茶褐色 淡茶褐色	石・長(1) ◎	18号墳 周溝	47
35	円筒埴輪	残高 5.45	断面山形(「三角形」か?)のタガを持つ。	ナナメハケ	ナデ・指オサエ	淡黄褐色 淡黄褐色	石・長(1~2) ◎	18号墳 X9Y5	47
36	朝顔形埴輪?	残高 4.7	胴部が湾曲し、断面山形のタガを持つ。タガ上方にスカシあり。	一部ナナメハケ	ナデ	淡茶褐色 淡茶褐色	石・長(1~2) ○	18号墳 周溝	47
37	不明	残高 4.1	胴部はややカーブをもつ。	ヨコハケ	ナデ	淡茶褐色 淡茶褐色	石・長(1) ◎	18号墳 X8Y6	47
38	円筒埴輪	底径(16.9) 残高 7.2	底端部より上方へ外反する基底部。底端部は丸くおさめる。	タテハケ→ ナデ	ナデ・指オサエ	黄褐色 黄褐色	石・長(1~3) ◎	18号墳 X8Y5 X9Y5	47
39	坏蓋	口径 12.3 稜径 12.2 器高 4.4	扁平な天井部。断面三角形の鋭い稜。口縁端部は内傾し、沈線状の凹みがある。ほぼ完成品。	㊦回転ヘラズリ1/2 (左回り) ㊧回転ナデ	㊦回転ナデ ナデ ㊧回転ナデ	灰色 青灰色	密(長1~6) ◎	19号墳	48
40	坏蓋	口径(12.6) 稜径 12.7 残高 4.9	丸みのある天井部。断面三角形の鋭い稜。口縁端部は内傾する凹面をなす。2/3の残存。	㊦回転ヘラズリ1/2 (右回り) ㊧回転ナデ	㊦回転ナデ ナデ ㊧回転ナデ	灰白色 灰白色	密 ◎	19号墳	48
41	坏蓋	口径 12.2 稜径 12.1 器高 4.7	丸みのある天井部。断面三角形の鈍い稜。口縁端部は内傾する凹面をなす。ほぼ完成品。	㊦回転ヘラズリ1/3 (右回り) ㊧回転ナデ	㊦回転ナデ ナデ ㊧回転ナデ	灰色 灰色	密(長2) ◎	19号墳 X2Y4	48
42	坏身	たちあがり径 10.5 受部径 13.1 器高 4.7	扁平な底部。たちあがり端部は内傾し、沈線状の凹みがある。受部はほぼ水平にのびる。2/3の残存。	㊦回転ナデ ㊦回転ヘラズリ1/2 (右回り)	㊦回転ナデ ㊦回転ナデ ナデ	青灰色 青灰色	密(石・長1) ◎	19号墳	48
43	坏身	たちあがり径 10.6 受部径 13.0 器高 5.4	丸みのある底部。たちあがり端部は内傾し、沈線状の凹みがある。受部はほぼ水平にのび、受部端に凹みあり。1/2の残存。	㊦回転ナデ ㊦回転ヘラズリ1/2 (右回り)	㊦回転ナデ ㊦回転ナデ ナデ	青灰色 青灰色	密(長1~4) ◎	19号墳	48
44	坏身	たちあがり径 10.6 受部径 12.3 器高 5.6	丸みのある底部。たちあがり端部は内傾する凹面をなす。受部はやや上外方にのび、受部端に凹みあり。2/3の残存。	㊦回転ナデ ㊦回転ヘラズリ1/2 (右回り)	㊦回転ナデ ㊦回転ナデ ナデ	青灰色 青灰色	密(石2) ◎	19号墳 X2Y7	48
45	蓋	口径 12.2 器高 5.6 つまみ径 3.1 つまみ高 1.0	有蓋高坏の蓋。つまみ中央部は突出する。断面三角形の鋭い稜。口縁端部は内傾する凹面をなす。ほぼ完成品。	㊦回転ナデ ㊦回転ヘラズリ1/2 ㊧回転ナデ	㊦回転ナデ ナデ ㊧回転ナデ	灰色 青灰色	密(長3) ◎	19号墳 X2Y7	48
46	蓋	口径 12.6 器高 5.6 つまみ径 3.3 つまみ高 1.1	有蓋高坏の蓋。つまみ中央部は突出する。断面三角形の鋭い稜。口縁端部は内傾する凹面をなす。3/4の残存。	㊦回転ナデ ㊦回転ヘラズリ1/2 ㊧回転ナデ	㊦回転ナデ ナデ ㊧回転ナデ	灰色 青灰色	密(長1~3) ◎	19号墳 X2Y3	48
47	蓋	口径 12.6 器高 5.5 つまみ径 3.1 つまみ高 0.8	有蓋高坏の蓋。つまみ中央部は突出する。断面三角形の鋭い稜。口縁端部は内傾し、沈線状の凹みがある。3/4の残存。	㊦回転ナデ ㊦回転ヘラズリ1/2 ㊧回転ナデ	㊦回転ナデ ナデ ㊧回転ナデ	灰色 青灰色	密(石・長1) ◎	19号墳	48
48	高坏	口径 10.8 底径 8.9 器高 9.5	有蓋高坏。たちあがり端部は内傾する凹面をなす。受部は上外方にのびる。台形状透かしあり(3方向)。3/4の残存。	㊦上回転ナデ ㊦下回転ヘラズリ1/3 ㊦回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密(長1) ◎	19号墳	49
49	高坏	口径 17.3 底径 10.6 器高 11.8	無蓋高坏。坏部に2条の凸線が巡り、凸線下に波状文を施す。台形状の透かしあり(3方向)。ほぼ完成品。	㊦上回転ナデ ㊦下回転ヘラズリ →回転カキメ ㊦回転ナデ	㊦上回転ナデ ㊦下ナデ(凹弧タキ) ㊦回転ナデ	青灰色 赤褐色	密(長1~3) ◎	19号墳	49
50	高坏	底径(8.8) 残高 4.8	脚端部は下方に屈曲。柱部に透かしを2ヶ看取(3方向)。	㊦回転カキメ ㊦回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密(長1) ◎	19号墳 X2Y4	
51	高坏	底径(9.6) 残高 3.6	脚端部は下方に屈曲。柱部に透かしを2ヶ看取(3方向)。	回転ナデ	回転ナデ	黒灰色 青灰色	密(長1) ◎	19号墳 X2Y4	

遺物観察表

出土遺物観察表 土製品

(4)

番号	器種	量法(cm)	形態・施文	調 整		色調 (外面 内面)	胎 土 焼 成	備考	写真
				外 面	内 面				
52	高坏	底径(9.0) 残高 2.5	脚端部は上下方に拡張。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ◎	19号墳 X2Y4	
53	壺	口径 15.0 胴部径21.2 器高 23.5	外反口縁。口縁部は上方に拡張し、口縁下に1条の凸線。頸部に2条の凸線と波状文あり。頸部と胴上半部に回転カキメ調整を施す。2/3の残存。	㊶回転ナデ ㊷回転カキメ ㊸平行タタキ→カキメ ㊹格子目タタキ	㊶回転ナデ ㊷回転ナデ ㊸同心円タタキ ㊹同心円タタキ	赤褐色 赤褐色	密(石・長1) ◎	19号墳	49
54	壺	口径 15.7 胴部径22.8 器高 24.0	外反口縁。口縁部は上下方に拡張し、口縁下に1条の凸線。頸部に凹線1条と波状文(10条1組)を施す。頸部と胴上半部に回転カキメ調整を施す。ほぼ完成品。	㊶回転ナデ ㊷回転カキメ ㊸平行タタキ→カキメ ㊹格子目タタキ	㊶回転ナデ ㊷回転ナデ ㊸同心円タタキ ㊹円弧タタキ	灰色 灰色	密(長1) ◎	19号墳 X2Y4	49
55	壺	口径 15.1 胴部径23.8 器高 25.4	口縁部は上方に拡張し、口縁下に1条の凸線が巡る。頸部と胴部に回転カキメ調整を施す。ほぼ完成品。	㊶回転ナデ ㊷回転カキメ ㊸平行タタキ→カキメ ㊹格子目タタキ	㊶回転ナデ ㊷回転ナデ ㊸円弧タタキ(ナデ削し) ㊹ナデ	灰白色 灰白色	密(長1~5) ◎	19号墳	49
56	甕	口径(21.5) 残高 4.6	外反口縁。口縁部は上下方に拡張し、口縁下に凸線1条。頸部に沈線1条と波状文(7条1組)を施す。	回転ナデ	回転ナデ	黒灰色 黒灰色	密(長1~2) ◎	19号墳	
57	甕	残高 2.7	肩部片。外面に平行叩き後、回転カキメ調整を施す。	平行タタキ→カキメ	円弧タタキ	青灰色 青灰色	密(長4) ◎	19号墳 X2Y4	
58	甕	口径(40.0) 残高 3.4	大型品。口縁下に1条の凸線が巡る。頸部に波状文あり。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色 灰白色	密(長1) ◎	19号墳 X2Y3	
59	器台	底径(16.6) 残高 5.2	脚部片。脚端面に凹線文3条を施す。	ヨコナデ	マメツ	乳橙色 乳橙色	石・長(1~4) ◎	19号墳	
60	甕	底径 4.8 残高 1.5	上げ底の底部。内面はハクリしている。	ヨコナデ	ハクリ・マメツ	乳橙白色 乳橙白色	石・長(1~3) ◎	19号墳	
63	坏	口径 9.6 底径 7.4 器高 3.3	体部はやや内湾し、口縁部は尖る。体底部境に弱い稜あり。底部に回転ヘラ切り痕あり。ほぼ完成品。	㊶回転ナデ ㊷回転ヘラケズリ	㊶回転ナデ ㊷ナデ	青灰色 青灰色	密(長1~3) ◎	SK8	50
64	坏	口径(10.6) 底径 8.3 器高 3.8	体部は内湾し、口縁部は外反する。体部中位に1条の沈線が巡る。ほぼ完成品。	㊶回転ナデ ㊷回転ヘラケズリ→ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密(長1~3) ◎	SK8	50
65	坏身	たちあがり径10.7 受部径13.0 器高 4.7	扁平な底部。たちあがり端部は内傾する凹面をなす。受部は水平にのび、受部端に沈線状の凹みあり。	㊶回転ナデ ㊷回転ヘラケズリ1/3	㊶回転ナデ ㊷回転ナデ ナデ	青灰色 青灰色	密(長1~5) ◎	X7Y10	
66	高坏	底径(10.0) 残高 4.2	脚端部は下方に屈曲。柱部に透かしを1ヶ看取。小片。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ◎	表採	
67	甕	口径(20.0) 残高 5.7	口縁部は上方に拡張し、口縁下と頸部に丸みのある凸線1条を施す。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ◎	表採	
68	不明	残高 10.5	外面に赤色顔料が塗布される。	ナナメハケ	ナナメハケ→ 板ナデ	淡黄褐色 淡灰黄色	石・長(1~2) ◎	18号墳 か?	50
69	円筒 埴輪	底径(17.4) 残高 6.4	直線的にのびる基底部。底端部は丸くおさめ、自重による潰れが見られない。	板オサエ	ナデ	黄褐色 黄褐色	石・長(1~3) ◎		
70	円筒 埴輪	底径(14.3) 残高 4.7	底端部は、自重による潰れが見られない。	ハケ(マメツ)	指オサエ	淡茶色 淡茶色	石・長(1~2) ○	18号墳 か?	
71	円筒 埴輪	底径(16.0) 残高 5.85	底端部は丸くおさめており、底面には置き台の痕跡が残る。	タテハケ ナナメハケ	ナデ・指オサエ	淡茶褐色 淡茶褐色	石・長(1~3) ◎	X5Y3 表採	
72	円筒 埴輪	底径(14.8) 残高 8.0	直線的にのびる基底部。底端部は、自重による潰れが見られない。	ハケ→ナデ	指オサエ 板ナデ	淡黄褐色 淡黄褐色	石・長(1~3) ◎	表採	
73	鍋	口径(31.0) 残高 4.0	外反口縁。口縁部内面に弱い稜をもつ。	ヨコナデ	ヨコナデ	黒褐色 褐黄色	密 ◎	表採	

出土遺物観察表 土製品

(5)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	写真
				外面	内面				
74	高坏	残高 7.6	円筒状の柱部。坏部との接合は充填技法による。	ミガキ	マメツ	乳橙白色 乳橙白色	石・長(1~3) ◎	南側、斜面 表採	
75	高坏	残高 7.1	円筒状の柱部。坏部との接合はさし込み技法による。	ミガキ(マメツ)	ナデ(マメツ)	乳橙色 乳橙色	石・長(1) ◎	X7Y6	
76	器台	残高 4.0	小型器台の脚部片。	ミガキ	ヨコナデ	乳橙色 乳橙色	石・長(1) 金 ◎	表採	
77	甕	残高 4.5	ヘラ沈線文2条+刺突文。 弥生前期。	ミガキ	マメツ	乳黄色 乳黄色	石・長(1~2) 金 ◎	X5Y3	
78	甕	残高 3.0	ヘラ沈線文2条。弥生前期。	ミガキ	マメツ	乳黄橙色 乳黄色	石・長(1) 金 ◎	X6Y6	
79	壺	底径(6.2) 残高 4.7	わずかに上げ底。	ナデ	ナデ	黒灰色 乳橙色	石・長(1~3) ◎	南端トレンチ 表採	

表17 出土遺物観察表 鉄製品

番号	器種	残存	法量				備考	写真
			長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
11	不明		11.5	2.2	0.9	39.66	18号墳 X9Y5	45

表18 出土遺物観察表 石製品

番号	器種	残存	材質	法量				備考	写真
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
61	磨石	完形		3.80	3.10	3.00	49.08	19号墳	
62	剥片		サヌカイト	2.90	3.40	0.90	8.56	19号墳	
80	石鏃	完形	サヌカイト	2.40	2.00	0.30	0.89	地点不明	50
81	剥片	完形	頁岩?	2.20	3.20	0.4	2.24	東側	50
82	スクレイパー	完形	頁岩?	3.60	4.20	0.4	8.89	東側	50
83	伐採斧		緑色片岩	5.40	0.7	2.40	12.16	表採	
84	磨石	完形		3.90	3.20	2.20	38.94	X4Y6 表採	50
85	磨石	完形		3.70	2.60	2.60	35.50	X6Y6 表採	50
86	磨石	完形		5.30	4.10	3.20	52.16	X7Y7	50
87	不明品			2.00+α	3.30	2.50	20.02	X7Y7	50
88	不明品			7.1	4.6	0.4	23.39	X5Y2	50



写真33 調査地全景
(南西より)



写真34 16・17・19号墳
検出状況(西より)



写真35 17・18号墳検出状況
(西より)



写真36 16・17・19号墳
完掘状況(西より)

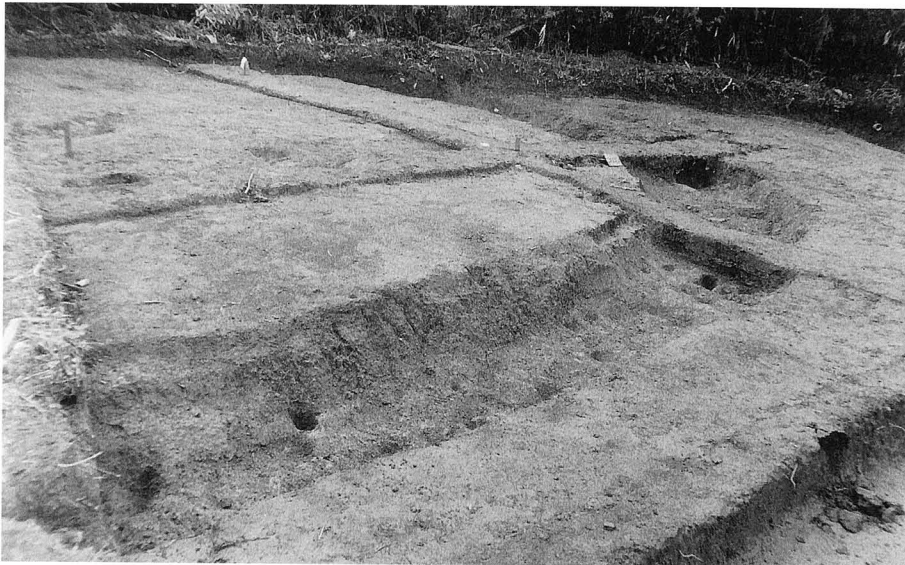


写真37 16号墳完掘状況
(北西より)



写真38 17号墳完掘状況
(西より)

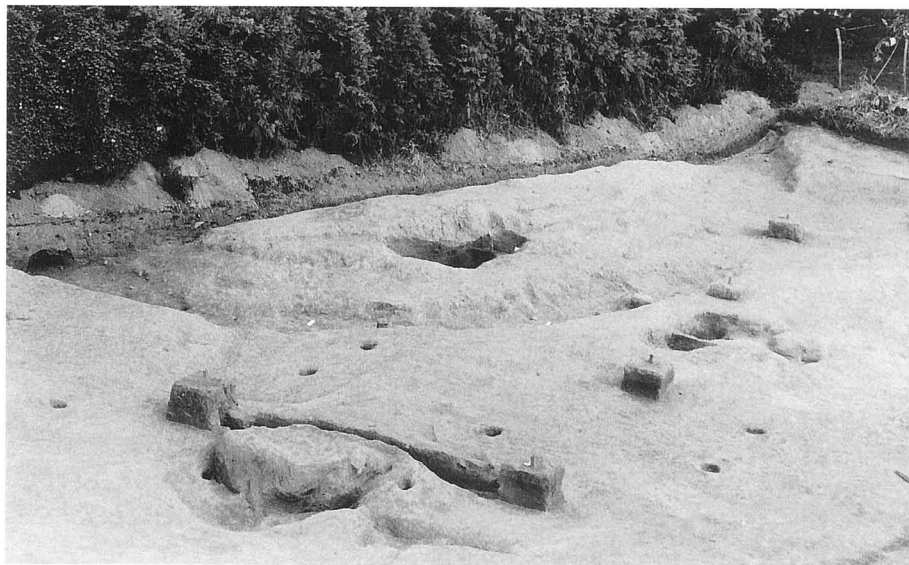


写真39 18号墳完掘状況
(北西より)

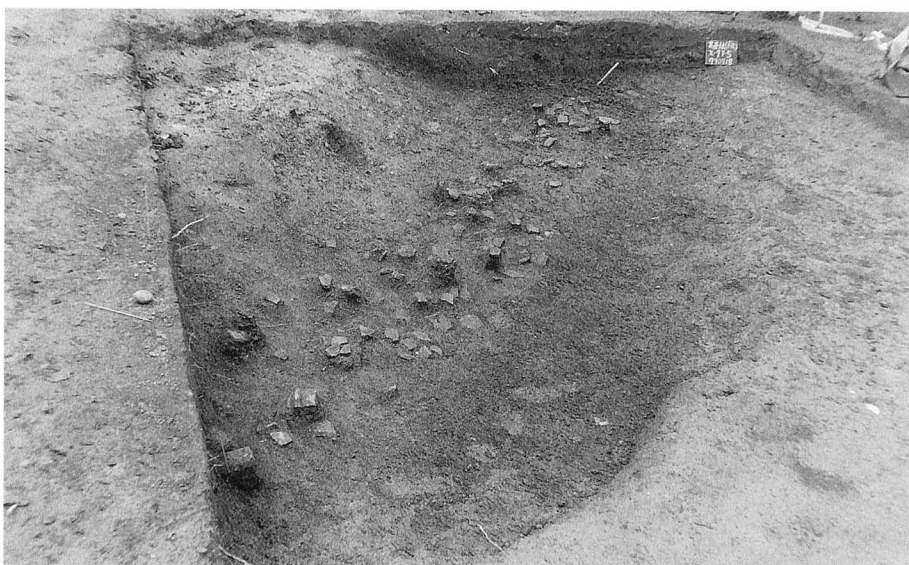


写真40 18号遺物出土状況
(北より)



写真41 16・19号墳完掘状況
(西より)



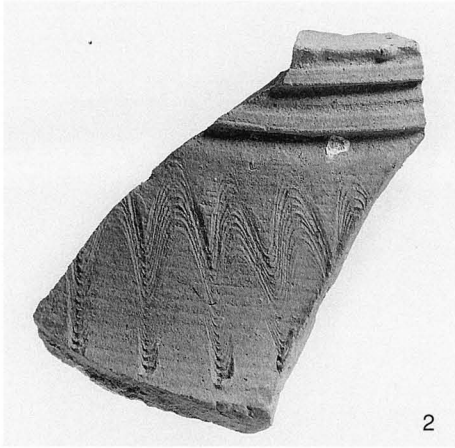
写真42 SK8 完掘状況
(南より)



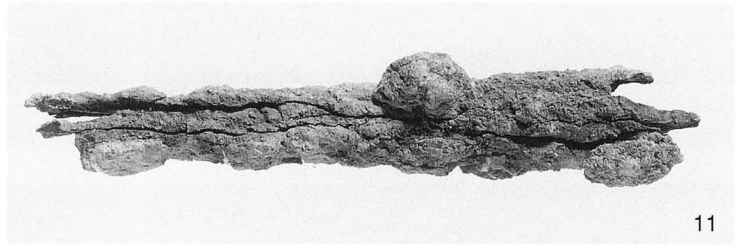
写真43 SK8 遺物出土
状況 (1) (北より)



写真44 SK8 遺物出土
状況 (2) (南より)



2



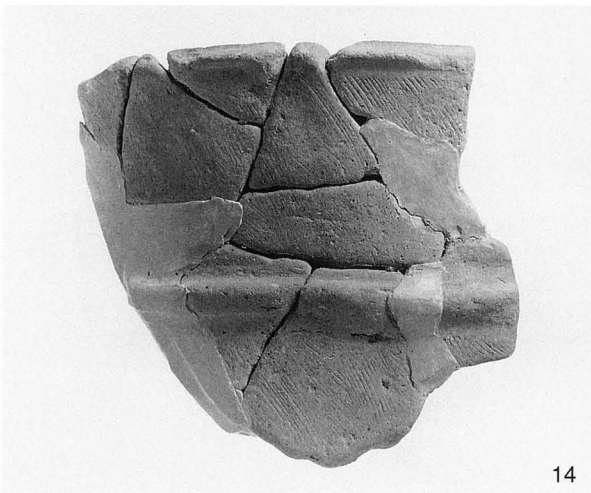
11



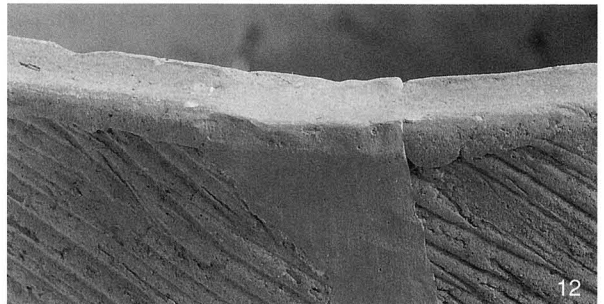
13



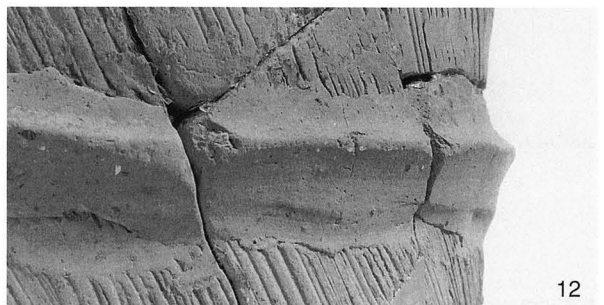
12



14



12



12

写真45 出土遺物（17号墳：2・18号墳（1）：11～14）

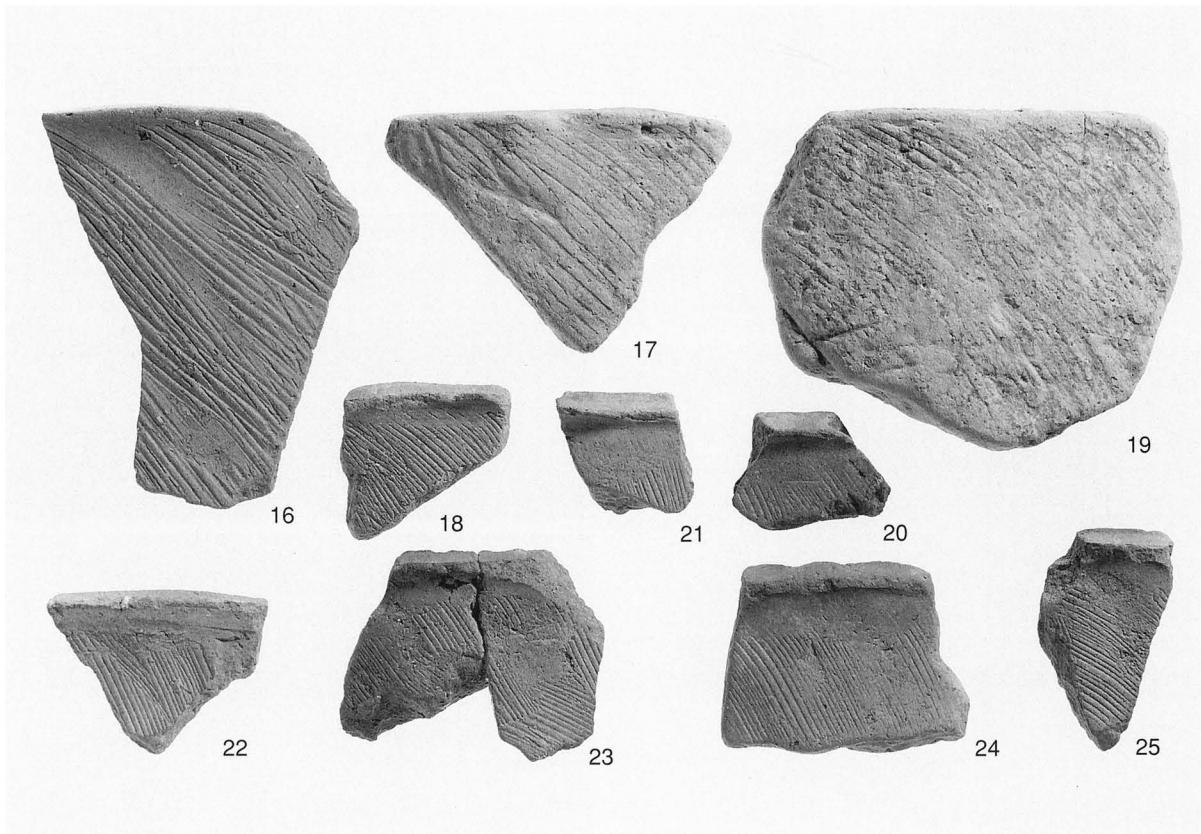
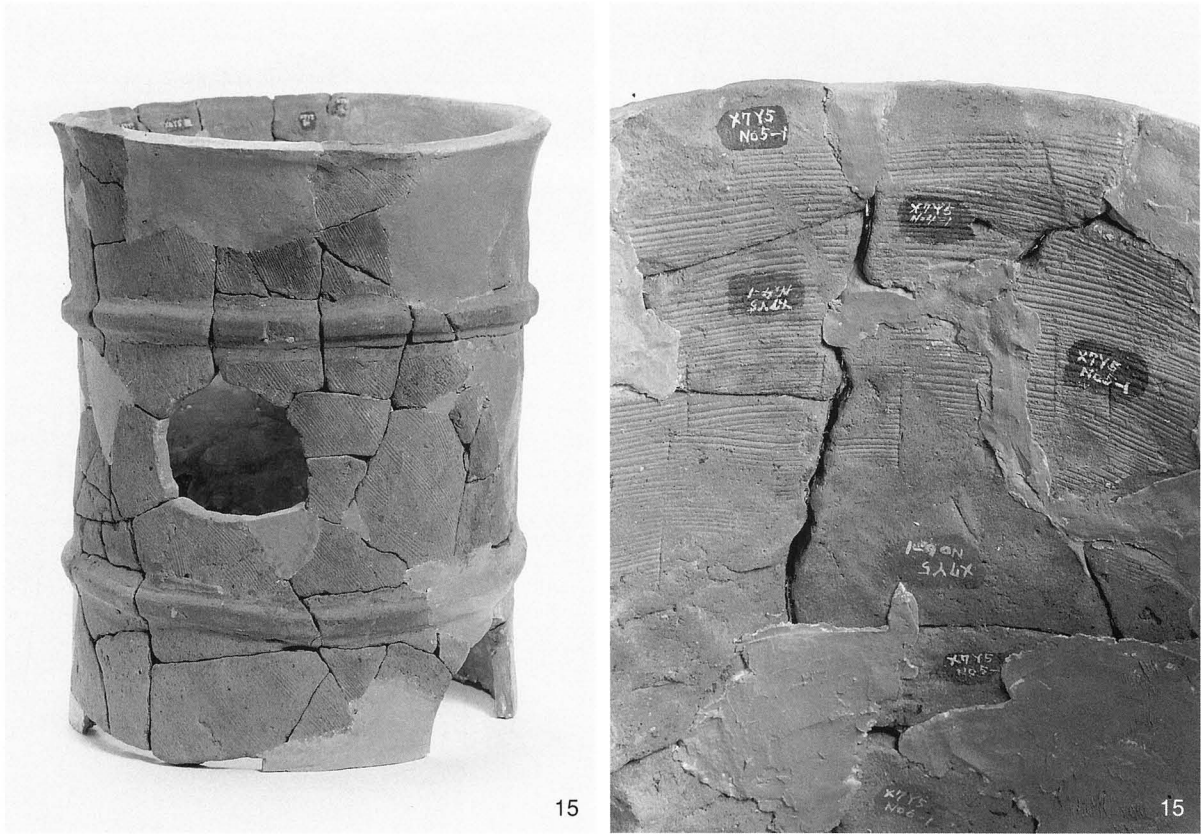


写真46 18号墳出土遺物 (2)

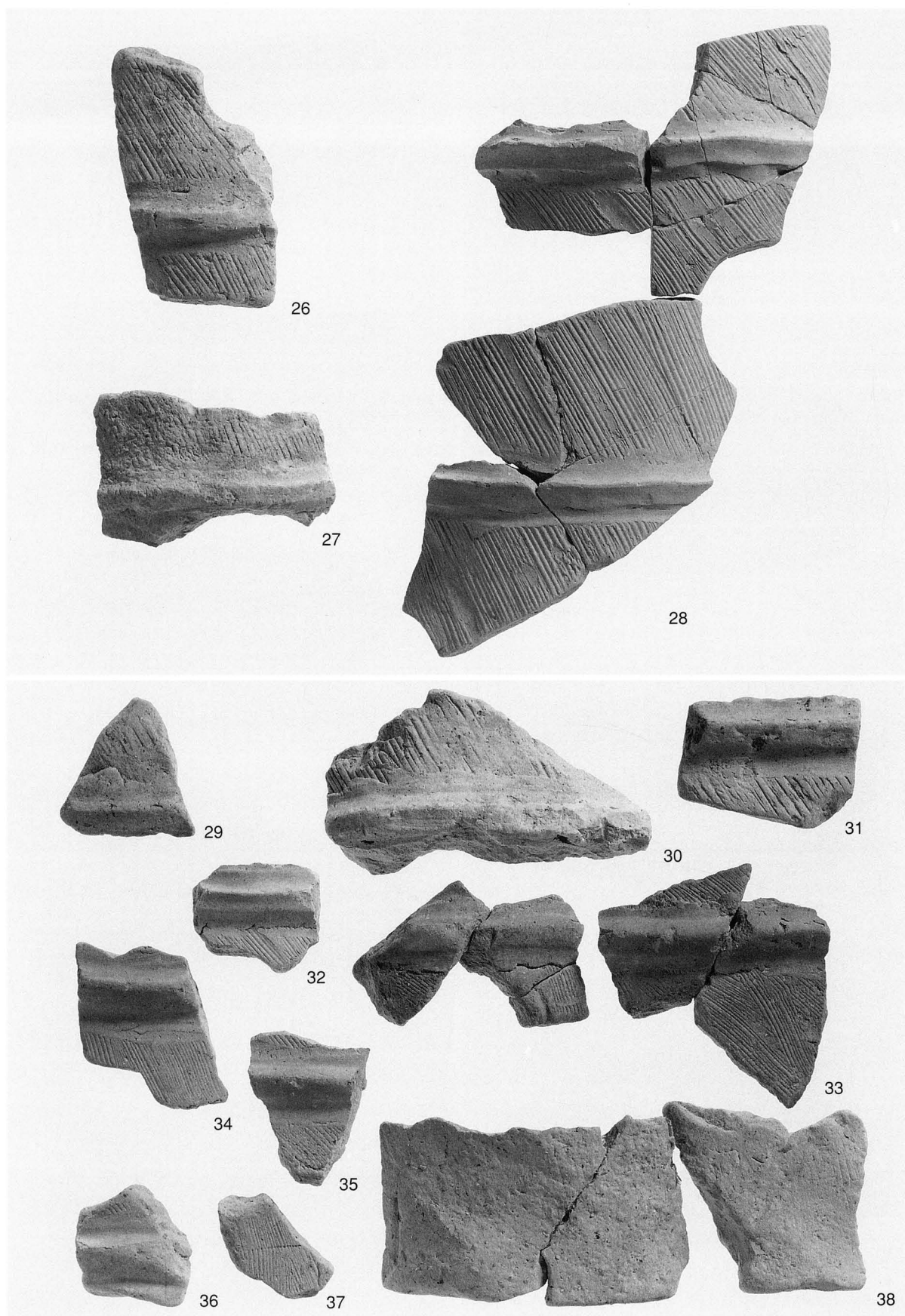


写真47 18号墳出土遺物 (3)



写真48 19号墳出土遺物 (1)

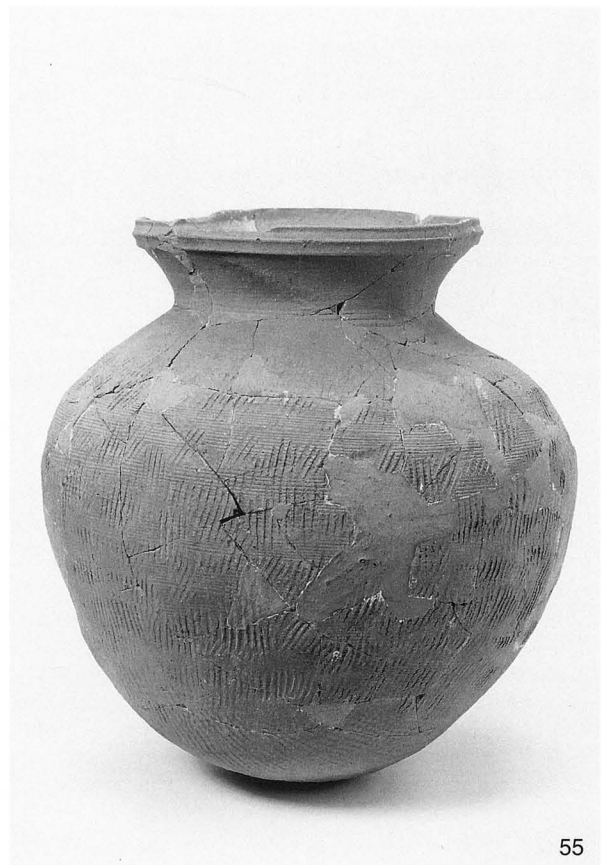


写真49 19号墳出土遺物 (2)

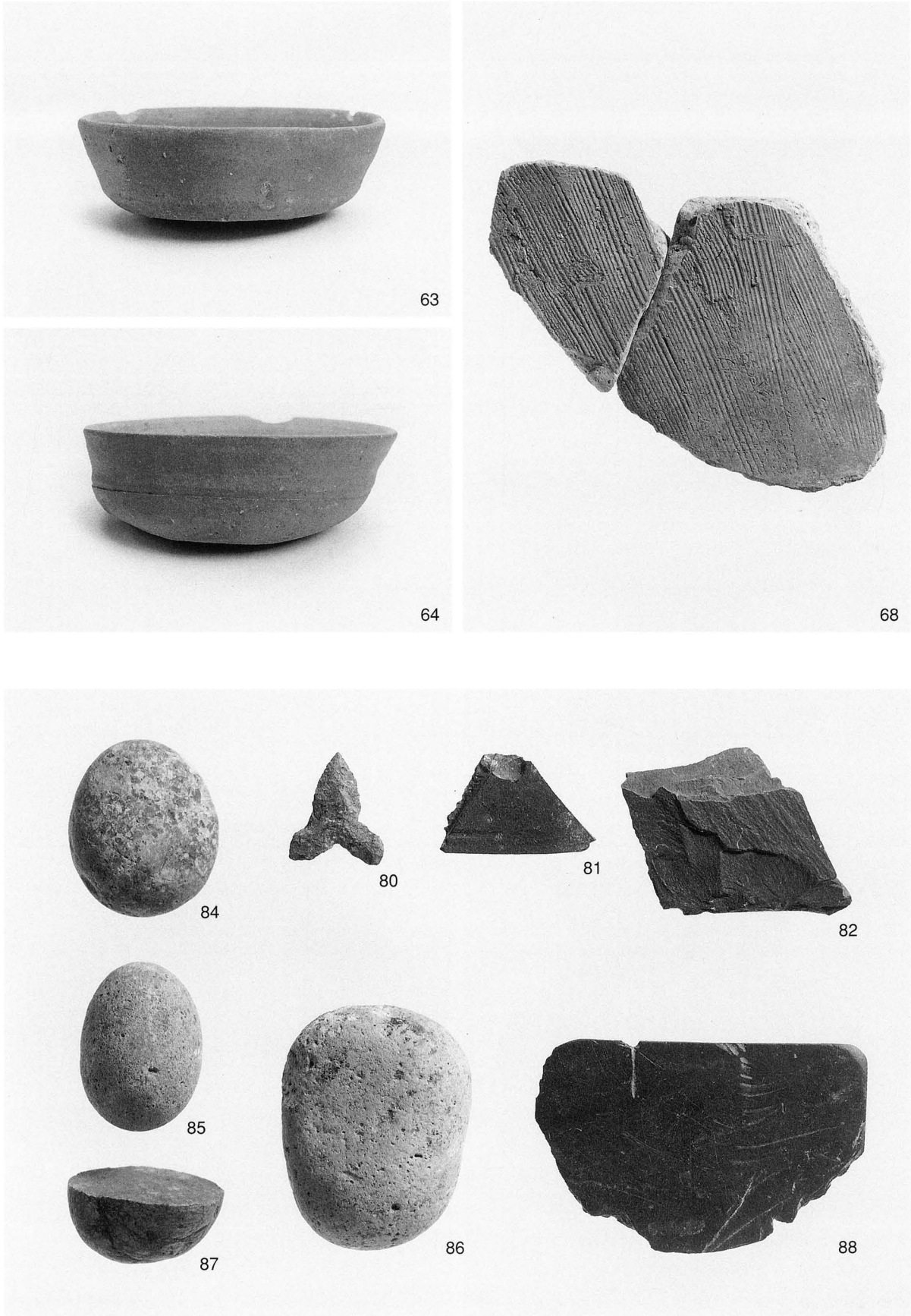


写真50 出土遺物 (SK8 : 63・64・グリッド他 : 68・80~82・84~88)

第8章 考 察

東野お茶屋台遺跡（3次）出土埴輪の諸問題 ～ 18号墳出土資料より ～

1. はじめに

東野お茶屋台遺跡3次調査では、破片ではあるが一定量の埴輪が出土している。特に18号墳出土の円筒埴輪については、全形が復元可能な個体はないものの、各部位の詳細な観察により、形態・調整、および製作技法上で幾つの特徴を見出すことが可能である。

そこで小稿では、18号墳出土埴輪に注目し、その諸特徴を抽出した上で周辺地域での出土資料との比較検討を行い、今後の出土資料観察における検討課題を提示することにしたい。

2. 東野お茶屋台遺跡（3次）18号墳出土埴輪の諸特徴

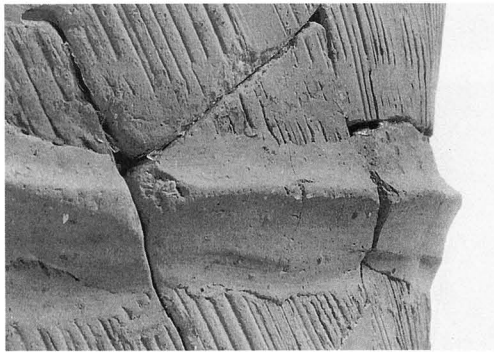
先述したように、本古墳出土埴輪はその全体を復元することは出来ない。そこで、破片資料の観察を通して抽出できる幾つの特徴を以下に挙げることにする（第45図参照）。

- ① 復元値にややばらつきはあるが、口縁部の残存している個体から推定すると、口径25cm前後である。また、口縁端部の形状には、大別して口縁端部が外方に尖るものと、あまり尖らないものの二種があるが、その比率は前者が多い。
- ② タガは最低3条以上巡っている可能性が高い。また、タガ断面形は「三角形状」を呈するものと、台形もしくは山形を呈するものの二種確認できる。
- ③ スカシ孔は全て円形で、復元可能な個体を見る限り、最上段を除く各段に2個ずつ、直角に交差しながら穿たれている。
- ④ 器面調整は、外面をタテおよびナナメハケ、内面指ナデ、指オサエ調整を施す。しかし、一部の個体には、口縁部内面に幅5～10cmの範囲にヨコハケ調整を施すものが確認できる（註1）。
- ⑤ 基底部は資料数が少ないため、確実なことは言えないが、ナデおよび指オサエにより調整が加えられている（自重による潰れが目立たない）。

以上の諸特徴を参考に、個体の分類を試みると、③・⑤は資料の不足はあるものの、概ね個体間での著しい相違は無いものと思われる。ここで相関関係があると予想されるのは②と④である。

つまり、口縁部と最上段タガが共に残存する個体を参考にすると、A：断面「三角形状」タガを有している個体に施されている器面調整は、外面に5～6本/cmのやや粗めのタテおよびナナメハケ、内面にはハケ調整が施されない。それに対し、B：断面台形もしくは山形のタガを有している個体には、外面に8～10本/cmのやや細かいハケ、内面にも10本/cm程度のヨコハケが施されている。

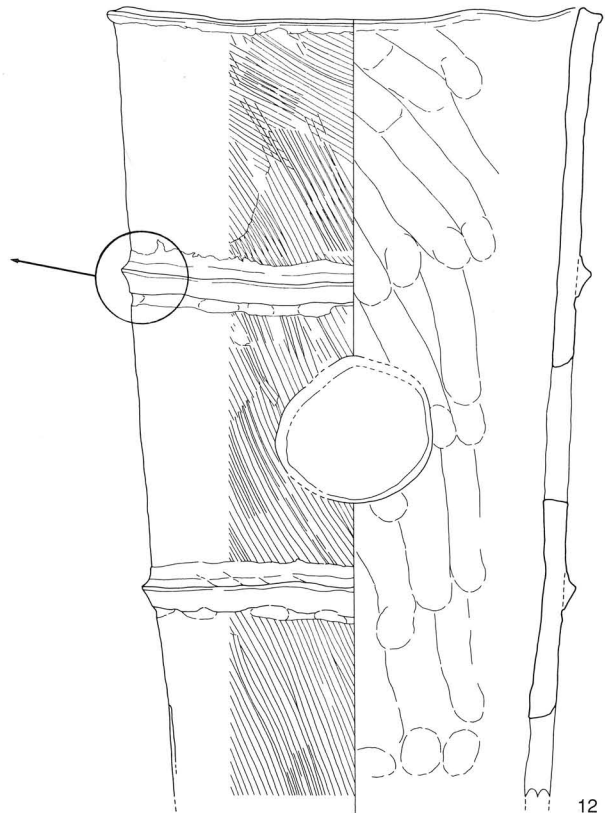
以上の検討より、本古墳出土の円筒埴輪には、タガ形状および器面調整の関係からみて、最低2種類のモデル（A・B）が採用されている可能性が高い。なお、①の特徴に関しては、A・Bで特別な統一性が見られず、口縁端部の外方への尖り具合も、詳細に観察すると決して一様な尖り方ではない。恐らく制作者のナデの強弱によるものであり、本古墳出土埴輪に関して言えば、強い規格性を有していたと判断するのは難しい。



(断面「三角形」タガ)

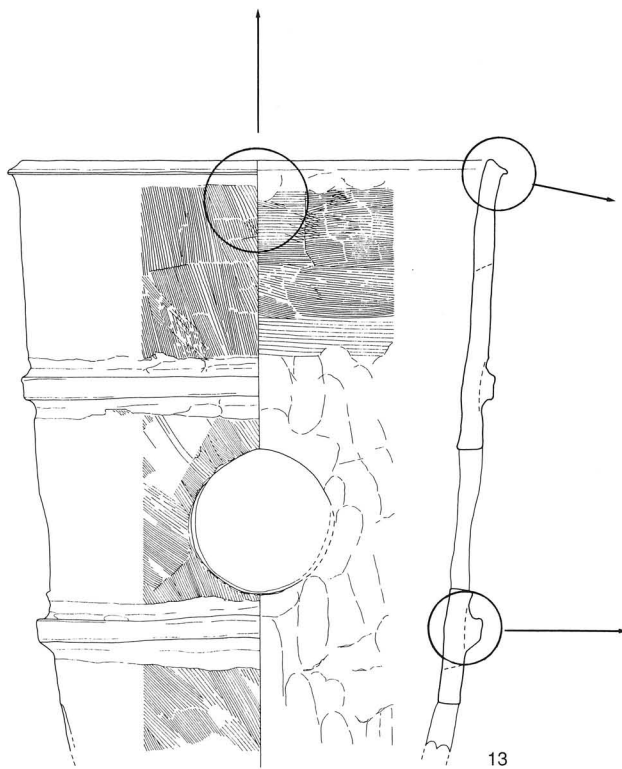


(口縁部内面)



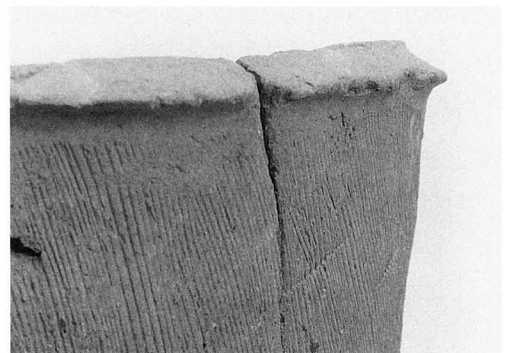
(Aタイプ)

12

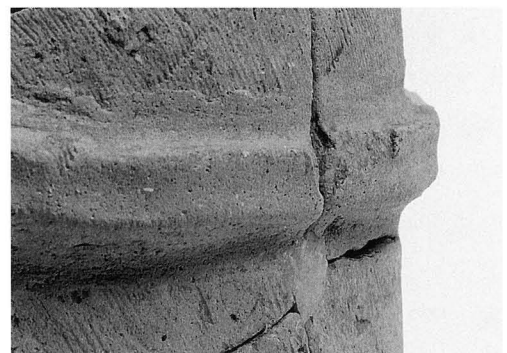


(Bタイプ)

13



(口縁端部)



(断面台形タガ)

第45図 18号墳出土埴輪・観察図

3. 断面「三角形状」タガについて

18号墳で確認された断面「三角形状」タガは、本古墳に限った形状ではない。筆者の知る限りでは、松山平野北部（重信川以北）に限定しても、主に5世紀末～6世紀前半の古墳出土埴輪で確認することがある。この類例に関しては、以前にも一部紹介したことがあるが（山内 2001）、その後、松山市・播磨塚天神山古墳出土の資料に同様の個体が含まれていることが判明するなど、その類例はさらに増加しているものと思われる。

そこで先ず、播磨塚天神山古墳も含め再度、断面「三角形状」タガの資料紹介を行う（第46図）。

(1) 播磨塚天神山古墳（吉岡 2001）

二段築成の前方後円墳であり、全長32.5 mを測る。墳丘上および墳裾流土内からは多量の埴輪が出土しており、中には「口縁部粘土帯突帯」を持つ埴輪も含まれている。

今回取り上げる断面「三角形状」タガは、報告書でのタガ分類ではⅠ・Ⅱ・Ⅳ類に相当する（註2）。ここで注目すべき点として、「口縁部粘土帯突帯」を持つ埴輪の殆どが、上記の「三角形状」タガを有するという特徴がある。これは粘土帯を口縁部に持たない普通の円筒埴輪には、断面M字状の低いタガを有するのと対照的であり、非常に興味深い。

(2) 大池東4号墳（高尾ほか 1998）

直径約13mの円墳であり、墳丘上および周溝から埴輪片が出土している。出土埴輪のタガ断面形は、低平ながらも台形を呈するものが主体を占めており、僅かに強いナデにより「三角形状」になった個体も散見される。

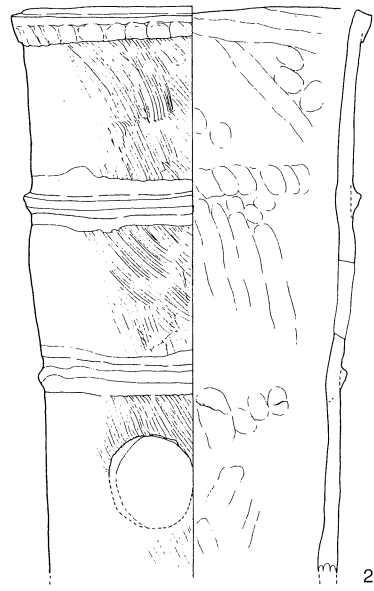
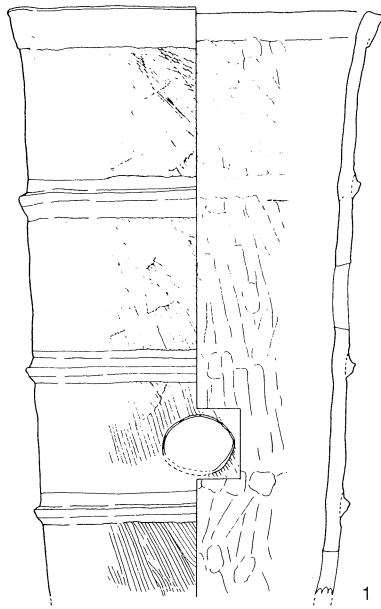
この他、鶴が峠4号墳（西川ほか 2001）などでも確認されているが、断面「三角形状」タガが主体を占めるものではないようである。

次に、これら断面「三角形状」タガの成形工程について若干触れておく。

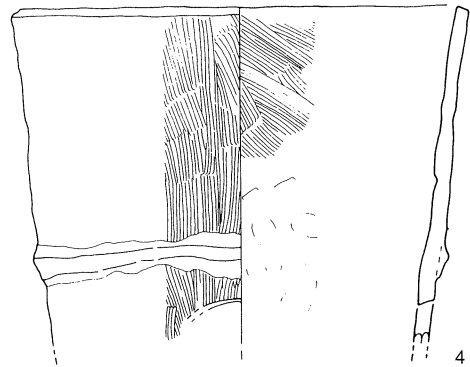
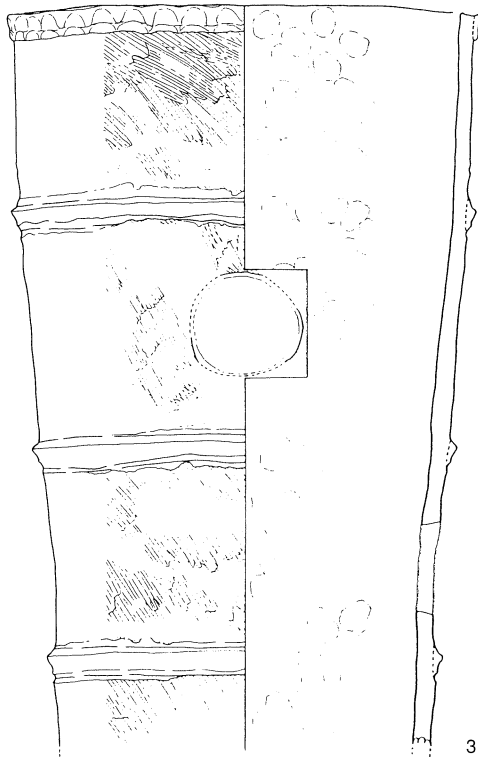
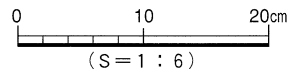
上述した断面「三角形状」タガを観察すると、タガ上に稜線が2本確認できることから、本来は断面台形様のタガが貼り付けられていた可能性が高い。しかし、その後、指による摘み上げや強いナデが片方だけに施される（もしくは片方の調整が甘い）ことによって、不整形な断面「三角形状」のタガが出来上がるようである。

ここで注意したいのが松山市・三島神社古墳出土の円筒埴輪である。このタガは、一見「三角形状」のように思えるが、観察の結果、断続ナデにより器壁に貼り付けた上から、再びヨコナデ調整を二次的に加えることで断面三角形に仕上げる手法を採っている（山内 2001）。そのため、成形途中の段階でタガ断面が台形状を呈することがなく、上述してきた断面「三角形状」タガの成形技法とは系譜を異にするものであると捉えている。

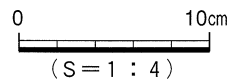
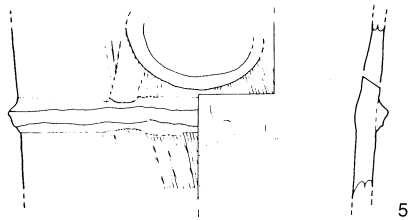
さらに、東野お茶屋台遺跡（3次）18号墳、大池東4号墳で確認された断面「三角形状」タガに加えて、断面台形の個体も多く含まれているという事象は、タガの退化が進行してゆく過渡的状況を示しているのではなからうか。つまり、タガ断面の相違が同一古墳内で確認できた場合、単純に埴輪自体の年代差として捉えるのは危険であると考えられる。



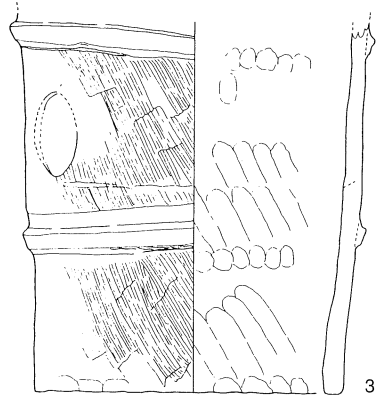
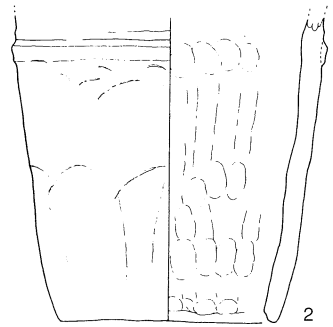
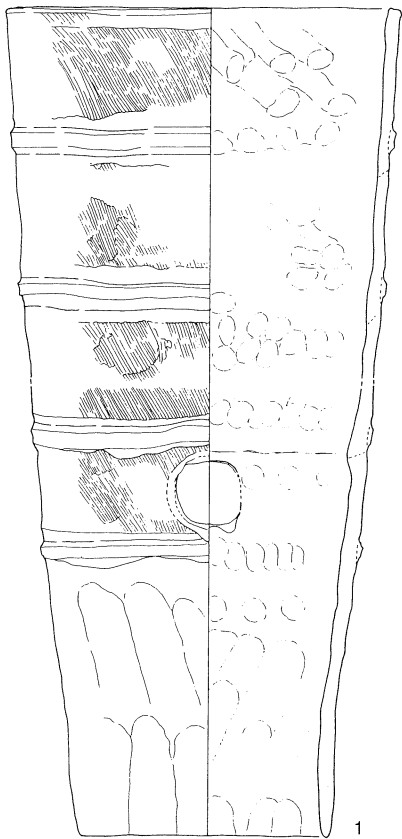
1～3：播磨塚天神山古墳



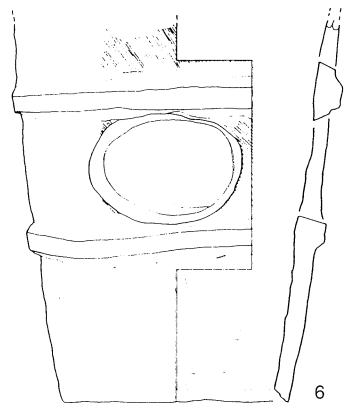
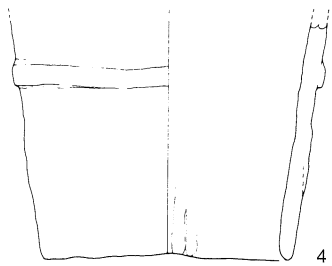
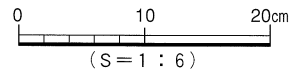
4・5：大池東4号墳



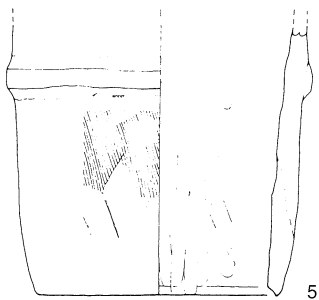
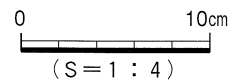
第46図 断面「三角形状」タガ・関係実測図



1 ~ 3 : 播磨塚天神山古墳



4 ~ 6 : 大池東 4号墳



第47図 基底部調整・関係実測図

4. 「底部調整」について

18号墳出土資料としては非常に少ないため、ここでは表採資料も含めて検討を加えたい。

本古墳で確認された基底部の調整は、外面タテハケのち端部付近をナデ、内面をナデのち指オサエによってなされている。そのため、底端部が自重により大きく潰れた跡が確認できない。逆に、底端部が尖るような形状を呈す個体も確認できない。

次に、前節で紹介した(1)・(2)の両古墳の埴輪について、基底部の調整を観察し、タガ形状との関連性を考えてみたい(第47図)。

播磨塚天神山古墳の出土埴輪に見られる底部調整は、タガ形状との関連性が強い。つまり、断面「三角形」タガを有している埴輪は、底端部の指オサエ・ナデ調整を施すことで、自重による粘土の潰れを消している程度であるのに対し、断面M字状のタガを持つ個体は、工具によるオサエ(タタキ?)により基底部が伸び、先端は尖っているのが確認できる。

また、大池東4号墳の底部調整は、外面ナデ・オサエによりタテハケを消しており、内面には指オサエ等が施されている。そのために比較的底端部は尖っているようである。なお、基底部の調整が施されている個体は、確認できた範囲では全てタガ断面が低い台形のものである。

ここで、「底部調整」という用語およびその工程について若干私見を述べることにする。「底部調整」という用語自体は、川西宏幸氏が言われているように、「軟弱な状態の底部がいきなり自重で圧せられ、変形しやすくなる」ために、「そこで変形を整える」技法という意味がある(川西1978)。しかし、実際は基底部についてもハケおよびナデ・オサエが一次調整として施されている訳であり、川西氏が指摘する「底部調整」とは、広義での「底部調整」の一工程を指しているに過ぎない。

そこで、本稿では混乱を避ける為、川西氏の言う製作最終段階での「底部調整」を「基底部再調整」(註3)、器面の一次調整(ハケ・ナデ・オサエなど)を「基底部一次調整」と呼称し、二つを合わせた一連の工程を総称して「基底部調整」として区別しておく。

あらためて18号墳出土資料に注目すると、基底部一次調整のハケが消されてはいるものの、底端部の形状より、最終段階で倒立させて基底部再調整を施したのではなく、正立したままの状態、自重による潰れを消すための再調整を行ったものと理解したい。それに対し、播磨塚天神山古墳の出土資料は、倒立させて基底部再調整を施した結果、底端部が薄く、かつ尖った形状を呈するのである。

5. まとめと今後の課題・観察視点

幾つかの特徴に的を絞り、東野お茶屋台遺跡(3次)18号墳出土埴輪の検討を進めてきた。最後に、分析の結果および今後必要となる基礎作業、および資料観察における観点について幾つか提示することで本稿の結びとしたい。

まず、本古墳出土埴輪の年代的位置付けであるが、埴輪単体で明確な年代を示すことは、県内の埴輪研究の現状では困難である。しかし、属性の諸特徴を勘案すると、概ね5世紀末～6世紀初頭の範疇におさまるものと考えている。但し、当該期の埴輪資料は、様々な面において過渡の様相を有している場合があるため、その位置付けには慎重を期すべきであろう。今後更なる資料の蓄積とその検証作業が必要となるのは言うまでもない。

また、形状および調整技法において、ある程度の規格性を有していることも明らかとなった。この

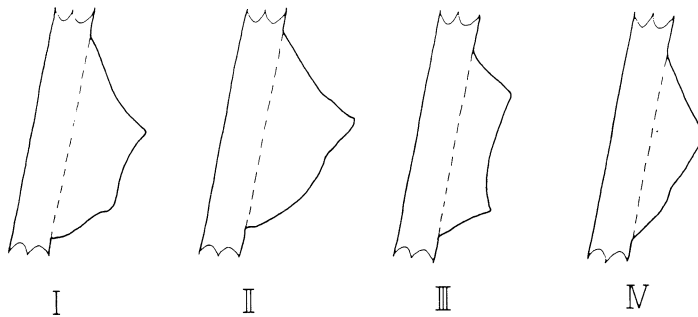
点に関しては、松山市・船ヶ谷向山古墳の出土埴輪についても同様のことが言えそうであり（山内2001）、その関連性も注目し得る。基底部再調整については、県内でも様々な技法が確認されていることから（註4）、今後はその広がりや「小地域性」を抽出するための基礎作業を、底端部の調整切り合い関係を把握しながら進めてゆく必要がある。

末筆になりましたが、今回執筆の機会を与えて下さった梅木謙一氏、また拙稿の執筆に関してご助言ご協力いただいた水口あをい氏、大西朋子氏には、心より感謝申し上げます。

（山内英樹）

〔註〕

- 1) 外面のヨコハケは、一部に静止痕らしきものが確認できることから、「B種ヨコハケ」の可能性が高い。なお、松山市船ヶ谷向山古墳出土の円筒埴輪にも、口縁部外面に同種のヨコハケがみられ、その類似性が注目される。
- 2) 報告書で引用されているタガ分類模式図を掲載しておく（吉岡2001）。



- 3) この「基底部再調整」は、埴輪製作工程の最終段階で施されたものと判断できる個体と、出来ない個体があり、今後さらなる検討・観察を要する課題である。
- 4) 筆者も以前大まかな分類を試みたことがある（山内2000）。

〔参考文献〕

- | | | |
|--------|------|---|
| 川西宏幸 | 1978 | 「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』64-2 |
| 高尾和長ほか | 1998 | 『大峰ヶ台遺跡-9次調査-』松山市教育委員会、財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター |
| 西川真美ほか | 2001 | 『鶴が峠古墳群（L区）』財団法人愛媛県埋蔵文化財調査センター |
| 山内英樹 | 2000 | 「愛媛県出土埴輪の基礎的研究（1）-谷田2号窯出土資料の再検討」『紀要愛媛』創刊号 財団法人愛媛県埋蔵文化財調査センター |
| | 2001 | 「愛媛県出土埴輪の基礎的研究（2）-特徴的な形態・技法を有する埴輪について-」『紀要愛媛』第2号 財団法人愛媛県埋蔵文化財調査センター |
| 吉岡和哉 | 2001 | 『播磨塚天神山古墳』松山市教育委員会、財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター |

第9章 調査の成果と課題

本書では、桑原地区の平地部の三遺跡と、丘陵部の一遺跡3次調査地について調査結果を報告した。最後に、各々の遺跡の関係と、評価を記述し、まとめとする。

平地部（桑原本郷遺跡・桑原遺跡・桑原小石原遺跡）

三遺跡中、最も注目されるのは桑原本郷遺跡である。竪穴式住居SB1と、祭祀遺構SX1は5世紀末の同時期と考えてよく、集落内の施設配置がよみとれる資料である。同時期の遺構を検出した近隣の遺跡には桑原田中遺跡、樽味高木遺跡、樽味四反地遺跡があげられ、桑原地区の平地部には集落の点在が認められている。また、平地部の南端部にある経石山前方後円墳が同時期になる可能性があり、その関係が注目される。

祭祀遺構は、松山平野では平野南部の松前町出作遺跡〔相田1993〕が著名であり、松山市内では辻町遺跡1・2次調査地〔梅木・真木1992、河野・相原1995〕が知られるところである。本例を含めいずれもその時期は5世紀後半で、須恵器、土師器、白玉が伴うことから、当時の松山平野での祭祀行為及び用具の典型がみとれる。

丘陵部（東野お茶屋台遺跡1～3次調査地）

東野お茶屋台古墳は、古くから周知された古墳群であるが、今回本報告に際し古墳番号の変更と諸資料の修正にせまられた。お茶屋台跡は、松山藩の庭園であり、古墳の丘状地形を取り込みながら造園されたことが、その分布状況から考えられる。

1～3次調査地は同丘陵かつ同斜面上にある。このことより、古墳群の形成範囲の西端が1次調査地と2次調査地との間にあることが判明し、2～3次調査地一帯には少なくとも10基を越える古墳が存在していたことになる。これ等古墳の造営は、これまでのところ5世紀後半からで、同地は3次調査地土坑墓SK8の検出より、7世紀代まで墳墓地帯であったとみられる。

今回確認した古墳はいずれも円墳で、周溝内祭祀がみられ、埴輪の樹立は14号墳と18号墳の2基が確実な例になる。特に18号墳の埴輪は出土量が多く、遺存もよく、埴輪の諸属性の検討には良好な資料を提供することになった（第8章考察 山内英樹）。

東野お茶屋台遺跡は古墳だけでなく、弥生時代前期、後期、古墳時代初頭の遺物の出土より、集落遺跡の可能性も垣間見られ、うち2次調査地SD1出土の東阿波型土器は、県下でも確実な資料としては初例となり注目される資料である。

さて、平地部と丘陵部との関係について触れておく。5世紀末の集落は桑原地区の平地部に散在し、その南端には前方後円墳があり、東野～畑寺の丘陵部には円墳の群集墳が形成されるという地域復元が可能になってきた。住居址の検出が今以上に増加し、出土品の比較検討が進めば、より詳細な集落と墓との関係が求められてくるであろう。

〔文 献〕

- | | | |
|-----------|------|--|
| 河野史知・相原浩二 | 1995 | 『辻町遺跡－2次調査地－』松山市教育委員会、財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター |
| 梅木謙一・真木 潔 | 1992 | 「辻町遺跡」『朝美澤遺跡・辻町遺跡』財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター |
| 相田則美 編 | 1993 | 『出作遺跡』松前町教育委員会 |

報告書抄録

ふりがな	くわばらちく いせき							
書名	桑原地区の遺跡Ⅳ							
副書名	桑原本郷、桑原、桑原小石原、東野お茶屋台1次・2次・3次							
巻次								
シリーズ名	松山市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第86集							
編著者名	梅木謙一・栗田茂敏・宮内慎一・山内英樹							
編集機関	松山市教育委員会・財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター							
所在地	市教委：〒790-0003 松山市三番町6丁目6-1 TEL 089-948-6605 埋文：〒791-8032 松山市南斎院町乙6-7-6 TEL 089-923-6363							
発行年月日	西暦 2002年3月29日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
くわばらほんごう 桑原本郷	まつやましくわばら 松山市桑原4丁目 7-40・7-1	38201		33°49'45"	132°47'41"	19850927～ 19851017	365	宅地造成
くわばら 桑原	まつやましくわばら 松山市桑原7丁目 3-27	38201		33°49'33"	132°47'45"	19750524～ 19750529	100	宅地造成
くわばらこいしぼら 桑原小石原	まつやましくわばら 松山市桑原6丁目 4-42	38201		33°49'44"	132°47'33"	19770302～ 19770325	1,392	宅地造成
ひがしのおちゃやだい 東野お茶屋台1次	まつやましひがしの 松山市東野5丁目 甲898-48	38201		33°51'09"	132°48'11"	19760416～ 19760430	495	教会建設
ひがしのおちゃやだい 東野お茶屋台2次	まつやましひがしの 松山市東野5丁目 甲898-14	38201		33°51'08"	132°48'14"	19760513～ 19760614	532	宅地造成
ひがしのおちゃやだい 東野お茶屋台3次	まつやましひがしの 松山市東野5丁目 甲898内	38201		33°51'06"	132°48'18"	19770705～ 19770727	1,470	宅地造成
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項		
桑原本郷	集落	古墳	縦穴式住居址 祭祀遺構			須恵器・白玉196点		
桑原	集落	不明	性格不明遺構					
桑原小石原	集落	中世	自然流路		中世土師器・ 弥生土器			
東野お茶屋台1次	集落	弥生	溝		弥生土器			
東野お茶屋台2次	墳墓	古墳	周溝・溝・土坑		須恵器・土師器	東阿波型土器		
東野お茶屋台3次	墳墓	古墳	周溝・土坑		ハニワ・須恵器			

写真図版データ

1. 遺構は、67判・35mm判で撮影した。
2. 遺物は、4×5判または69判で撮影した。すべて白黒フィルムで撮影したが、桑原本郷遺跡、白玉および東野お茶屋台遺跡3次調査 No68は、カラーでも撮影している。

使用機材：

カメラ トヨビュー45G・69ロールフィルムホルダー
レンズ ジンマー S240mm F 5.6 他
ストロボ コメット/C A32・C B2400
スタンド他 トヨ無影撮影台・ウエイトスタンド101
フィルム 白黒 コダックプラスXパン
カラー コダックエクタクロームEPP

3. 白黒写真は、等倍で印刷原稿に使用できるように焼き付けている。

使用機材：

引伸機 ラッキー450MD・90MS
レンズ エル・ニッコール135mm F 5.6 A・50mm F 2.8 N
印画紙 イルフォードマルチグレードIVRC

【参考】『埋文写真研究』Vol.1～12

〔大西 朋子〕

松山市文化財調査報告書 第86集

桑原地区の遺跡Ⅳ

平成14年3月29日 発行

編集
発行

松山市教育委員会
〒790-0003 松山市三番町6丁目6-1
TEL (089) 948-6605

財団法人 松山市生涯学習振興財団

埋蔵文化財センター
〒791-8032 松山市南斎院町乙67番地6
TEL (089) 923-6363

印刷

原印刷株式会社
〒790-0056 松山市土居田町396-6
TEL (089) 974-8711